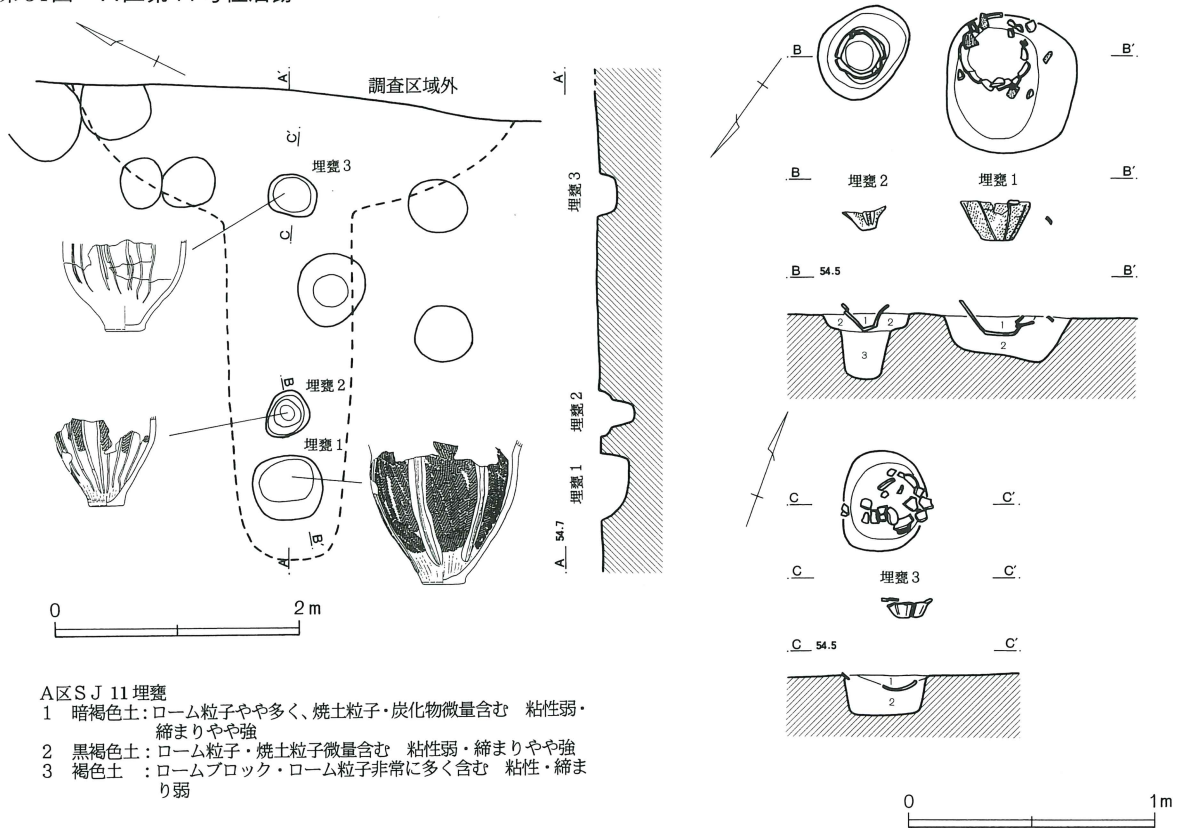


第34図 A区第11号住居跡



りに石材が集積し、また上面がトレンチャーによる攪乱を被っていることから本来石囲炉であった可能性がある。現状での直径約60cm、深さ24cmを測る。また、炉跡の南東30cmで埋甕を検出している。

出土土器 (第32図・第33図)

1は埋甕である。磨消し懸垂文のみられる底部であるが、胴部の立ち上がりの角度から深鉢以外に浅鉢や両耳壺の可能性もある。現存高7.5cm、底径8cmを測る。

2以下に提示した破片資料は炉跡および埋甕の周辺から出土したものである。一見して時期的なまとまりに欠けるが、炉跡と埋甕が近接する点、また埋設された土器自体の時期を基準とするならば、8～35等が本住居跡に伴う可能性が比較的高いことになる。いずれ帰属の不確かな資料であるためここでは参考資料として呈示するにとどめる。

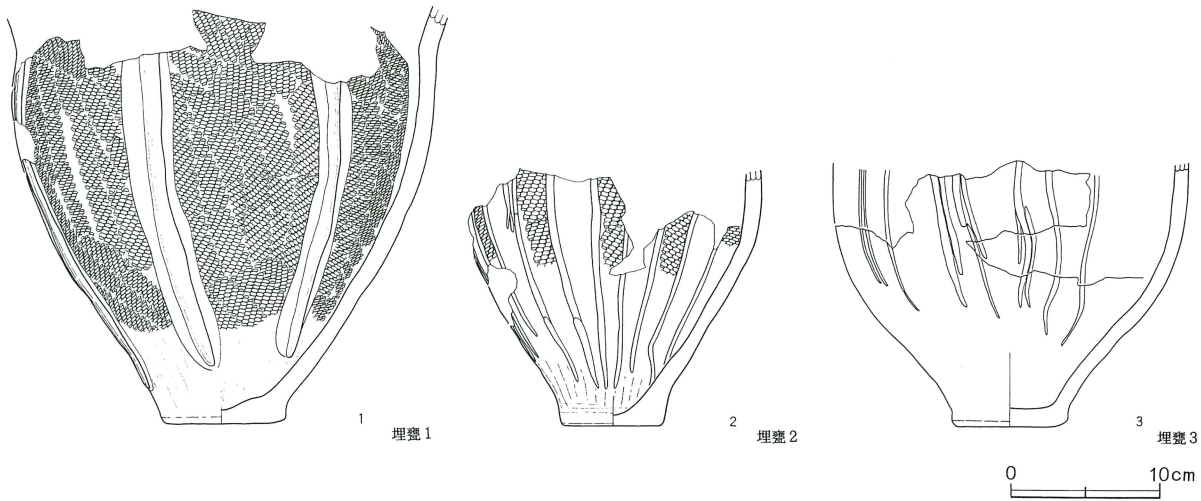
A区第11号住居跡 (第34図・第35図)

H-6区に所在する。3基の埋甕が直列して検出さ

れたもので、当初個別の屋外埋甕として記録したものの、平面上の位置関係や埋設された土器の時期等から柄鏡形住居跡の柄部のみを検出したものと最終的に判断した。本遺跡における遺構配置や主軸のあり方から、本住居跡の炉跡は調査区域外に所在する可能性が高い。この仮定に基づいて、一列に並ぶ埋甕を柄部の先端と思われる側から順に埋甕1・2・3と命名した。埋甕1～3までの距離は約2.7mであり、柄部先端と考えられる埋甕1・2はほぼ隣り合って埋設される。これはA区S J 48、D区S J 32等、本遺跡における中期末葉の柄鏡形住居跡における埋甕どうしの位置的・距離的な関係とも近いように思われる。埋甕はいずれも胴上半部を欠失するため、本来の床面は検出面より上にあった可能性がある。

本住居跡の規模は不明だが、先に述べた埋甕間の距離から大ざっぱに割り出すなら6m強～7mの、この時期としては比較的大型の柄鏡形住居跡であるものと推察される。主軸はN-63°-Wを指す。確実に伴う

第35図 A区第11号住居跡出土土器



柱穴は特定できなかった。

出土土器（第35図）

1は埋甕1である。両側になぞりを加えた扁平な隆帯による懸垂文がみられる。梶山類の胴下半部とみられるが、それにしては懸垂文の間隔がゆったりし過ぎるようでもある。

地文はRL単節の縄文で、最初隆帯間を埋めるように縦位に施文した後、底部に近い部分と胴部中段のくびれの部分を横・斜め方向の回転で重ねて施文している。これは施文単位末端の不揃いを解消すると同時に、施文単位の異なる縄文によって上下を区画された文様帯としての意図を示すものとも言え、胴上半部・下半部に2段構成の文様帯を形成する梶山類一般の特徴を想起させる。底部周辺には縦位の磨きが施される。現存高27.3cm、底径8.4cmを測る。

2は埋甕2である。深鉢胴下半部から底部にかけて残存し、縦位の磨消し懸垂文がみられる。地文はRL単節の縄文で、縦位に施文される。懸垂文の下端では全面に縦位の磨きが施され、特に底部の直上では横方向の磨きが加わる。現存高16.8cm、底径68cmを測る。

3は埋甕3である。深鉢胴下半部から底部にかけて残存するが、球状に張り出す胴下半部から底部へと急激にすぼまる器形で、3個体のうちでは特異なプローションである。全面に縦位の沈線のみが乱雑に描

かれ、縄文は施文されない。現存高17.8cm、底径7.6cmを測る。

A区第13号住居跡（第36図）

G-8区に所在する。炉跡を中心に、大小のピット群のみが7m×6.5mにわたって分布する。第29・30号土壇と重複するが、新旧関係は明らかでない。

ピットは炉跡の南東部分でより密集する。深さは10cm前後から深いもので55cmを測る。ただし、すべてのピットが本住居跡に属するものかは不明である。

炉跡はピット群のほぼ中央に位置する。不整形の地床炉で、径約1m、深さ18cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

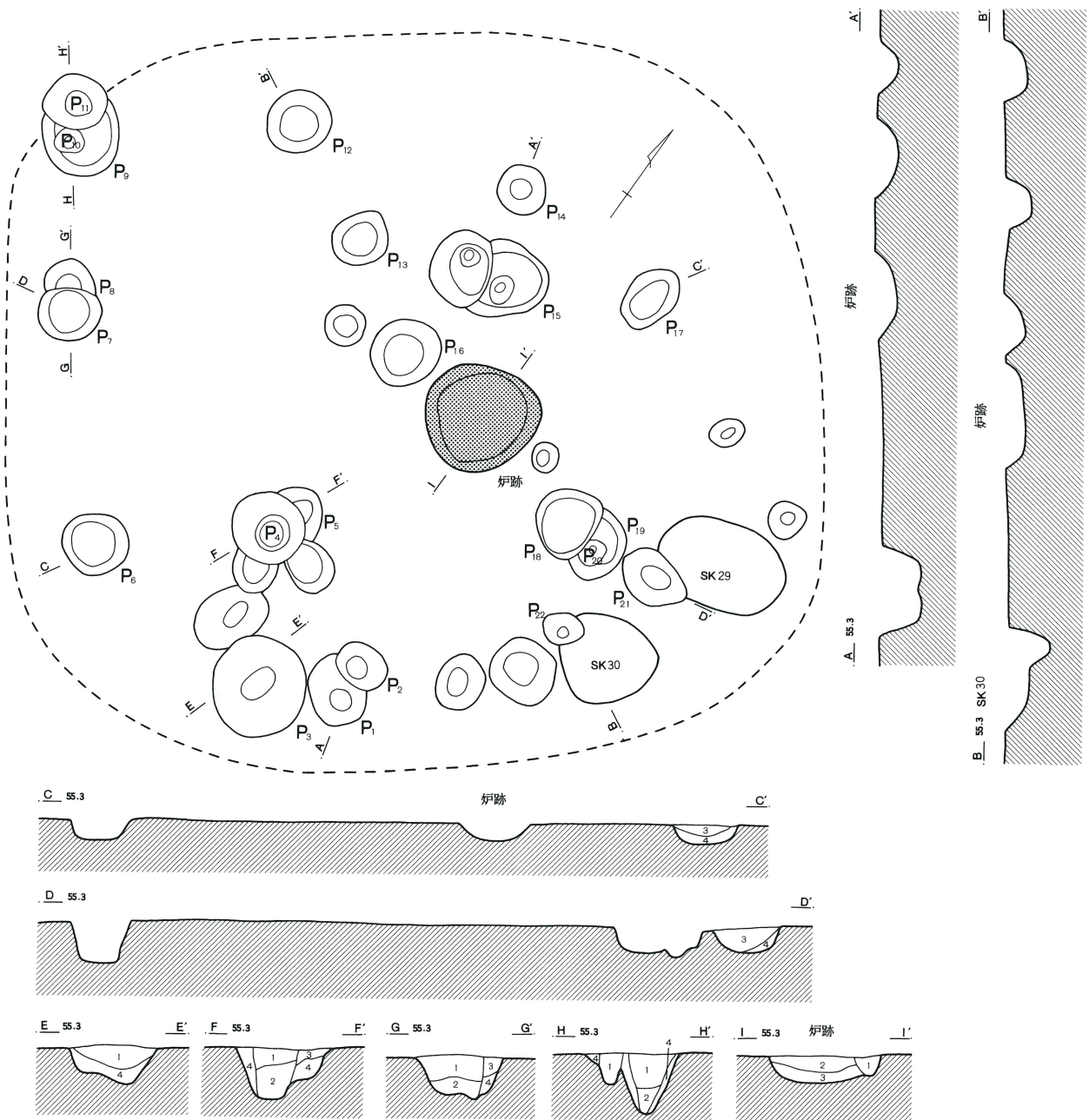
A区第14号住居跡（第37図）

F-8・G-8区に所在する。炉跡を中心に大小のピット群が径約5.5mの範囲に分布する。ピットは炉跡北側で特に密集し、東側の一角では空隙を生じている。特に深さ30cm～40cmのものが炉跡を環状に取り巻くように並んでおり、円形プランの住居跡の壁柱穴を構成するものと思われるが、図示したピットのすべてが本住居跡に属するものであるかは確認がない。

炉跡は不整形の地床炉である。径約80cm、深さ22cmで、覆土中に礫を検出した。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第36図 A区第13号住居跡



A区S J 13

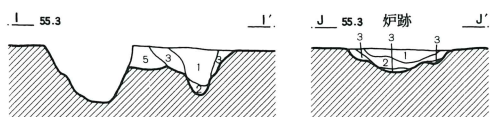
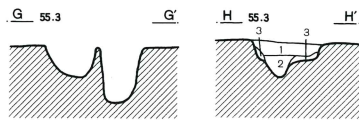
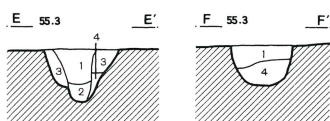
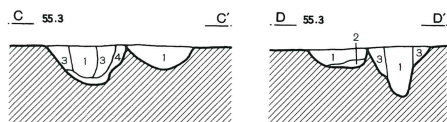
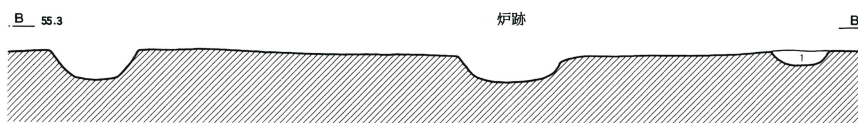
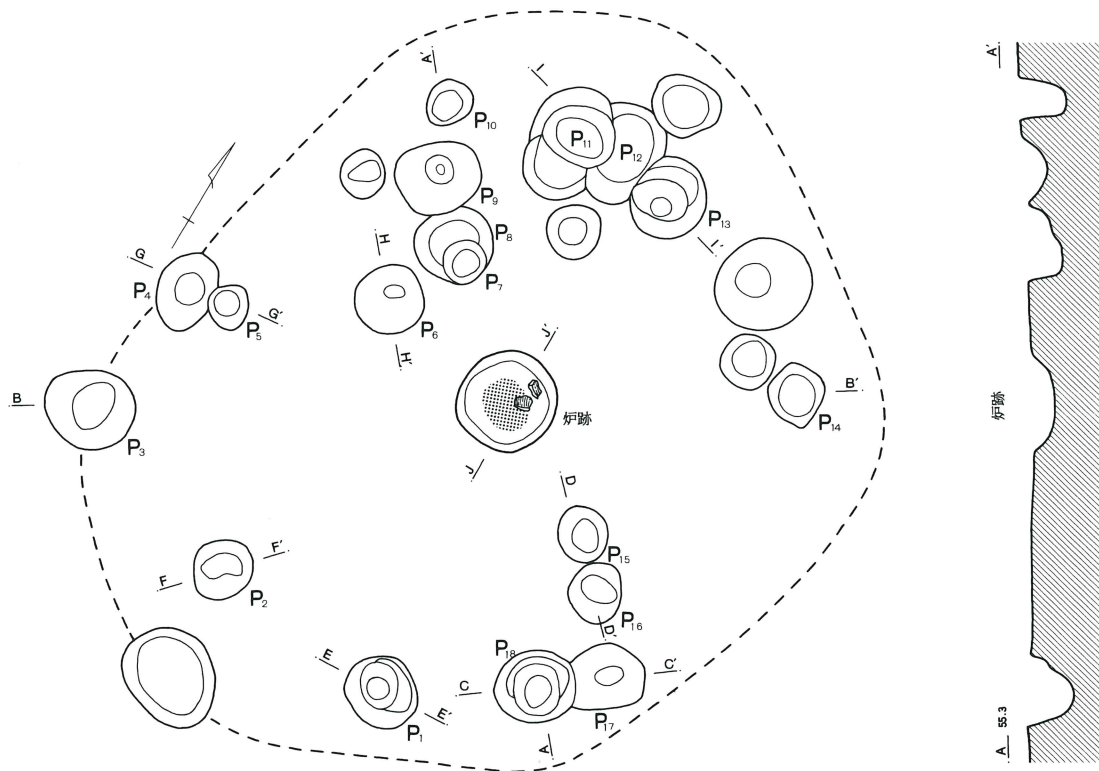
- 1 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
- 2 褐色土 : ローム粒子少量含む
- 3 暗褐色土 : 少量のロームブロックと、微量のローム粒子含む
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む

A区S J 13 炉跡

- 1 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック微量含む
- 2 暗赤褐色土 : 焼土粒子少量、ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 3 暗赤褐色土 : 被熱・硬化したロームブロック多く含み、焼土粒子少量含む

0 2m

第37図 A区第14号住居跡



A区S J 1 4

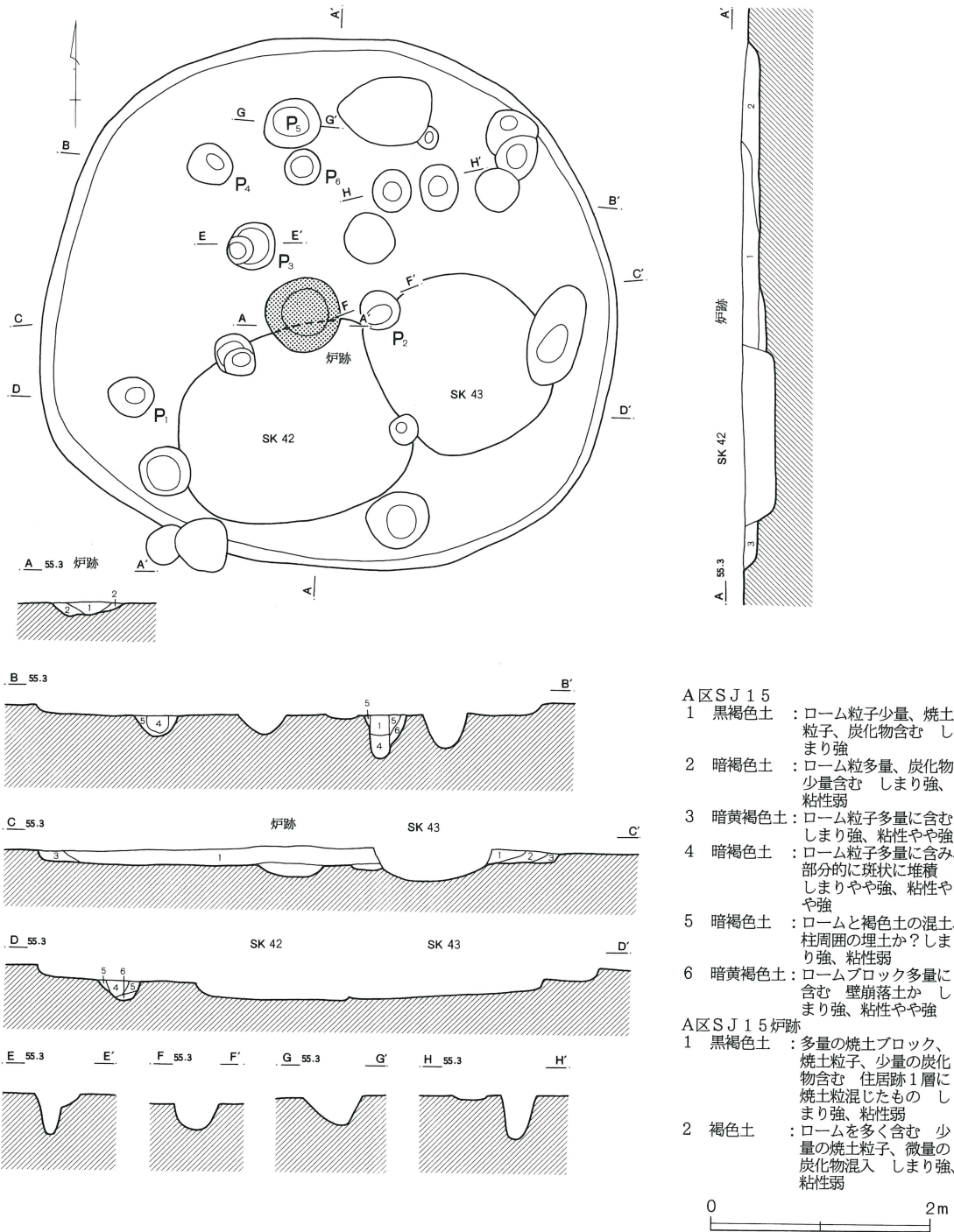
- 1 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
- 2 褐色土 : ローム粒子少量含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子微量含む
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック若干含む
- 5 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む

A区S J 1 4 炉跡

- 1 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子微量含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・焼土粒子を多く含む
- 3 暗褐色土 : 焼土ブロックを少量含み、非常に硬く締まっている底面に焼土ブロック集中粘性弱



第38図 A区第15号住居跡



A区第15号住居跡 (第38図～第41図)

E-8・F-8区に所在する。第42・43号土壌に切られる。台形に近い楕円形の住居跡で、平面形態からはほぼ南北に主軸を持つものと考えられる。南北4.8m、東西5.23m、主軸はN-2°-Eを指す。

壁高は10cm前後で、立ち上がりは比較的緩やかである。床面はほぼ平坦だが炉跡周辺でわずかに高く、ま

た全体に南に向かってわずかに傾斜する。

床面上からは16本のピットが検出された。深さは15～40cmで、炉跡北側で極端に密集しており、これらの一部は別の遺構に伴うものである可能性がある。支柱穴配置は不明である。

床面ほぼ中央で炉跡を検出した。南壁を第42号土壌によって破壊されるが不整形の地床炉と思われる、径

66cm、深さ12cmを測る。焼土の検出はさほど顕著ではない。

遺物は、ピット類の検出されなかった床面西壁寄りの部分でまとまって出土した。大半が縄文時代中期末葉に属する土器片で、他に少量の石器が出土している。

出土土器（第40図・第41図）

1はキャリパー類深鉢口縁部の大破片である。口縁部文様帯における渦巻文は隆沈線による円形区画へと変化し、この部分が小波状口縁の波頂部となる。円形区画の左右には長楕円形の区画文が連続するものとみられる。楕円区画を隔てる隆帯上には2個一単位の円形刺突が配され、この部分の口唇にも小突起が付される。

胴部には磨消し懸垂文が展開するが、これは逆U字状の懸垂文とわらび手状の沈線が交互に配されるものである。地文はL無節の縄文である。現存高13.5cm、口径24cmを測る。

2は浅鉢形土器の口縁部である。口縁やや内屈し、

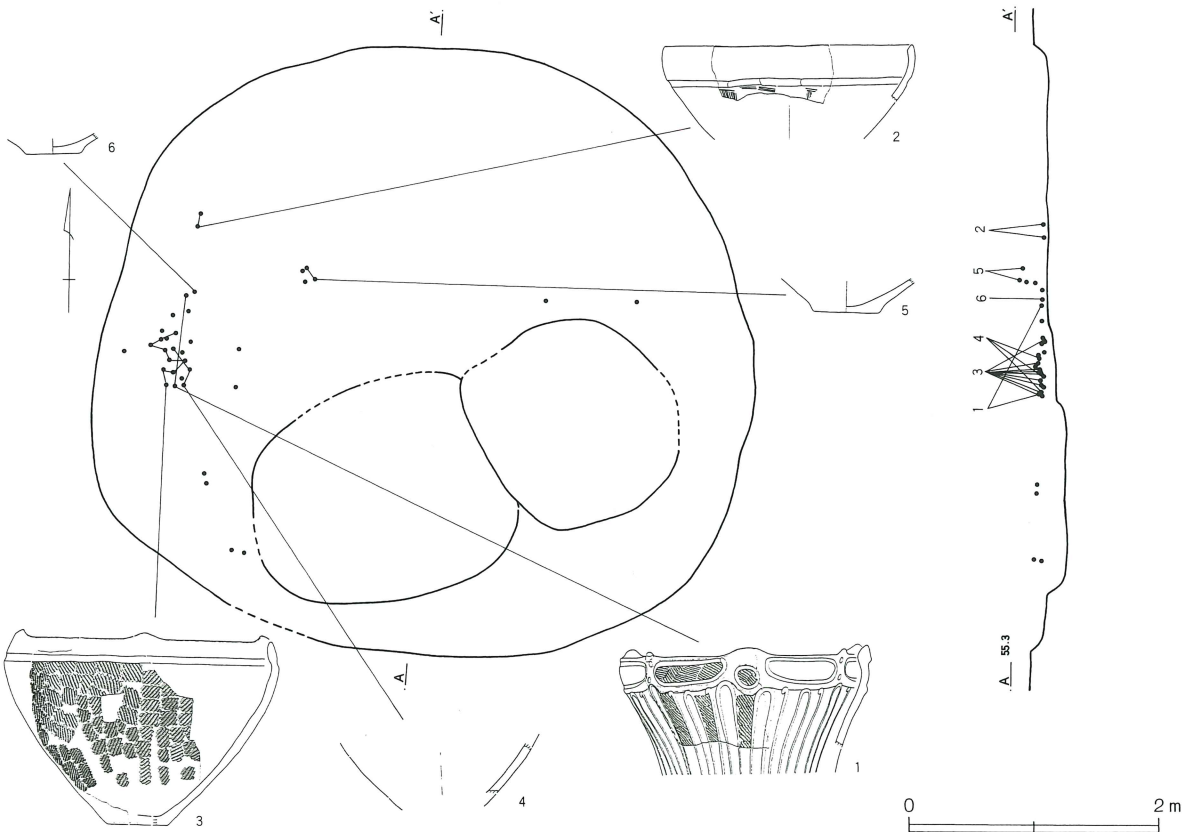
胴部との境に1条の沈線が巡る。胴部には櫛歯状工具による条線が施文される。口唇断面内削ぎ状を呈する。現存高7.9cm、口径33.1cmを測る。

3も浅鉢形土器で、口縁から底部にかけて残存する大破片である。底部から胴部にかけてわずかに内湾しつつ立ち上がり、口縁で内屈する。小波状口縁で、口縁と胴部との境には1条の沈線が巡る。胴部にはRL単節の縄文が斜位から縦位に施文される。器高25cm、口径35cmを測る。

4は浅鉢胴部である。外面に櫛歯状工具による条線を施文し、内面に赤色顔料が付着する。現存高6.2cm、最大径24.3cmを測る。

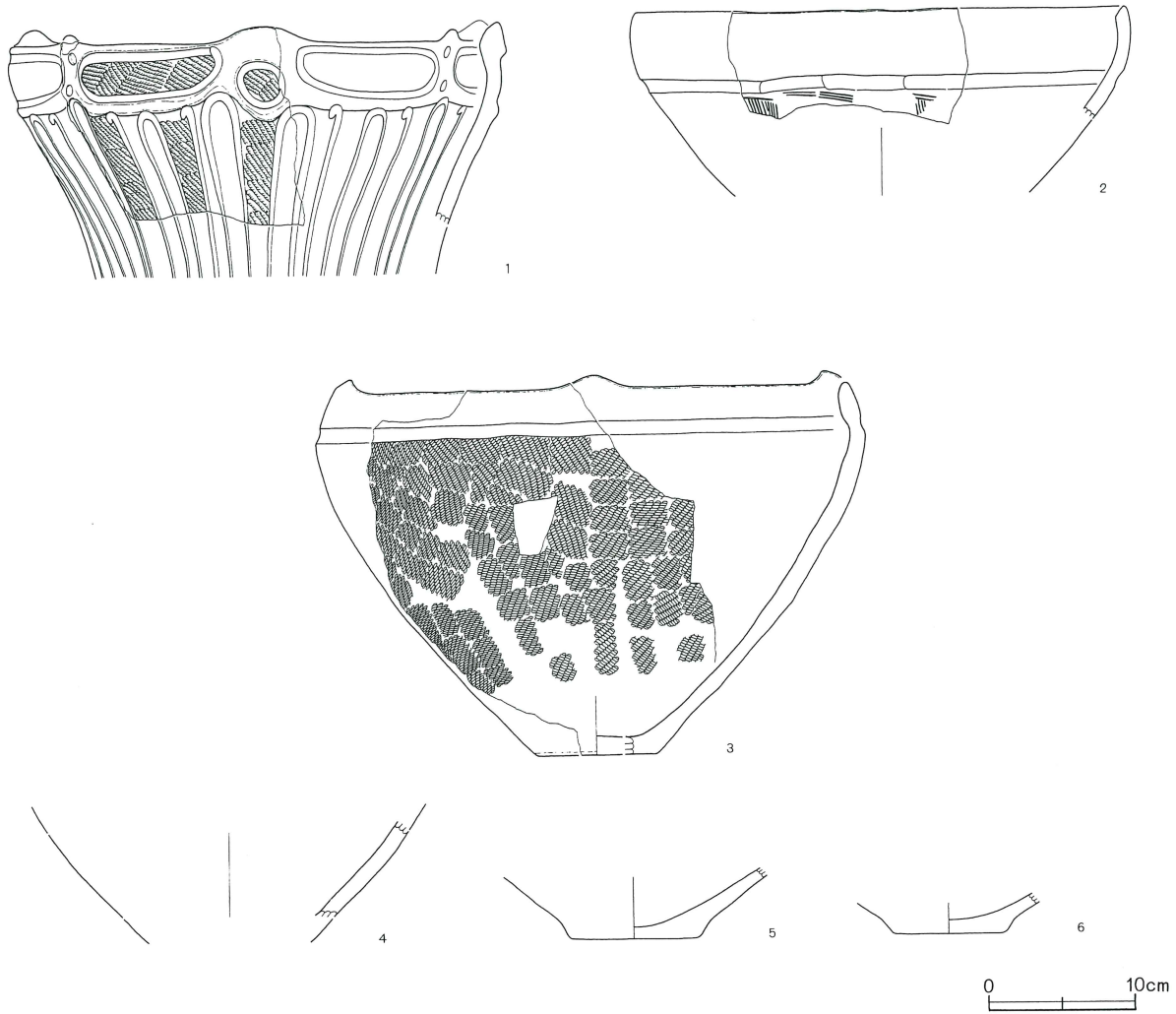
5・6は浅鉢底部である。いずれも無文で、外面に横位の削り調整がみられる。底径は5が8.3cm、6が7.5cmを測る。

7～9はキャリパー類深鉢の口縁部で、なぞりを加えた隆帯によって横S字や渦巻等のモチーフが描かれるものである。10は同様の深鉢の胴上半部で、頸部と



第39図 A区第15号住居跡遺物分布図

第40図 A区第15号住居跡出土土器（1）



胴部を区画する隆帯から縦位の隆帯懸垂文が垂下する。地文は燃糸文である。11は浅鉢の口縁部である。外屈する口縁で、頸部に段を持つ。口唇平坦で断面角頭棒状を呈する。

12・13は無文の口縁部である。曾利系の深鉢か無文の浅鉢の口縁部であると思われ、12は断面丸棒頭状を呈し、13は内面に断面三角形の稜を成す。

14は燃糸文の施文される深鉢胴部、15は半裁竹管状工具による条線が施文される底部である。以上は本住居跡より古い段階のもので、覆土中への混入と思われるものである。

16～18はキャリパー類の深鉢の口縁部である。扁平な隆沈線によって口縁部の文様が描かれる。16は形骸化し楕円文化した隆帯渦巻文である。17は波状の隆帯

によって半月状の区画が構成される。18は小波状口縁を成すものと思われ、隆帯上に円形の刺突がみられる。

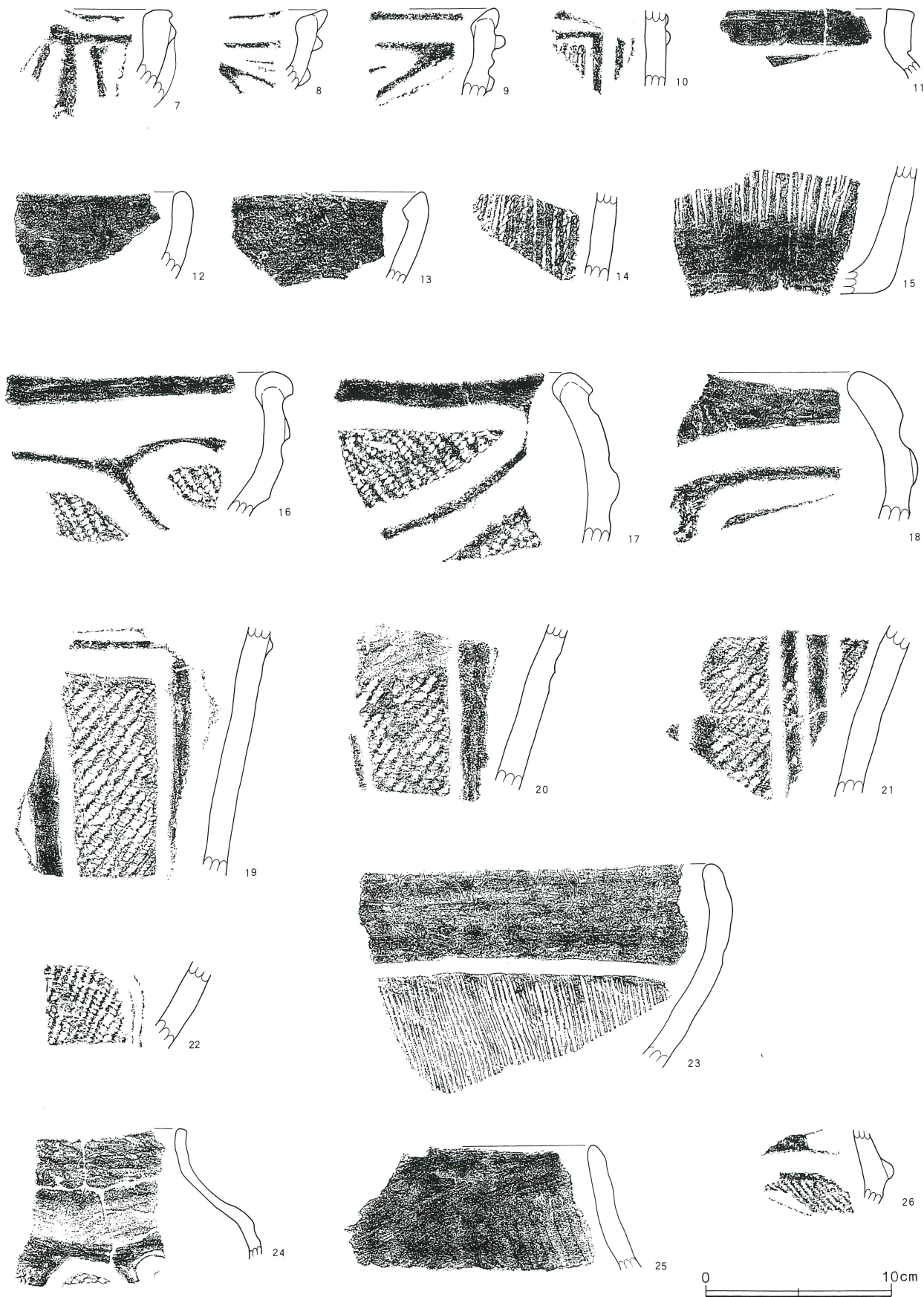
19は頸部から胴部にかけての破片である。横位の隆沈線により両者を区画し、胴部には磨消し懸垂文が垂下する。20・21は磨消し懸垂文の胴部である。

22は連弧文系の胴部である。連弧文下端から垂下するY字状の平行沈線で、RLの単節縄文を地文に持つ。

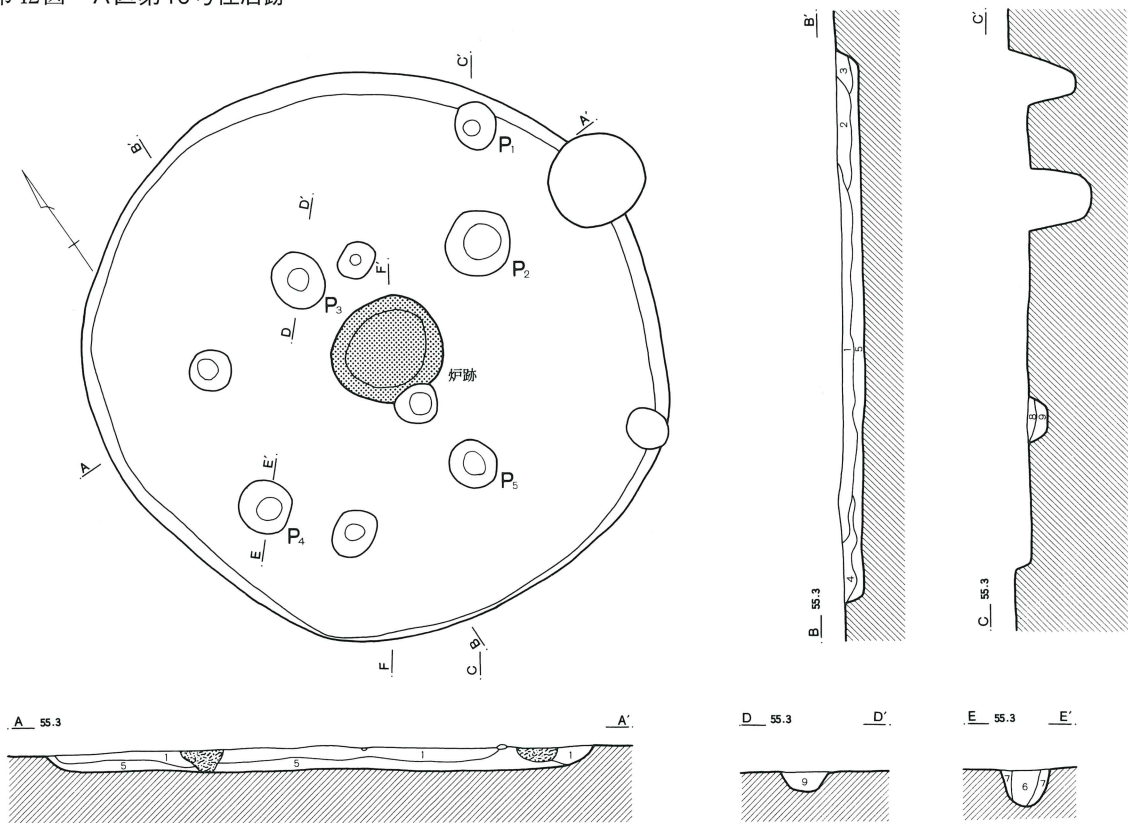
23は内屈する浅鉢口縁部である。胴部との境に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具による条線が施文される。

24は小型の両耳壺の頸部から口縁にかけての破片である。胴上半部には楕円形の区画が配される。25も両耳壺で無文の口縁である。26は小型の両耳壺の肩部で、把手の付される部分である。

第41图 A区第15号住居跡出土土器(2)

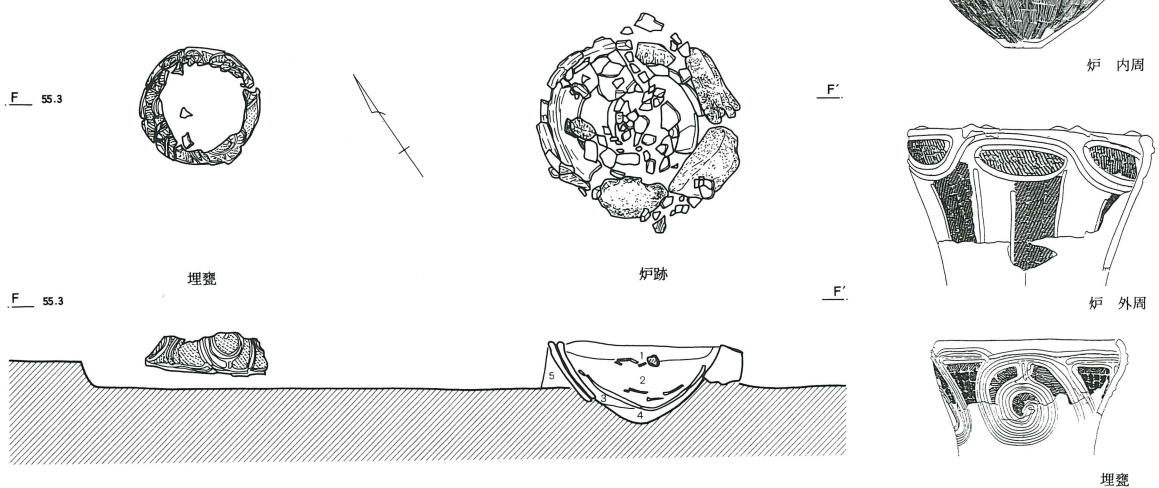


第42図 A区第16号住居跡



A区S J 16

- 1 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子微量含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性強、締まりよし
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性強、締まり強
- 4 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性強、締まり強
- 5 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性強、締まり強
- 6 暗褐色土 : ロームブロック・焼土粒子少量含む 締まり強
- 7 褐色土 : ローム粒子やや多く含む 粘性強
- 8 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む
- 9 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子を多く含む



A区S J 16 炉跡

- 1 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子少量含む 締まりやや強
- 2 黒褐色土 : 焼土粒子やや多く含む 締まり強
- 3 黒褐色土 : 焼土粒子多く含む、少量の炭化物を含む 締まり強
- 4 赤褐色土 : 焼土層 微量の炭化物を含む 締まり強
- 5 黒褐色土 : ローム粒子多く含む、焼土粒子微量含む 粘性弱、締まり強 炉体土器支持のための埋め戻しか



A区第16号住居跡（第42図～第46図）

E-8・9、F-8・9区に所在する。ほぼ円形の住居跡で、径約4.5mを測る。後述の炉跡と埋甕を結ぶ線を主軸と見た場合、主軸方向はN-35°-Eを指す。

壁高は最も残りの良い部分で18cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、南西に向かってわずかに傾斜する。

床面上からは9本のピットが検出された。深さは15～50cmで、炉跡東部に所在するP1・2が比較的しっかりした掘り込みを伴う他は、20cm前後のものが床面中央部に不規則に集中するのみである。したがって、本住居跡の支柱配置は明らかでない。

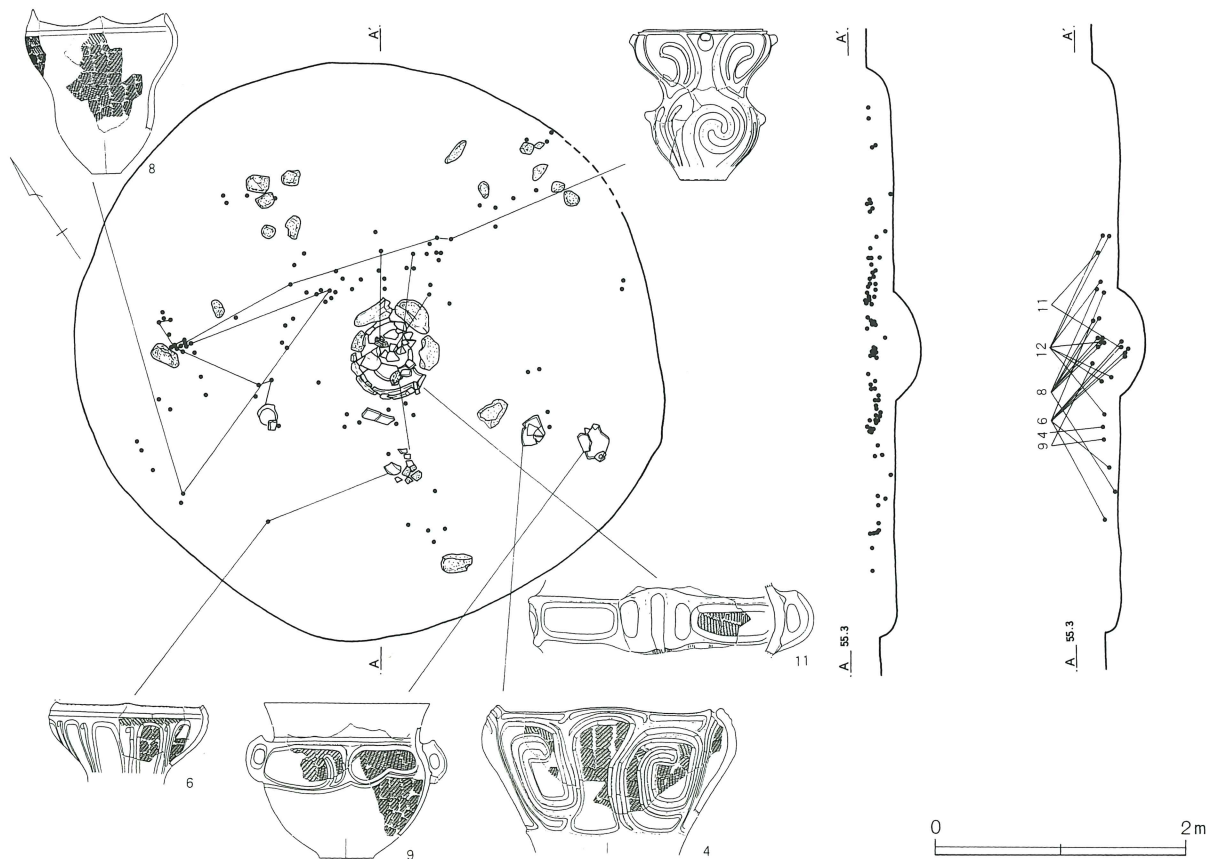
床面ほぼ中央に炉跡を検出した。概ね内外二重の構造を持つ、変則的な石囲埋甕炉である。外周は北東半分を4個の川原石で囲い、残る部分を第44図1の大型深鉢口縁を縦に2分割したものを正位で2枚重ねにして囲っている。内周には第45図5の浅鉢が正位で組み

込まれる。礫および土器によって囲った部分の長径80cm、短径70cmを測る。掘り方は径約90cmの不整形円で、全体の深さは15cmを測る。

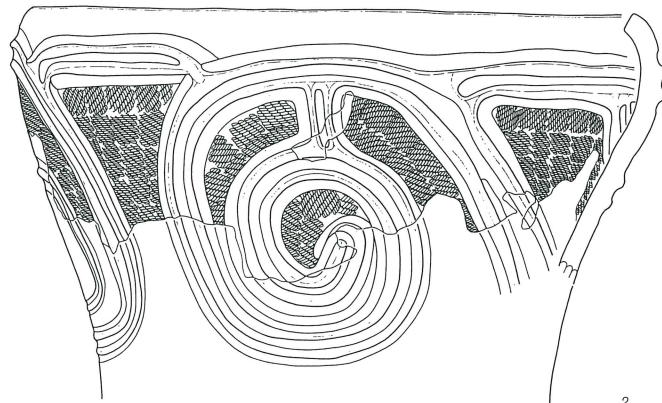
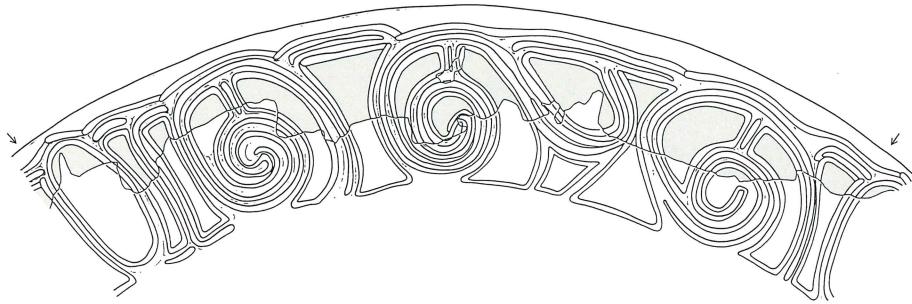
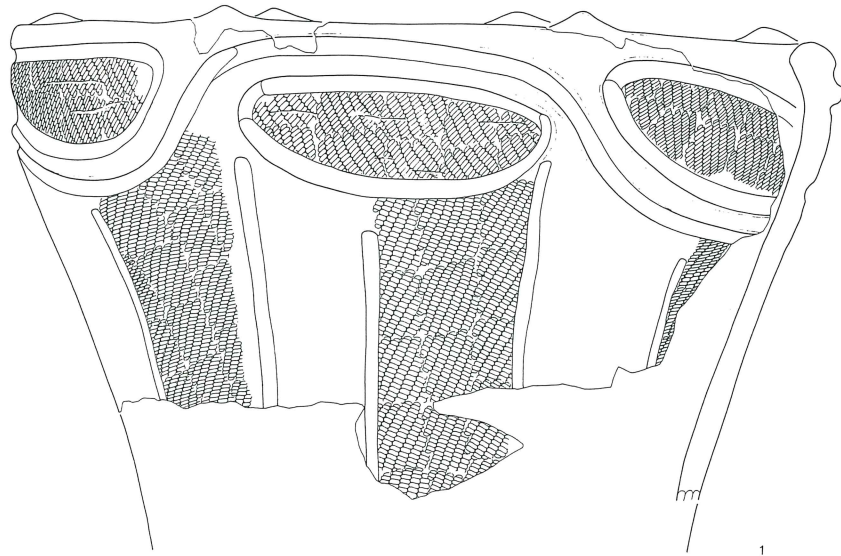
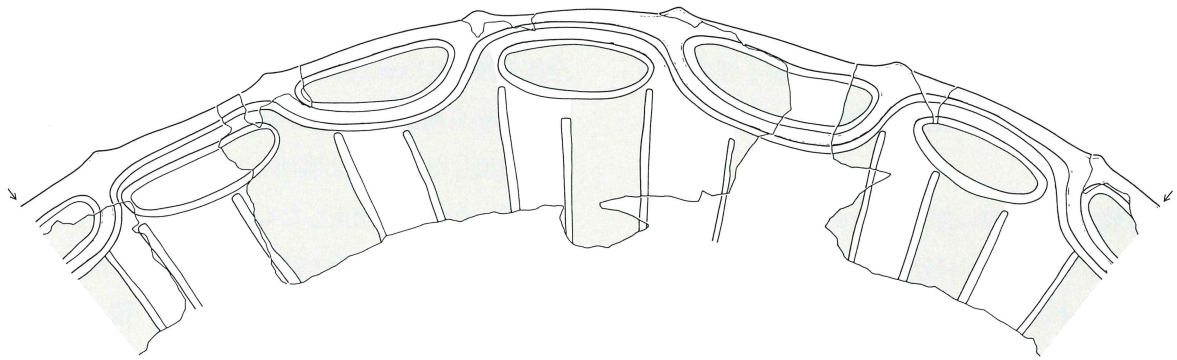
炉跡から南西方向1.1mを隔てて埋甕と思われるものを検出した。これは第44図2の深鉢が床面からわずかに浮いた状態で出土したものであって、一般的に埋甕といわれる出土状態とは異なるが、炉体土器の口縁部がやはり床面から大きく露出する点、覆土中の遺物の垂直分布が床面から10cm以上離れたレベルに集中する点などを考慮するなら、住居本来の生活面は完掘された床面よりも上に存在した可能性が高い。以上の理由から、この逆位の深鉢を炉跡に対応する出入り口埋甕と判断した。以下、単に「埋甕」と記載する。

埋甕は深鉢形土器の口縁部から同上半部にかけての部分で炉跡側にわずかに傾斜させて設置したものである。周囲に若干の破片が散布することから上面を破壊されている可能性がある。埋甕埋設のための掘り込みなどは検出できなかった。

第43図 A区第16号住居跡遺物分布図

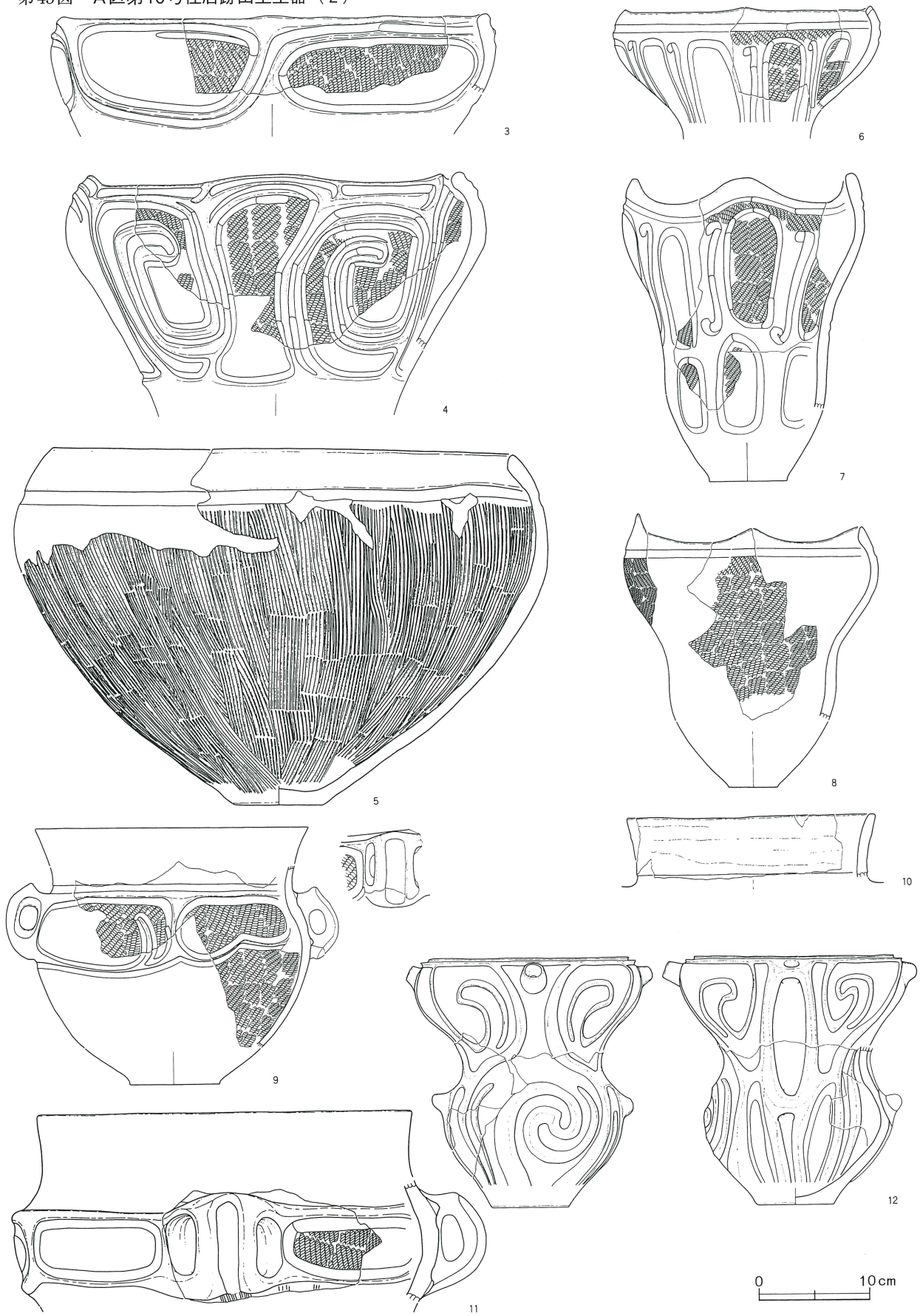


第44图 A区第16号住居跡出土土器(1)

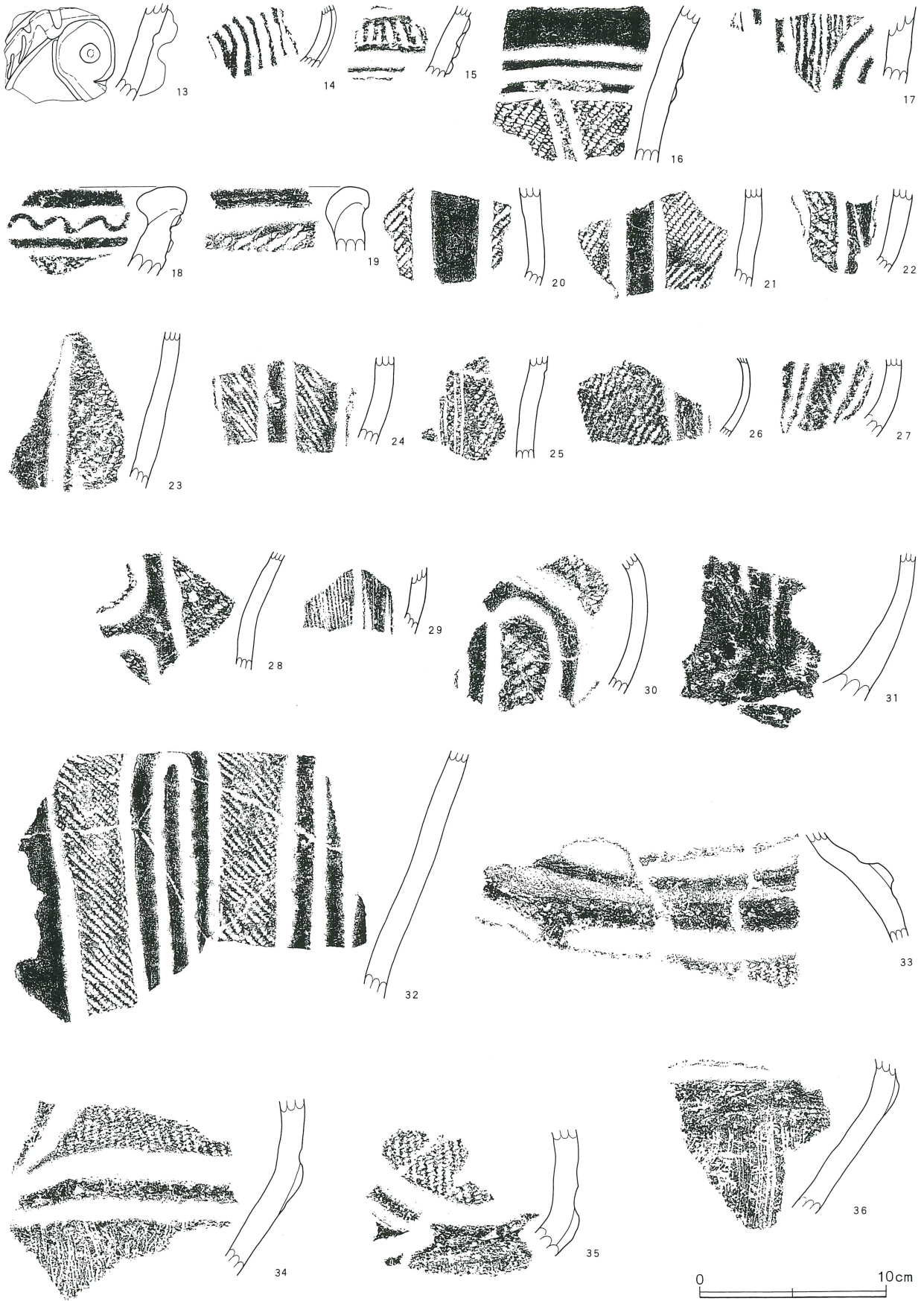


0 10 cm

第45图 A区第16号住居迹出土土器(2)



第46图 A区第16号住居迹出土土器(3)



遺物は縄文時代中期末葉の土器および石器が出土している。また、炉跡の周囲半径約1～1.5mの範囲に、握りこぶし大の礫が分布している。これは、後出第48号住居跡（柄鏡形住居跡）の礫の出土状態にも共通するものである。

出土土器（第44図～第46図）

1は炉体内周の土器である。キャリパー類の大型深鉢で、胴部中段から下を欠失する。また、縦2分割した破片として用いられていたため、正対する2カ所で口縁から胴部にかけて帯状に欠落する部分が存在する。口縁部文様帯は扁平な隆帯による幅狭の波状区画へと変化し、区画の上下に楕円ないし半月状の区画文を生成している。上記の波状区画が上下に反転する部分では水平口縁上につの状の小突起が付される。また、同じ部分で胴部に幅広の磨消し懸垂文が垂下する。現存高32.5cm、口径54cmを測る。

2は埋甕である。梶山類の隆帯渦巻文土器で、口縁から同上半部にかけて残存する。なぞりを加えた2本一組の隆帯により3単位の渦巻文が描かれる。口縁直下には若干の無文部が存在する。地文としてLR単節の縄文が充填手法により施文される。現存高18cm、口径44cmを測る。

3はキャリパー類の口縁部で、1と似た構成をとるものと思われる。地文はLR単節の縄文で、現存高7cm、口径推定38cmを測る。

4は梶山類の口縁から同上半部にかけての大破片である。文様構成のうえでは2の土器に極めて類似するものの、口縁直下に無文部を介在しない。地文はLR単節の縄文が充填手法によって施文される。現存高16cm、口径34cmを測る。

5は炉体外周の土器である。胴張りの浅鉢で、口縁内屈する。口縁下に1条の沈線が巡り、それ以下に櫛歯状工具による条線が密に施文される。器高32cm、口径41cm、底径7.8cmを測る。

6は吉井城山類の口縁部である。4単位の小波状口縁をなすものと思われ、口縁下に1条の沈線を巡らせる。胴部には逆U字状の区画とわらび手状の沈線が交

互に配置される。地文はRL単節の縄文で、胴部においては縦位、口縁部においては横位に施文される。現存高9cm、口径21.6cmを測る。

7は波状口縁の深鉢で、口縁下に1条の沈線が巡り、胴部に上下二段の楕円区画が巡らされるものである。胴上半部では楕円区画の間に上下閉塞のわらび手状沈線が描かれる。地文はRL単節の縄文が口縁では横位回転、楕円区画内部には縦位回転で施文される。現存高21cm、口径20cmを測る。

8は半粗製の深鉢で、口縁から胴部中段までが断片的に残存する。口縁下に1条の沈線が巡り、それ以下には地文のみが施文される。4単位の小波状口縁をなし、うち1単位がやや大振りの波状となるものと思われる。地文はRL単節の縄文で、口縁の沈線直下には横位回転、それ以外では縦位回転で施文される。現存高17cm、口径19cmを測る。

9・10・11は両耳壺である。9は肩部から胴下半部にかけて残存する。肩部にはキャリパー類深鉢に由来する楕円形の隆帯区画がみられる。把手背面には幅広のなぞりが施される。現存高15cm、最大径25cmを測る。10は口縁部で、軽微に外反する。現存高5.6cm、最大径22.6cmを測る。11は肩部で9と同様の区画を有し、把手背面に幅広のなぞりが施される。

12はひさご形土器である。胴上半部を欠失するが、口縁直下に注口が付されるものと思われる。2単位のひも掛け状の把手が対称に配置されるが、同様のものが胴上半部にも存在して4つ手を構成するものであろう。文様は微隆起線による入り組み状の渦巻文が2単位配置される。現存高15.2cm、最大径16cm、底径7cmを測る。

13は勝坂から中峠系の隆帯文。14は縦位の浮線文を密に施す口縁部である。15はキャリパー類の口縁部文様帯で、集合沈線を地文に持つ。16は頸部から胴部にかけてで、頸部無文帯と沈線による蛇行懸垂文がみられる。17は隆帯による懸垂文である。18は交互刺突列を伴う口縁で、連弧文系に伴うものであろう。

19はキャリパー類の口縁部である。20～27は磨消し

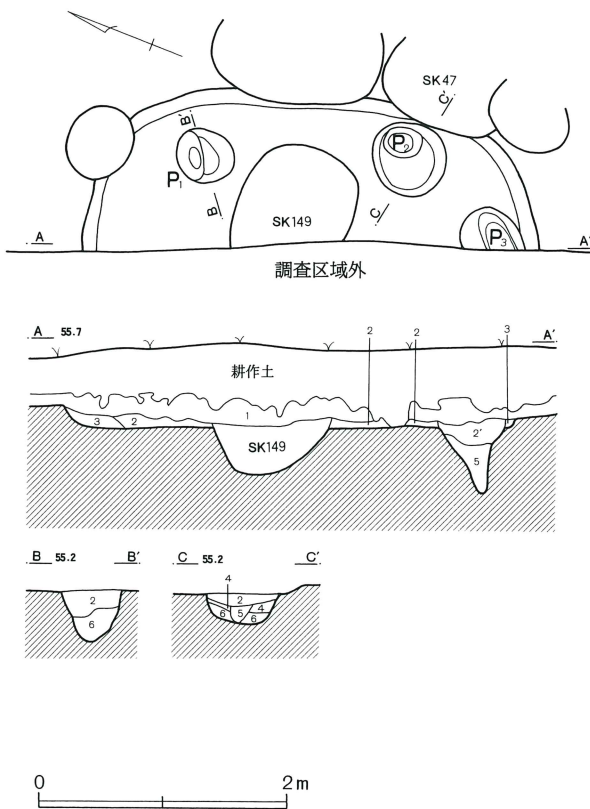
懸垂文で、大半が深鉢であるが27は両耳壺の胴下半部であるかもしれない。28は磨消しによるH字モチーフがみられる。29は条線を地文に持つ磨消し懸垂文である。30・32は長楕円形のモチーフが横に連続するもので、A区S J 48、D区S J 36等に類例をみることができ、33～36は両耳壺の胴部で、肩部に隆帯による区画文を有し、胴下半部には櫛歯状工具による条線が施される。

A区第17号住居跡（第47図・第48図）

E-8区に所在する。第149号土壇に切られている。大部分が調査区域外に存在し、東壁と北・南壁のごく一部が発掘された。南北軸3.65mを測り、ほぼ東西に主軸を持つものとみられる。壁高は残りの良い部分でも15cm程度である。壁溝は検出できなかった。床面は若干北へと傾斜する。

床面上から3基のピットが検出されたが、うち南壁に接して検出されたP3は本住居跡覆土を切って掘り込まれている。したがって、南北のコーナー付近でそれぞれ検出されたP1・P2が本住居跡に伴うもので

第47図 A区第17号住居跡



あろう。

本住居跡は西壁に出入り口を持つ四本柱の住居跡であると思われる。炉跡は発見されなかった。

遺物は中期後葉を中心とした土器片が出土している。

出土土器（第48図）

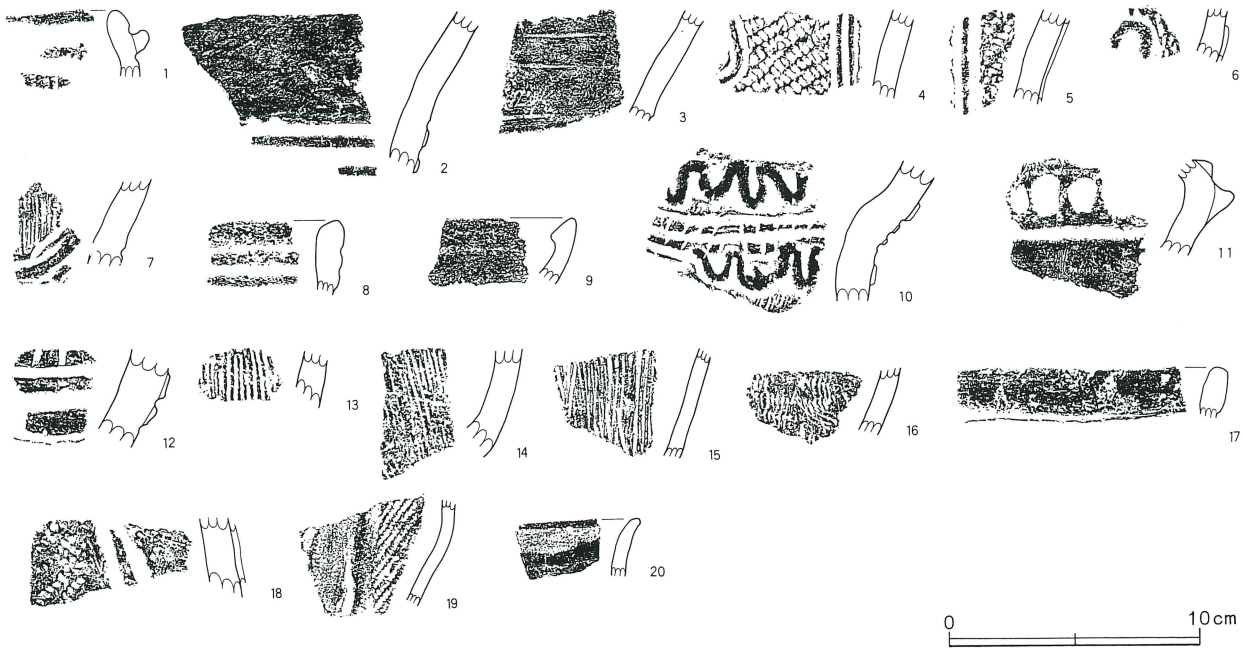
1はキャリパー類の口縁部である。2・3は頸部無文帯で、2は胴部との境界に隆帯区画がみられる。4から6は胴部で、4は半裁竹管状工具による平行沈線を用いた懸垂文、5は隆帯懸垂文である。6は隆帯によるフック文の先端であろう。

7は連弧文の一部であろう。8はこれに伴う口縁部であると思われる。9は無文の口縁部である。10は曽利系深鉢で、胴部中段の屈曲部である。波状の浮線文が2段に巡る。11・12は浅鉢で、くの字に張り出す胴部の上半分に文様が描かれる。13～16は櫛歯状工具による条線が施されるもので、16の条線は波状となる。17はわずかに外屈する無文の口縁で、胴張りの浅鉢に伴うものである。18～20はより新しい、中期末葉に属する土器群である。

A区S J 17

- 1 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子微量含む やや粘性あり、やや締まり欠く
- 2 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子微量含む 締まり・粘性強
- 2' 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含未、焼土粒子微量含む 締まり・粘性強
- 3 暗褐色土 : 2より暗色 ロームブロック少量含む 粘性強
- 4 暗褐色土 : 2より明色 ロームブロック少量含む
- 5 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む 締まりやや欠く 柱痕か
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 締まりやや欠く

第48図 A区第17号住居跡出土土器(1)



A区第19号住居跡(第49図～第56図)

E-9・F-9区に所在する。西壁の大半が調査区域外に存在する。隅丸長方形の住居跡であると思われ、長径4.75m、主軸方向N-22°-Eを指す。壁高は最も深い南壁部分で45cmを測り、比較的緩やかに立ち上がる。壁高は全周するが、部分的に2重となる部分があり、特に南壁では明確な拡張の痕跡が認められる。

床面上から5本のピットが検出された。いずれも深さ50~70cmのしっかりした掘り込みを持ち、支柱穴と考えられるものである。ただし、部分的な発掘であり、少なくとも1度の建て替えが想定されるため、支柱配置は不明である。

主軸線上奥壁寄りに炉跡が存在する。径10cmほどの礫を一辺50~60cmの方形に並べた石囲炉だが、南西コーナーの石材を欠失している。掘り方は径70cmの不整形で、深さ16cmを測る。

本住居跡からは今回発掘された単体の住居跡としては最も多い2000点近い遺物が出土した。遺物の垂直分布は床面直上と遺構検出面近くに二極化する傾向がある。中心となるのは縄文時代中期後葉の土器片である。

出土土器(第51図～第56図)

1~8はキャリパー類の深鉢である。1は胴下半部

を欠失する。口縁部には隆帯による直線化した横S字モチーフが間隔をおいて配置される。頸部無文帯を持ち、胴部には隆帯による蛇行懸垂文がみられる。地文はRL単節の縄文である。現存高36.5cm、口径49cmを測る。

2は胴部中段から下を欠失する。口縁部は繫弧状の隆帯モチーフが展開し、頸部無文帯を持ち、胴部には隆帯による蛇行懸垂文がみられる。地文はRL単節の縄文である。現存高33cm、口径43.5cmを測る。

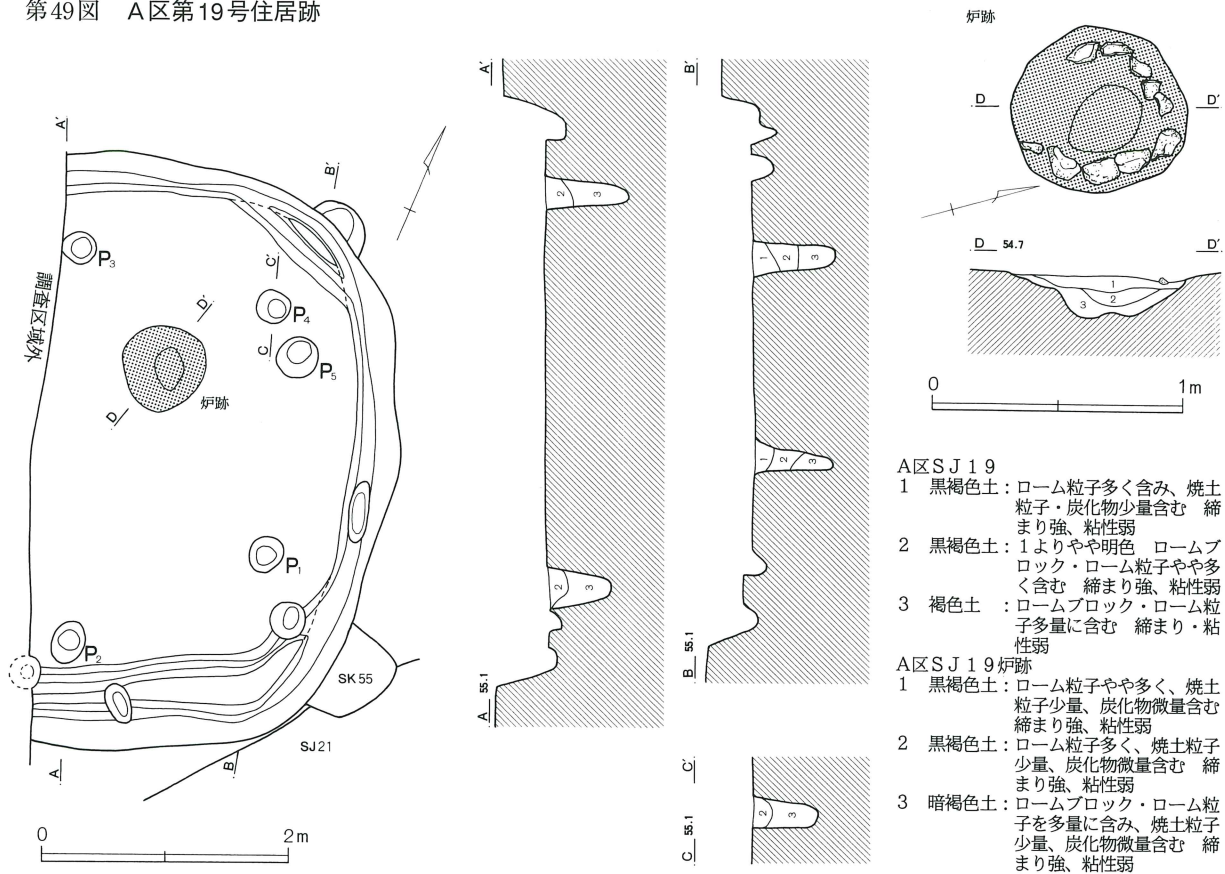
3は口縁部を欠失する。頸部無文帯を持ち、胴部には半裁竹管状工具による集合沈線が縦位に施文される。現存高34.4cm、最大径31.6cmを測る。

4は頸部から胴部中段にかけて残存する。二本隆帯の懸垂文からわらび手状の渦巻モチーフが枝分かれするものである。地文は縦位の撚糸文である。現存高26.4cm、最大径30cmを測る。

5は胴部中段から底部にかけて残存する。隆帯による懸垂文がみられ、地文はRL単節の縄文が右下がり施文される。底部周辺には横方向の削り整形が施される。現存高17.6cm、底径11.5cmを測る。

6は胴部中段のみ残存する。半裁竹管状工具による平行沈線が2本一組で垂下する。地文はRL単節の縄

第49図 A区第19号住居跡



文である。現存高8.7cm、最大径12.4cmを測る。

7は胴部のみ残存する。RL単節の縄文だけが縦位に施文される。現存高19.8cm、最大径15.7cmを測る。

8は底部である。隆帯による懸垂文が垂下し、撚糸文を地文に持つ。現存高4.1cm、底径11cmを測る。

9は曾利系の小形深鉢で、底部を欠失する。頸部胴部中段に横位の隆帯を巡らし、隆帯間の4カ所に2条一組の爪形文を垂下させることによって窓枠状の区画を形成する。区画内部は3本一組の沈線によってさらに縦2分割され、完成した長方形の区画内に横位の集合沈線が密に描き込まれる。口縁および胴下半部は無文で縄文等は施文されない。器高18.5cm、最大径16cm、口径16cmを測る。

10は本住居跡から出土した他の復元個体よりも新しい時期の土器であり、磨消し連弧文の深鉢である。胴下半部を欠失する。口縁下に刺突列を伴う2条の沈線を巡らせ、その下にさらに1条の沈線を巡らせて胴部との境を区画する。胴部中段には磨消しを伴う平行沈

線を巡らせて横位の区画とし、胴上半部には2段構成の連弧文、胴下半部には磨消し懸垂文が配される。地文は縦位の撚糸文である。同一個体内に連弧文と磨消し懸垂文の同居する好例であり、ここから吉井城山系文様の成立まではほんのワンステップである。現存高15cm、口径29.4cmを測る。

11は曾利系の大型深鉢である。口縁部に重弧文と隆帯による蛇行懸垂文が施文される。頸部は2条の隆帯間に半裁竹管状工具による集合沈線と隆帯を交差させた籠目文が施文される。胴部には二本隆帯による唐草文が描かれ、地文は櫛歯状工具による条線である。

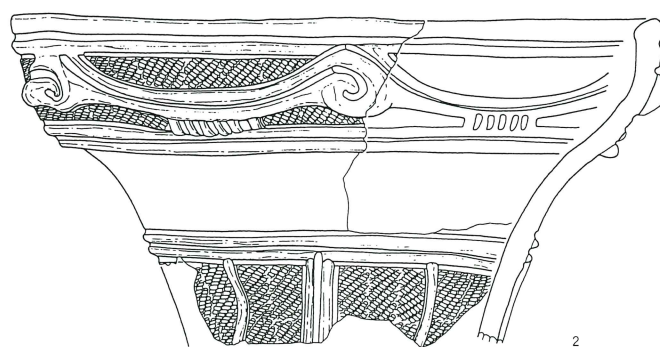
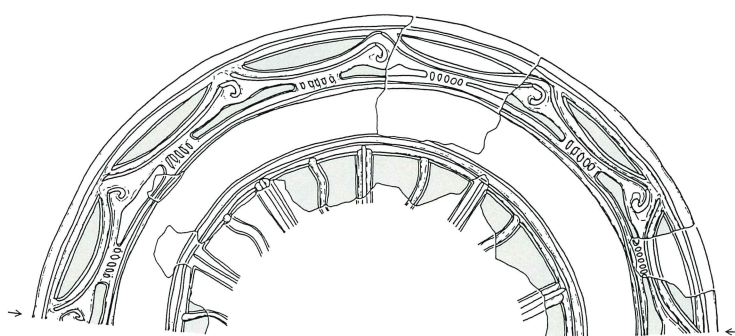
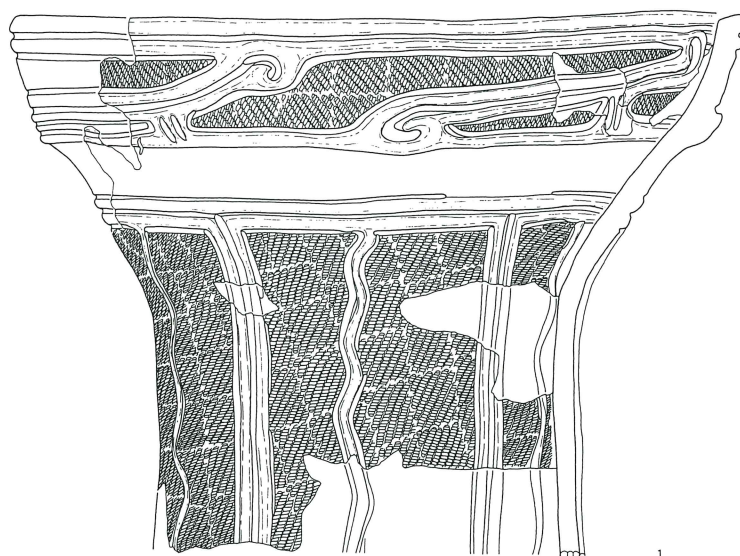
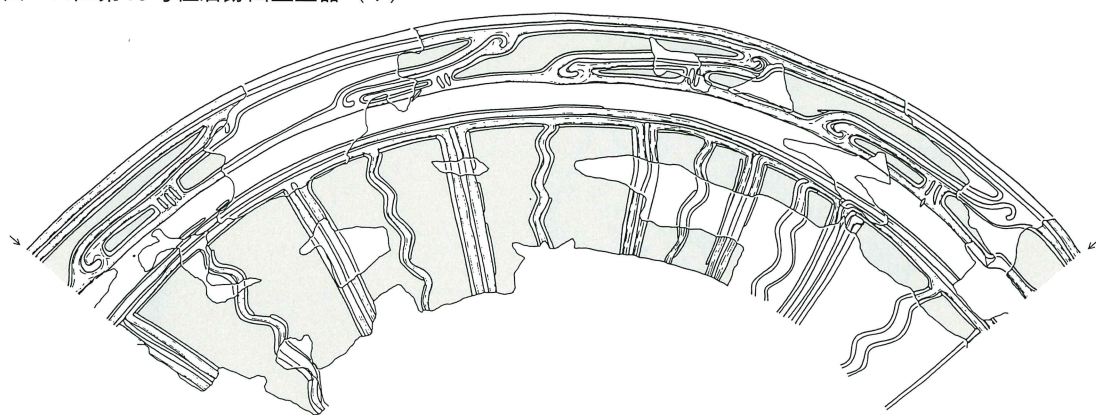
12は器形・文様構成とも11に極めて類似するが、頸部に籠目文はみられず、隆帯間に対弧状の粘土紐を貼りつけて楕円形の区画が構成される。また、この部分に橋梁状の把手が配される。胴部には唐草文が展開するものとみられるが、一本隆帯によるわらび手状モチーフが特徴的に用いられる。

なお、11・12は同一個体の表裏の可能性もある。

第50图 A区第19号住居跡遺物分布图

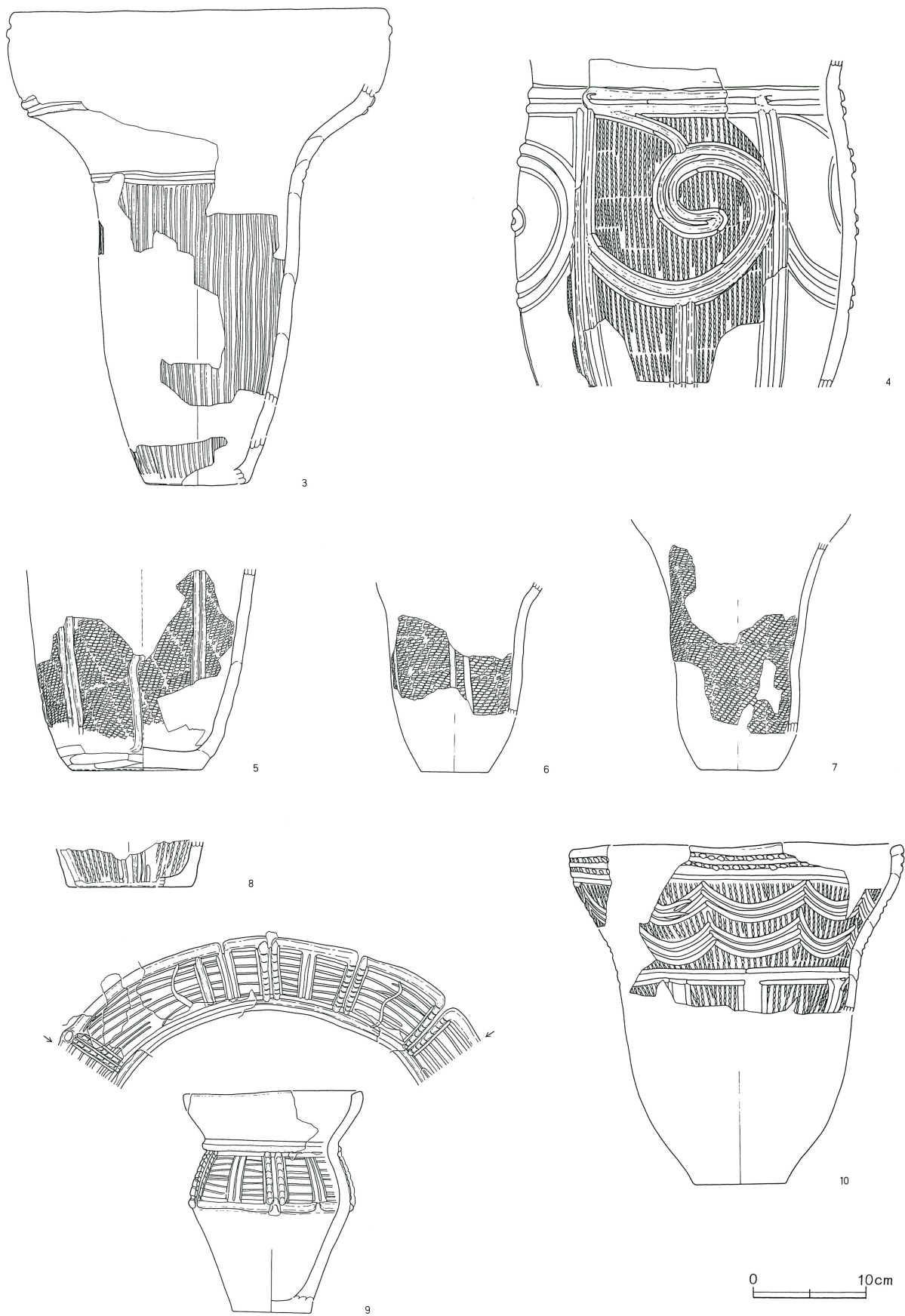


第51图 A区第19号住居跡出土土器(1)

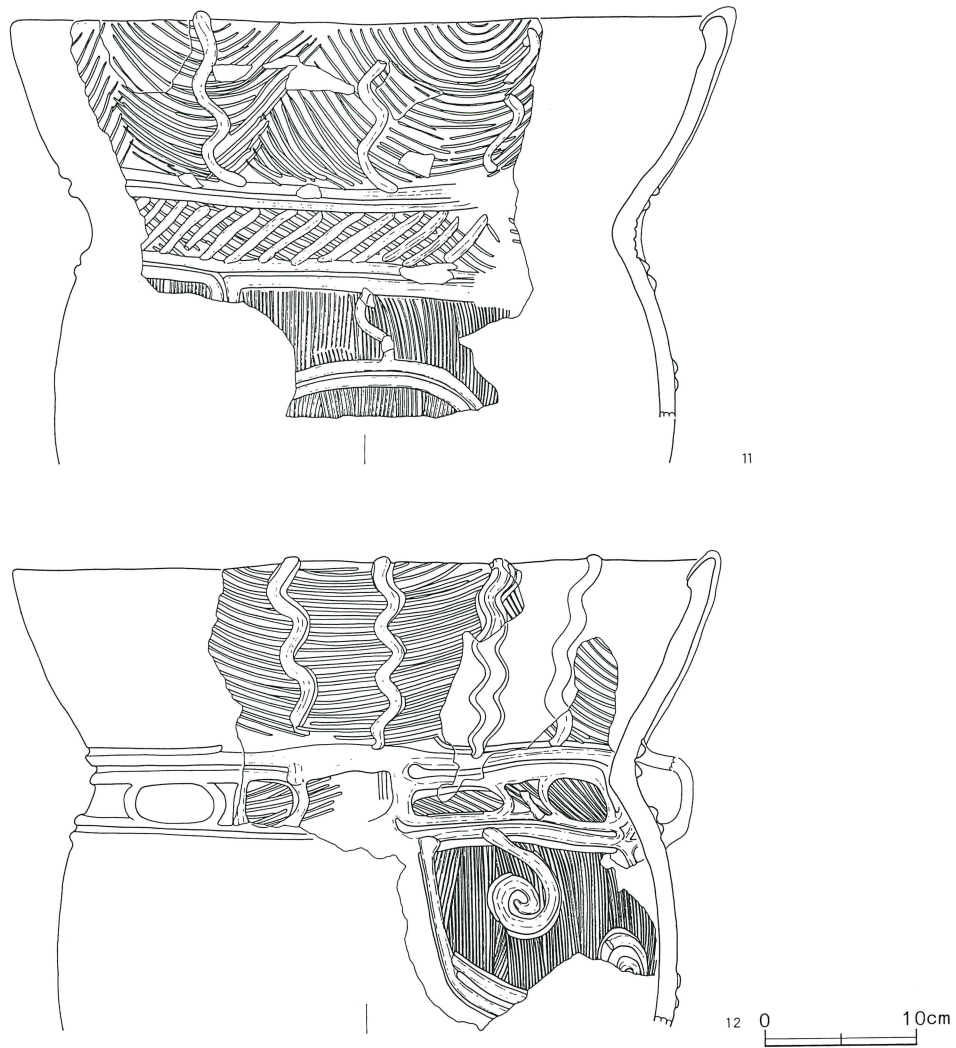


0 10cm

第52图 A区第19号住居迹出土土器(2)



第53図 A区第19号住居跡出土土器（3）



13は浅鉢で、くの字に張り出す胴部中段である。刻みを有する隆帯と、渦巻文を伴うつまみ状の突起がみられる。14は口縁部で、ほぼ垂直に立ち上がる口縁で、円筒形の小形深鉢と思われる。口端はほぼ平坦に整形され、口縁下に隆帯による方形の区画が構成される。

15は深鉢頸部で、無文地のつまみ状の突起と波状の隆帯がみられる。16は深鉢胴部で、胴上半部には隆帯による同心円文がみられ、胴下半部には縄文が施文される。17～26はキャリパー類の口縁で、二本隆帯による渦巻文や入り組み文などが描かれる。地文は撚糸文が主で、23・25は縄文が施文される。

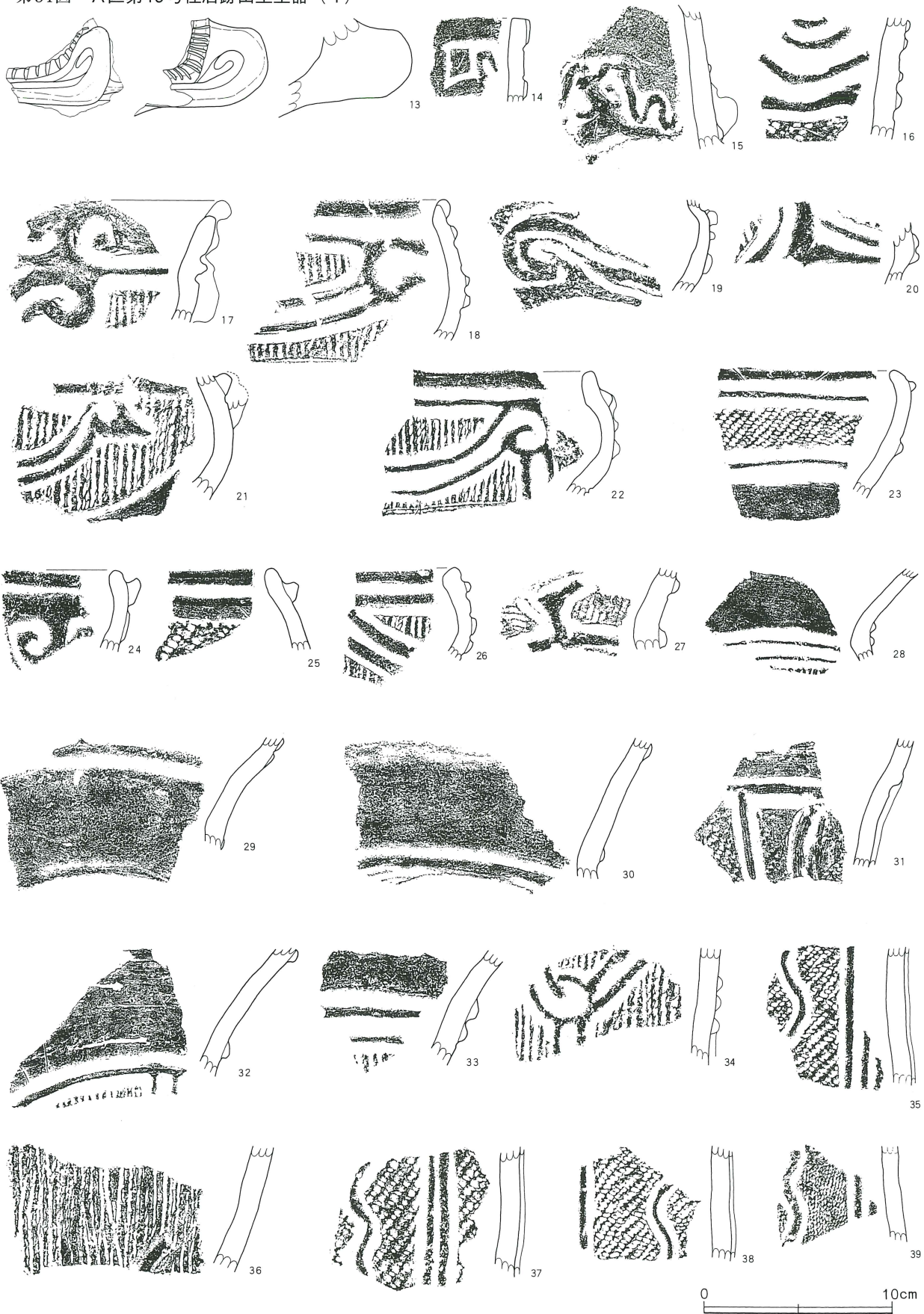
17は唯一波状口縁となるもので、波頂部を起点としてわらび手状の沈線が巡らされる。19は横S字のモチーフが描かれる。21は大木8b式に特徴的な剣先状

のモチーフである。23は頸部に無文帯を有する。

27はキャリパー類の頸部である。口縁部文様帯が本来頸部無文帯が存在する部分にまで拡張されるもので、やや特異な構成となっている。28～30は頸部無文帯である。31は頸部から胴上半部にかけての破片で、頸部無文帯と胴部の隆帯懸垂文がみられる。地文はRL単節の縄文が縦位に施文される。32・33も同様の部位であるが、地文は縦位の撚糸文となっている。頸部と胴部との境は32が1条の隆帯、33は2本一組の隆帯によって区画されている。

34～39は隆帯懸垂文のみみられる胴部である。34は二本隆帯がY字状に交差し、この部分に渦巻文が配される。地文は縦位の撚糸文である。35以下は2本一組の隆帯懸垂文と蛇行懸垂文が交互に配される。地文は35・

第54图 A区第19号住居迹出土土器(4)



37・38が単節縄文、34・39が撚糸文で、36は半裁竹管状工具による集合沈線である。これ以外に、櫛歯状工具による条線を用いるものが存在する。

41・42は半裁竹管状工具による平行沈線によって懸垂文や蛇行懸垂文を描く個体である。41は頸部無文帯を有する。地文はいずれもRL単節の縄文である。

40・43・44は連弧文系の土器群で、いずれも口縁部を含む破片である。40は口縁から胴部中段にかけての破片である。直線的に開きつつ、口縁部のみ軽微に内湾する。口縁直下に1条の沈線を巡らし、その下に細かな波状の沈線を巡らせる。胴上半部には緩やかな波状の沈線が垂下する。地文はRL単節の縄文が縦位に施文される。

43は内湾する口縁で、口端部は平坦である。口縁直下に3条の沈線が巡り、その下に棒状工具による重弧モチーフが描かれる。地文は櫛歯状工具による条線である。

44は波線化した連弧文である。口縁直下に4条の沈線が巡り、三本沈線による連弧文が施文される。地文は櫛歯状工具による条線である。

45・46は曾利系の大型深鉢である。45は頸部文様帯である。半裁竹管状工具による集合沈線と粘土紐を交差させた籠目文で、下端胴部との境を波状の隆帯によって区画する。46は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部には半裁竹管状工具による重弧文が描かれ、波状の隆帯が垂下する。頸部文様帯上端は円形刺突を伴う1条の隆帯によって区画される。頸部文様帯は横位の隆帯間に弧状の区切りを施すことで楕円などの区画を構成するものである。地文は半裁竹管状工具による集合沈線である。

47・48は無文の口縁部で、曾利系の小型深鉢である。いずれも頸部にくびれを持ち、口縁内湾する。47は胴部に縄文が施文され、48は楕円形の沈線区画がみられる。49は浅鉢胴部と思われるもので、中期末葉の両耳壺の胴部である可能性もある。櫛歯状工具による条線が施文される。

50～56は浅鉢胴部で、ソロバン玉状に張り出す胴部

中段の部分である。50～54はキャリパー類の口縁部文様帯が転写される一群である。二本隆帯によって渦巻文・入り組み文が描かれるもので、52は剣先状モチーフがみられる。51は屈曲の程度が弱く、深鉢口縁部としてもよいかも知れない。55は2本の扁平な隆帯による長楕円形の区画内部に縦位の集合沈線が充填される。56は棒状工具による肉彫り状の沈線が垂下するもので、全面に研磨が徹底する。

57～63は中期末葉の土器群である。57はキャリパー類の口縁である。小波状口縁で、波頂部直下に形骸化した渦巻文が配される。58は吉井城山類の口縁である。口唇内屈し、わらび手状の沈線の先端部がみられる。59は刺突列を伴う平行沈線が巡る口縁部で、10の口縁に類似する。磨消し連弧文に伴うものであろう。60～62は磨消し懸垂文の胴部である。60は口縁部文様帯の下端を区画する横位の沈線がみられる。

63は細手の沈線による二重の逆U字区画内にわらび手状沈線が描き込まれる。

64は後期初頭における加曾利E系の深鉢口縁部である。くの字に内屈する口縁で、頸部との境を隆帯によって区画する。口縁外面に沿ってRL単節の緻密な縄文が施文され、棒状工具による斜位の刺突が施される。65はこれに伴う粗製土器であると思われる。RL単節の緻密な縄文が縦位に施文される。

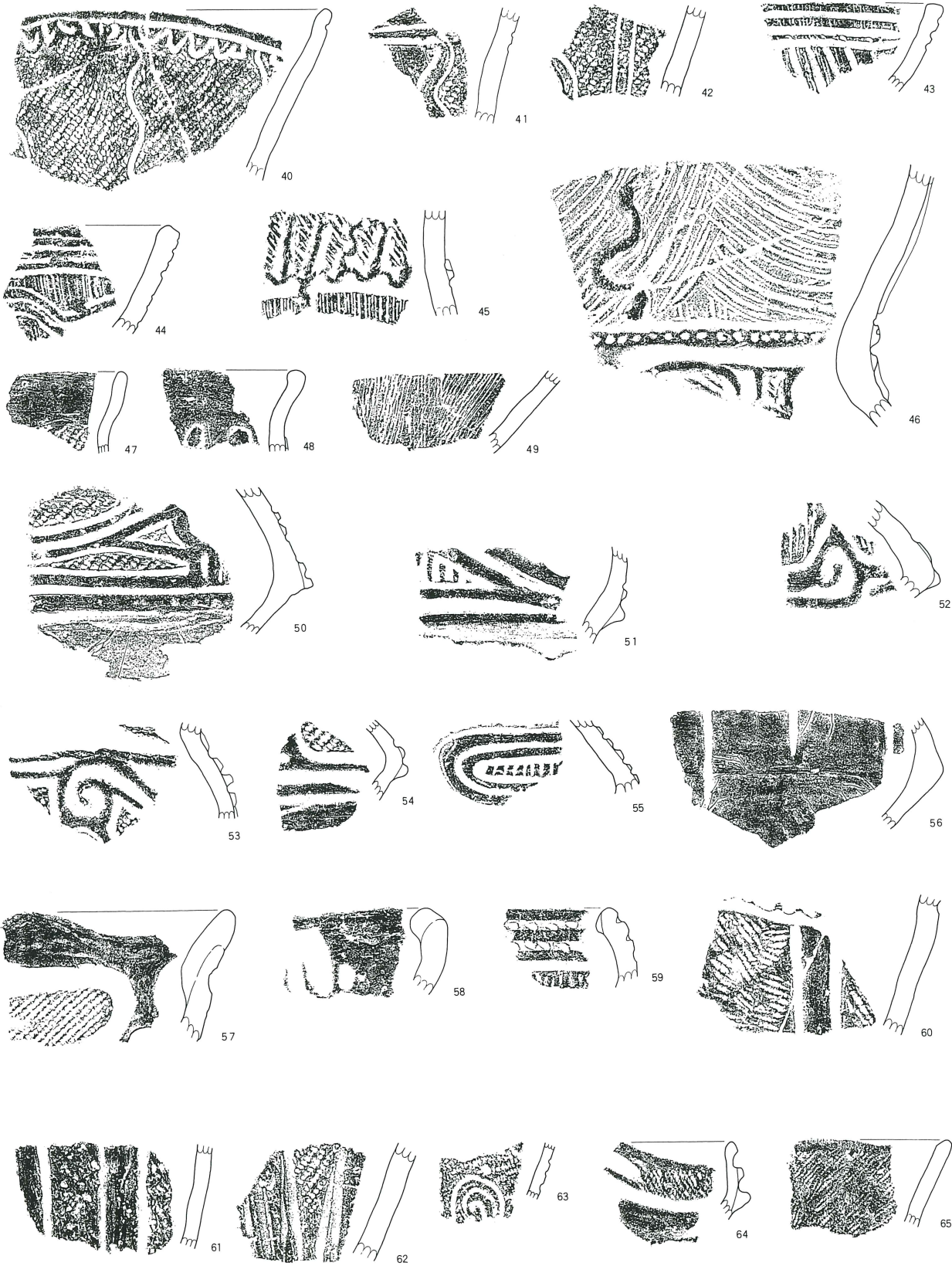
66～72は無文の浅鉢である。66は折り返し口縁状を呈し、断面逆台形に肥厚しつつ外屈する。胴部は丸味を帯びて張り出し、横方向の研磨が徹底する。

67・68は軽微に内屈する口縁で、67は内面に断面三角形の稜を持ち、68は先細りしつつ内湾する。

69は66ほどではないが外屈する口縁で、口唇断面角頭棒状を呈する。70は内屈する口縁である。

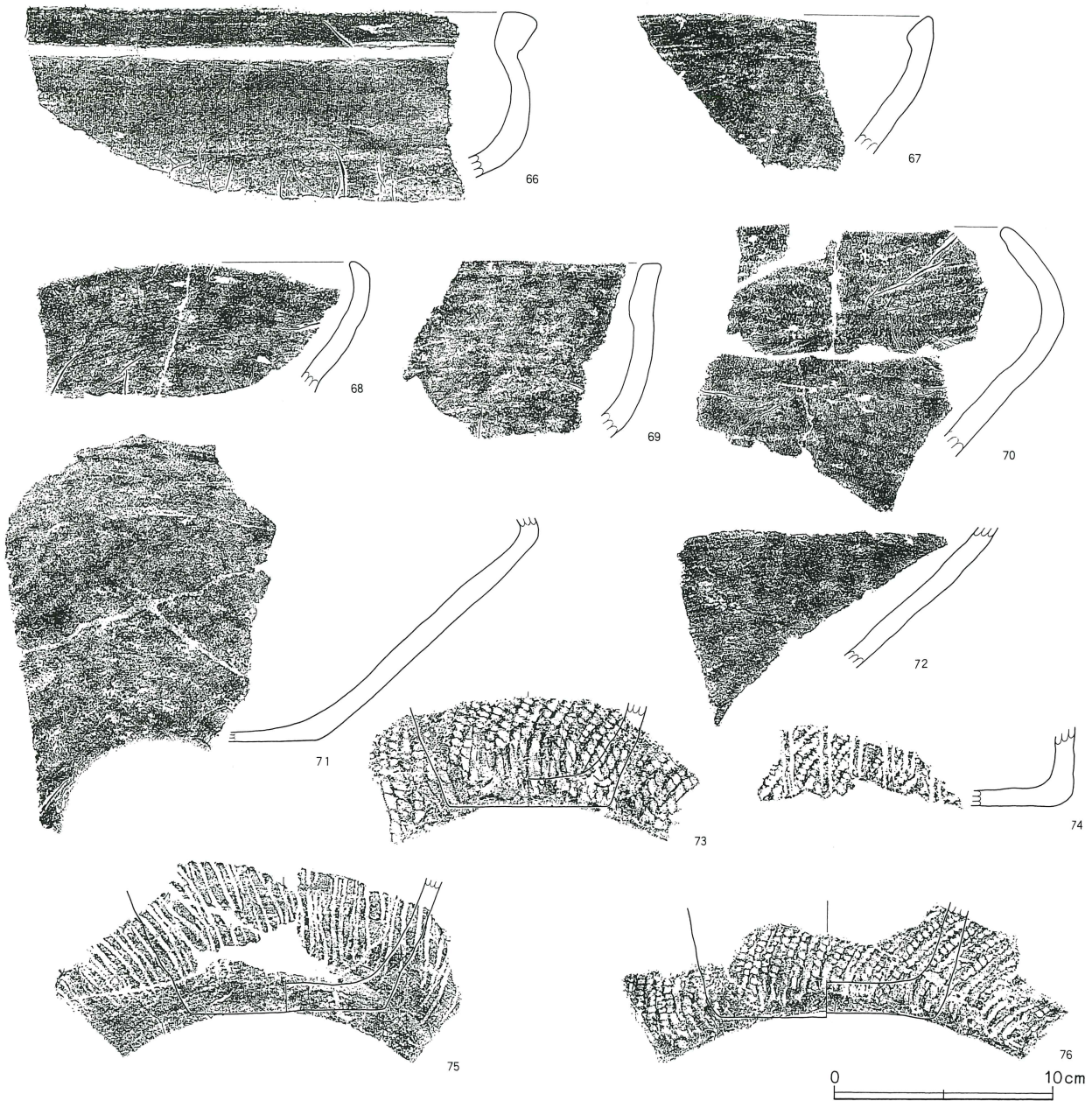
71は底部から胴部中段にかけての大破片である。ほぼ直線的に開き、胴部中段に強い屈曲を持つ。72は胴下半部の破片である。73～76は深鉢底部である。74が半裁竹管状工具による懸垂文を施文する以外は全て地文のみの個体である。75は撚糸文、それ以外は全てRL単節の縄文を縦位に施文する。

第55图 A区第19号住居跡出土土器(5)



0 10cm

第56図 A区第19号住居跡出土土器（6）



A区第20号住居跡（第57図～第59図）

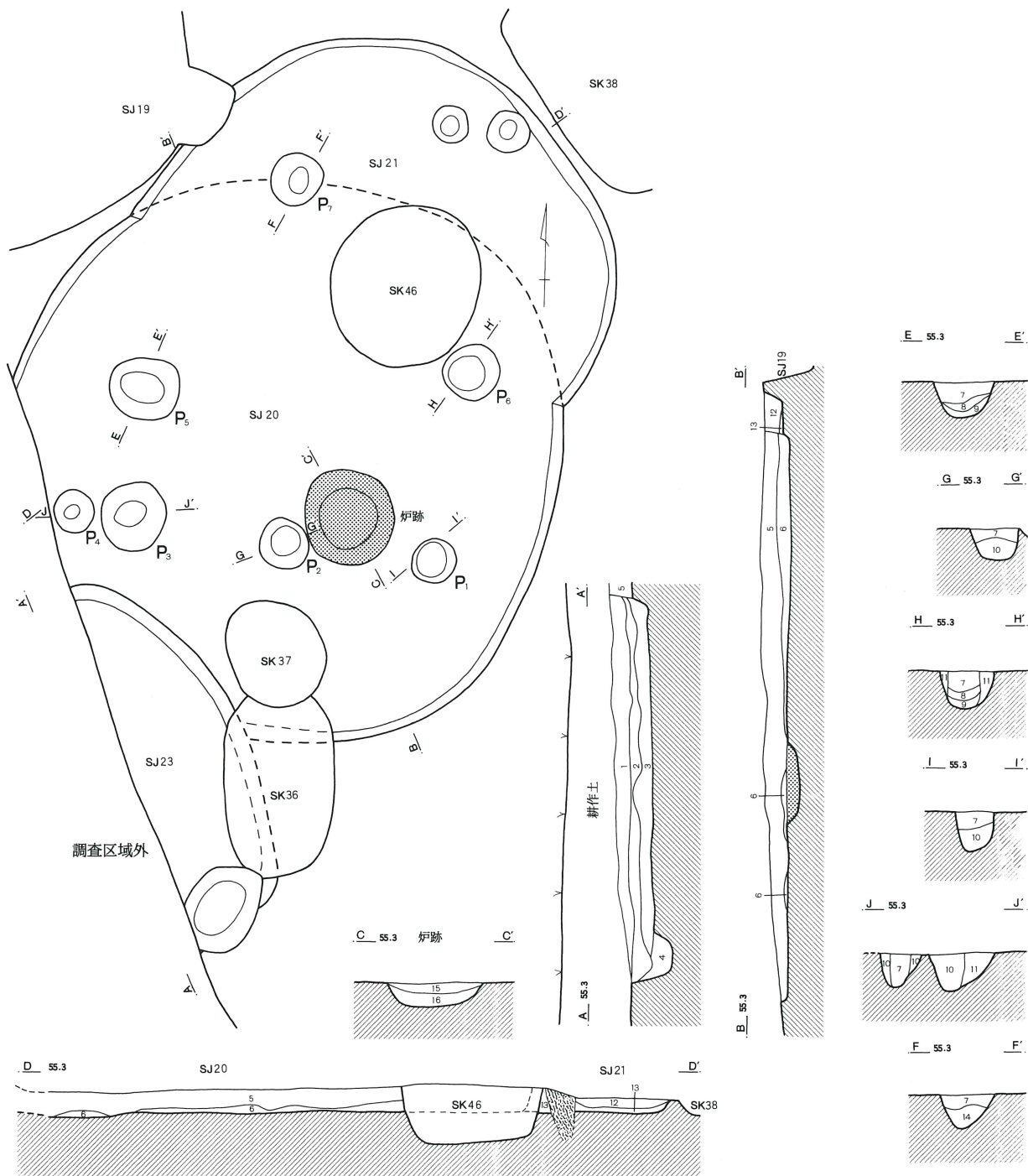
F-9・F-10区に所在する。北壁部分で第21号住居跡を切り、第46号土壇に切られる。また、南西壁の一部を第23号住居跡に切られる。第36・37号土壇とも重複関係にあるが、両者との新旧関係は不明である。西壁の一部が調査区域外に所在する。

不整形形の住居跡で、径約5.5mを測る。主軸方向は不明である。壁高は最も残りの良い北西部分で24cmを測る。床面は若干の凹凸を帯びるもののほぼ平坦である。壁溝は検出できなかった。

床面上から6本のピットを検出した。図中P1～6としたものがそれで、深さ25～37cmを測る。これらのうちP2は炉跡との位置関係から本住居跡に属する柱穴とするには無理のあるものであり、残るP1・P3（4）・P5・P6が壁から一定の距離をおいて長方形に並び、全体として四本支柱穴を構成するものと思われる。

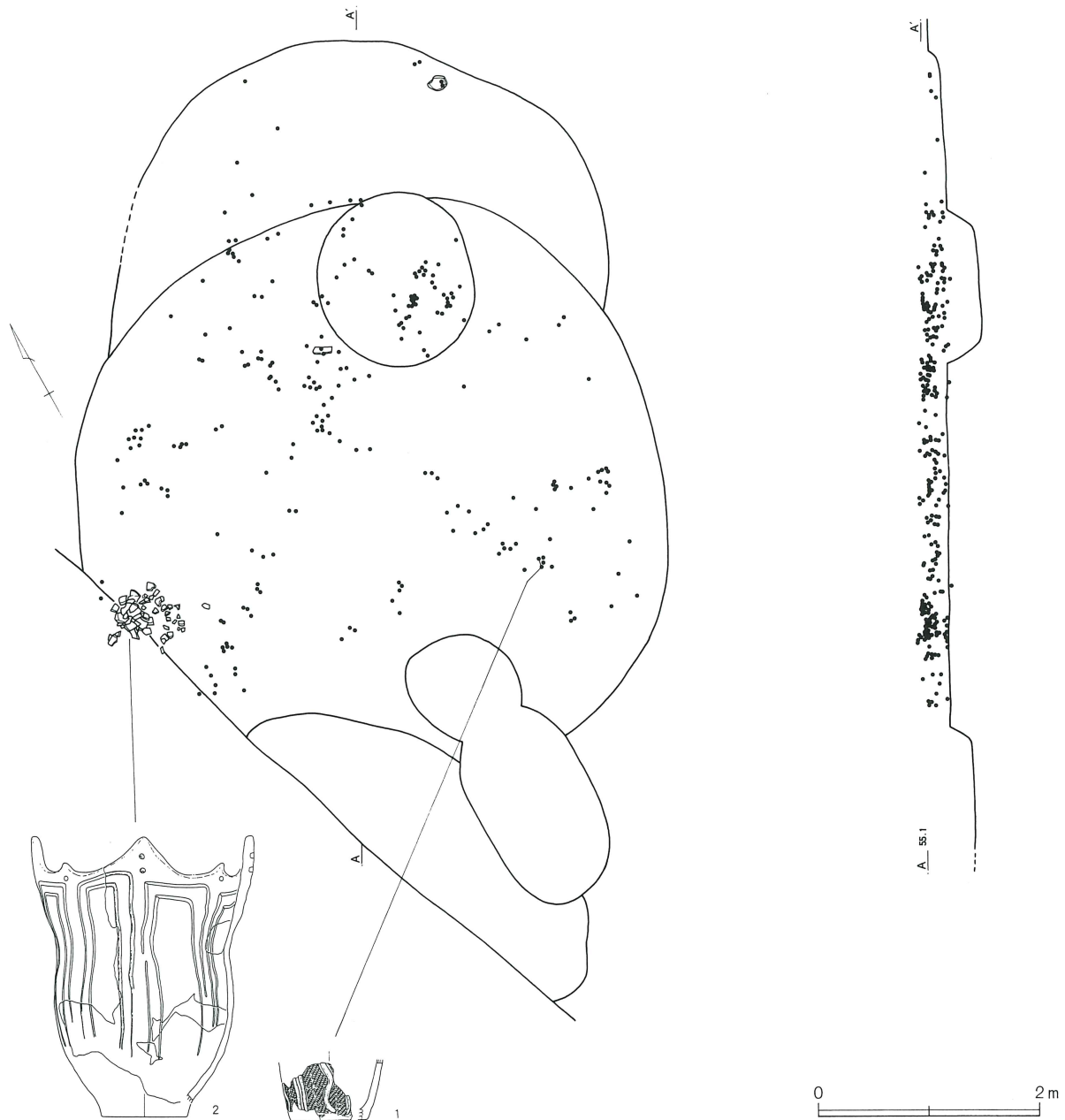
床面南東寄りで炉跡を検出した。不整形形の地床炉で、径約90cm、深さ24cmを測る。焼土の検出はさほど顕著ではない。

第57図 A区第20・21・23号住居跡



- | | |
|--|--|
| <p>A区 S J 20</p> <p>5 黒褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まりやや強、粘性弱</p> <p>6 褐色土 : ローム主体に5の黒褐色土が混在 締まり強、粘性弱</p> <p>7 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む</p> <p>8 黒褐色土 : ローム粒子少量含む</p> <p>9 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む</p> <p>10 暗褐色土 : ロームブロック少量含む</p> <p>11 褐色土 : ロームブロック多く含む</p> | <p>A区 S J 20 炉跡</p> <p>12 暗褐色土 : ローム混土 炭化物やや多く含む、焼土粒子少量含む</p> <p>13 褐色土 : ローム主体 炭化物少量含む</p> <p>A区 S J 21</p> <p>14 暗褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まりやや強、粘性弱</p> <p>15 暗黄褐色土 : ローム主体に7の暗褐色土が混在 締まりやや強、粘性弱</p> <p>16 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む</p> <p>A区 S J 23</p> <p>1 黒褐色土 : ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強</p> <p>2 暗褐色土 : ややローム質 焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強、粘性弱</p> <p>3 褐色土 : ローム主体で褐色土斑状に混じる 締まり強、粘性弱</p> <p>4 暗黄褐色土 : 再堆積ローム ボソボソした質感 締まり強、粘性弱</p> |
|--|--|

第58図 A区第20・21・23号住居跡遺物分布図



出土土器 (第59図)

1はキャリパー類深鉢の底部である。隆帯による蛇行懸垂文と二本隆帯の懸垂文が交互に配される。現存高9cm、底径10.6cmを測る。

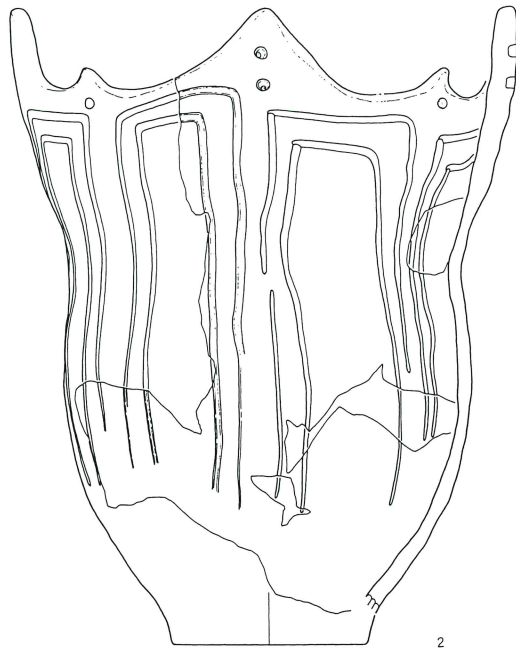
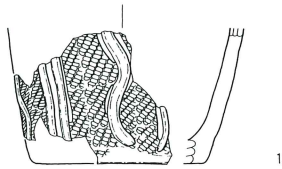
2は検出面付近で出土した大型深鉢である。4単位の山形大波状口縁の波底部に小波状の突起を配するもので、全体として大小の単位が交互に配置される構成となっている。胴部には逆U字の沈線モチーフが描かれる。現存高40cm、口径34cmを測る。

3～7はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。

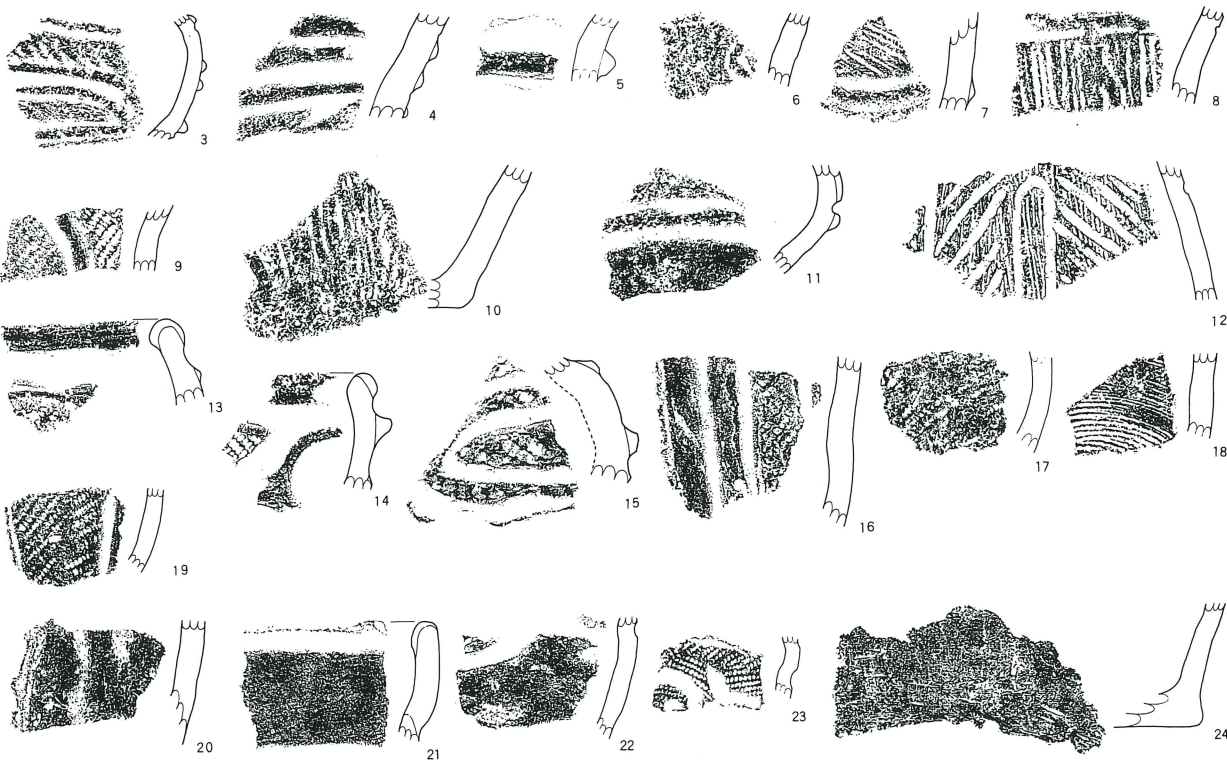
8は口縁部と頸部との間を区画する隆帯で、隆帯による蛇行懸垂文が垂下する。9も蛇行懸垂文である。10は底部で、蛇行懸垂文がみられる。12は曽利系の深鉢胴部で、逆U字形沈線とハの字形の集合沈線がみられる。地文は櫛歯状工具による条線である。

13・14はキャリパー類深鉢の口縁部である。15は両耳壺の肩部と思われる。16・19は磨消し懸垂文の深鉢胴部である。17は縄文のみ施文される破片、18は櫛歯状工具による縦位の条線がみられる。20は無文の胴部である。

第59图 A区第20号住居跡出土土器

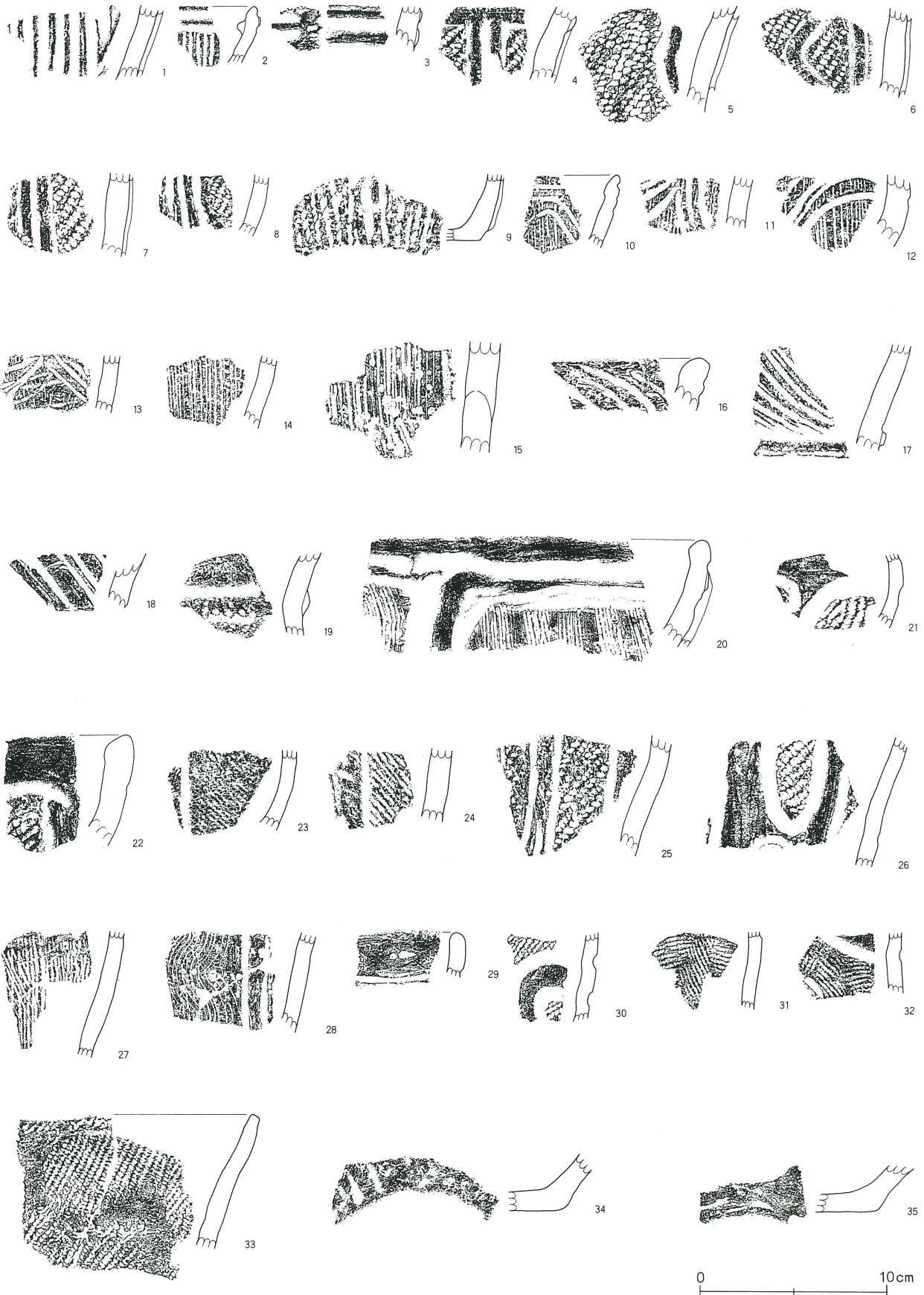


0 10cm



0 10cm

第60图 A区第21号住居迹出土土器



第61図 A区第23号住居跡出土土器



21は浅鉢口縁部で、1条の沈線によって胴部との境を区画する。

22・23は後期初頭の称名寺式である。24も後期段階の底部であろう。

A区第21号住居跡（第57図・第58図・第60図）

F-9区に所在する。南西部大半を第20号住居跡に切られる。平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、規模・主軸方向等一切不明である。壁高は最も残りの良い部分で16cmを測る。床面は検出された範囲においてほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。

床面上から3本のピットが検出された。これらのうち最も深いP7は深さ31cmを測る。支柱配置は不明である。炉跡は検出されなかった。

出土土器（第60図）

1は器壁に縦位の隆帯を密に貼り付け、棒状工具によるなぞりを施す。2はキャリパー類の口縁で、口縁直下の他、口縁内面にも隆帯が巡る。3は頸部と胴部とを区画する2条の隆帯で、一カ所で縦の隆帯がこれを横切っている。4～9は隆帯懸垂文の胴部および底部である。

10～13は連弧文系の土器である。14・15は櫛歯状工

具による条線のみが施文される。16～18は重弧文の口縁である。19は胴部と頸部の境のくびれの部分で横位の隆帯が巡り、胴部の縄文が一部で隆帯上に乗っている。

20は隆帯による1段懸垂文の施文される口縁で、D区第18号住居跡の炉体土器に類似する。口縁直下の横位隆帯から枝分かれするようにして縦位の隆帯が垂下する。地文は櫛歯状工具による条線である。21はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯であるが、隆帯を伴わず沈線のみによって文様が描かれる。22は逆U字形の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。

23～25は磨消し懸垂文の胴部である。26はH字状の磨消しモチーフが描かれる胴部中段の破片である。27は櫛歯状工具による条線が施される胴部、28は磨消し懸垂文の胴部で、波状の条線を地文に持つ。29は浅鉢口縁部で、口縁下に1条の沈線が巡る。

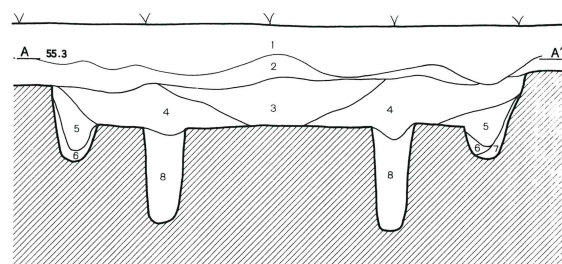
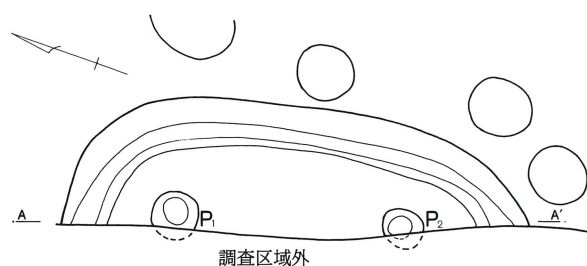
30～32は称名寺式で、33はこれに伴う粗製深鉢の口縁である。

34は深鉢底部で、沈線による懸垂文が垂下する。25は無文の底部で浅鉢または両耳壺に伴うものである。

A区第23号住居跡（第57図・第58図・第61図）

F-10区に所在する。大部分が調査区域外に存在し

第62図 A区第22号住居跡



A区S J 2 2

- 1 黒色土 : 耕作土
- 2 黒褐色土 : ローム粒子多く、焼土粒子少量含む 締まり・粘性弱
- 3 黒褐色土 : 焼土粒子多く、炭化物やや多く含む 締まり強、粘性弱
- 4 黒褐色土 : 焼土粒子多く、ローム粒子・炭化物少量含む 締まり強、粘性弱
- 5 暗褐色土 : ローム粒子多く、ロームブロック少量含む 若干の灰混じる 締まり強、粘性弱
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まり・粘性弱
- 7 褐色土 : ローム粒子多く含む 締まりやや弱、粘性やや強
- 8 暗褐色土 : ローム粒子多く含む 締まり・粘性弱



ており、北東壁の一部を発掘したに過ぎない。したがって規模・平面形・主軸方向とも不明である。調査部分の北半で第20号住居跡を切っており、また第36号土壇とも重複関係にあるが両者の新旧関係は不明である。壁高は残りの良い部分で35cm、床面はほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。

調査部分の南端で壁に掛かるピット1本が存在するが、本住居跡に伴うものであるかは不明である。炉跡は検出されなかった。

出土土器 (第61図)

1は半裁竹管による懸垂文が描かれる胴部である。2・3は頸部無文帯で、胴部との境を隆帯によって区画する。4・5は横位の隆帯区画から縦位の隆帯が垂下する懸垂文である。6も隆帯懸垂文である。7は磨消し懸垂文、9は平行沈線のみ懸垂文である。8は曾利系の口縁である。

10・11はキャリパー類の口縁で、10は櫛歯状工具による条線を地文に持つ。14は両耳壺の口縁部、15はその胴部である。

16は横位隆帯上に舌状の突起が付される口縁で、後

期初頭段階のものと思われる。

A区第22号住居跡 (第62図)

E-8・9区に所在する。大部分が調査区域外に存在するが、調査部分の平面形や柱穴配置から、東西に主軸を持つ可能性がある。南北径3.8mを測る。壁高は残りの良い部分で40cmを測る。床面は中央部分が若干高くなる。壁溝は発掘した範囲で全周する。

床面上から2本のピットを検出した。深さはP1が74cm、P2が85cmを測る。それぞれ住居跡の北東・南東のコーナーと推定される位置にあり、四本柱穴の奥壁寄りの2本を構成するものと思われる。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

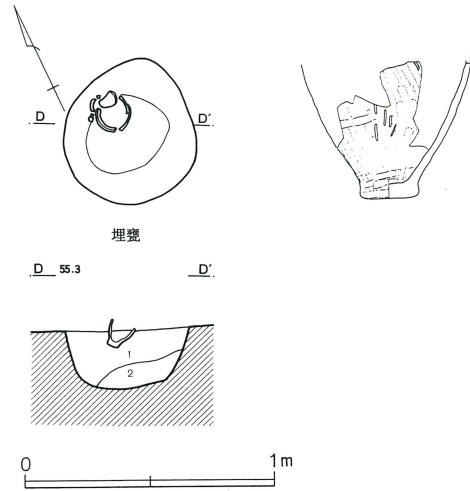
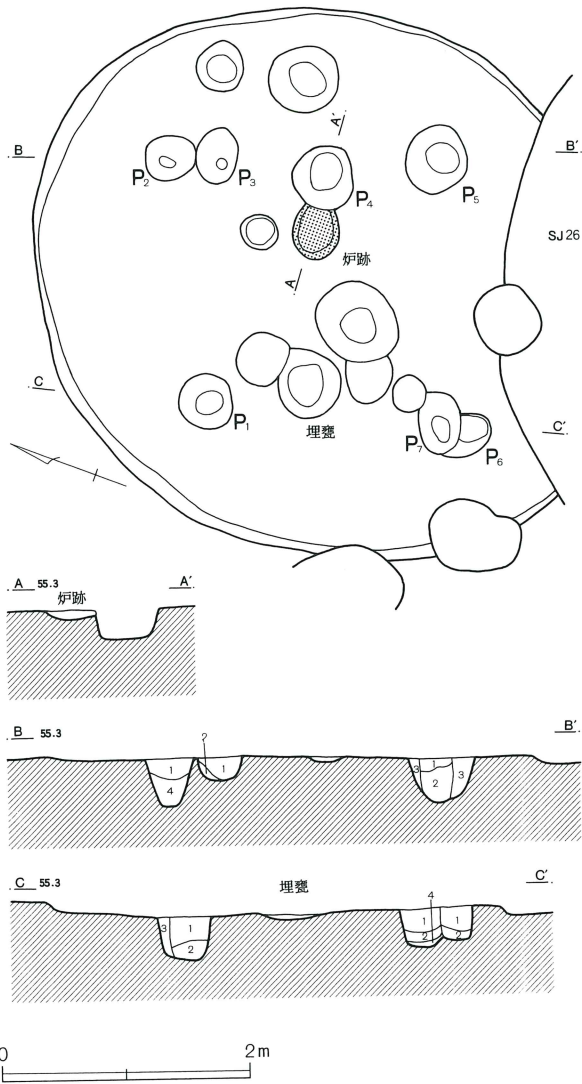
A区第24号住居跡 (第63図～第65図)

F-7区に所在する。南壁を第26号住居跡に切られる。5m×4.2m、南北に長い楕円形の住居跡であるが、炉跡と埋甕の位置関係を考慮するならば主軸方向はN-73°-Eを指すものと思われる。壁高は残りの良い部分でも10cmに満たない。

壁溝は検出されなかった。

床面上から12本のピットが検出された。これらのう

第63図 A区第24号住居跡



A区S J 2 4 埋壙
 1 暗褐色土 : ローム粒子多量、焼土・炭化物微量含む
 2 暗黄褐色土 : 再堆積ローム 締まりやや強

A区S J 2 4
 1 黄灰色土 : ロームブロック少量、ローム粒子微量含む 粘性強
 2 黒褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性強
 3 暗褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性やや弱
 4 暗黄褐色土 : 再堆積ローム 締まりやや弱

A区S J 2 4 炉跡
 1 暗褐色土 : 焼土粒子やや多く含み、ローム粒子少量含む 炭化物粒子少量含む

ちP 1・2 (3)・5・7 (6) が四本支柱を構成する可能性がある。深さは30~35cmを測る。

床面中央部北東寄りで炉跡を検出した。楕円形の地床炉で、長径45cm・短径35cm・深さ8cmを測る。

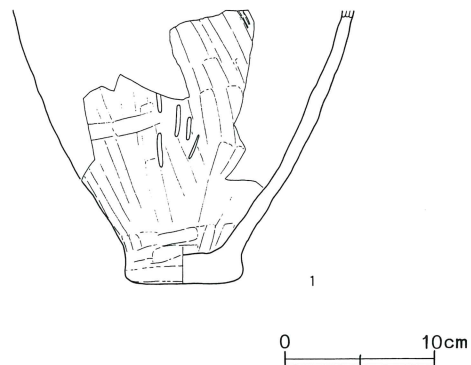
炉跡の西側約70cmを隔てて埋壙を検出した。深鉢胴下半部を、土器そのものよりもかなり規模の大きなピットに正位で埋設したものである。ピットは径約1.1mの不整円形で、深さ45cmを測る。

上記の埋壙のほか、覆土中から少量の遺物が出土している。大半が縄文時代中期末葉に属する土器の小破片である。

出土土器 (第64図・第65図)

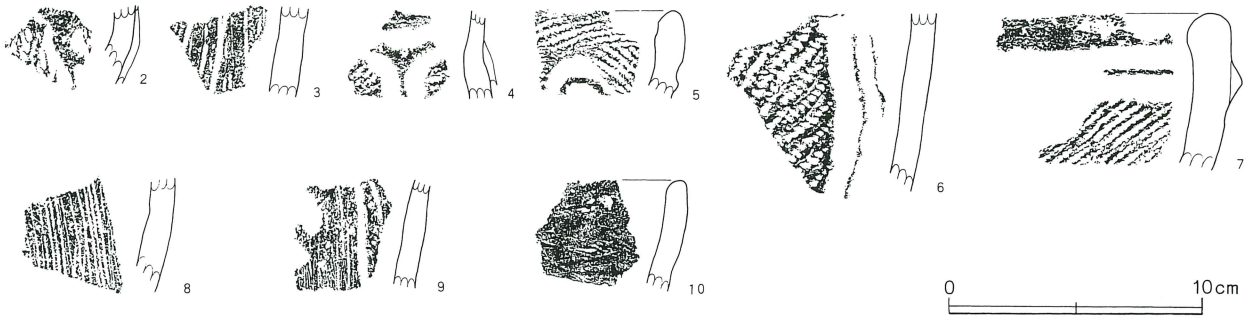
1は埋壙である。深鉢胴下半部から底部にかけて残

第64図 A区第24号住居跡出土土器 (1)



存する。厚手の底部から紡錘形の胴下半部へと接続する、比較的ほっそりとしたプロポーションである。棒

第65図 A区第24号住居跡出土土器（2）



状工具による短沈線が不規則に施文される。

全面に篋状工具による粗いなでが施され、底部周辺では横方向のなでがみられる。現存高18.2cm、底径7.5cmを測る。

2は隆帯による蛇行懸垂文である。3は縦位の集合沈線である。4は両耳壺の胴上半部で、隆沈線による区画文がみられる。5は吉井城山類の口縁で逆U字の沈線がみられる。6は両側になぞりを加えた2本一組の微隆起線によって文様が描かれる。7はキャリパー類の口縁部である。8は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。9は磨消し懸垂文で、地文は縦位の条線である。10は無文の口縁部である。深鉢か、両耳壺に伴うものであろう。

A区第26号住居跡（第66図～第68図）

F-7区に所在する。北壁部分で第24号住居跡を切っており、また第70号土壙とも重複関係にあるが、両者の新旧関係は不明である。平面形は東西に長い長楕円形を呈する。炉跡と埋甕を結ぶ線を主軸にとるならば、主軸方向はN-77°-Eを指す。壁高は最も残りの良い部分で16cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。

床面上から14本のピットを検出した。床面全体に不規則に散らばるのみで、また全てが本住居跡に伴うものであるか確認がないが、深さ35~45cmを測るP4・6・8・10・12・13などが炉跡から一定の距離をおいて壁柱穴を構成するものと思われ、P1・2・3は出入口部の施設に伴うものと思われる。

床面ほぼ中央で炉跡を検出した。検出状態では不整

円形の地床炉であるが、埋甕に隣り合う西壁部分のみ石材を有し、また炉跡検出面上でも礫の散布がみられることから、本来は石囲炉であった可能性が高い。長径60cm、短径53cm、深さ14cmを測る。

炉跡の西寄り25cmを隔てて埋甕を検出した。2個体の土器を入れ子状に埋設したものと思われるが、上位で発見された両耳壺は検出当初からほとんど器の原形をとどめておらず、復元後も各所に空白が目立つ。したがってこの土器は埋甕埋設の段階ですでに破片の状態であった可能性もある。

埋甕に伴う掘り方は不整円形のピットで、径50cm、深さ23cmを測る。

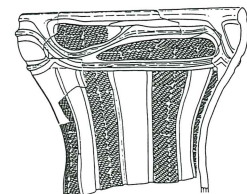
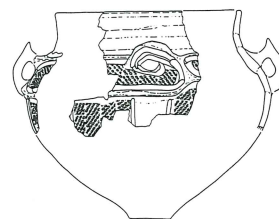
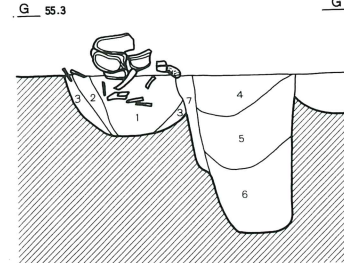
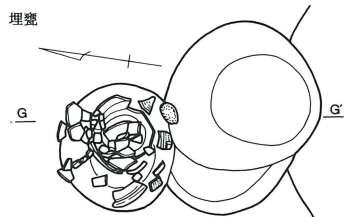
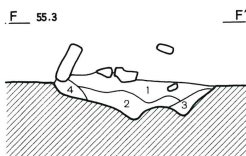
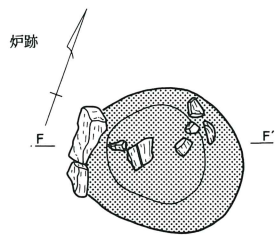
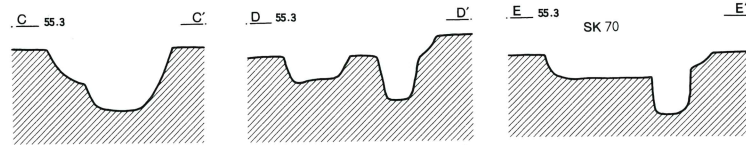
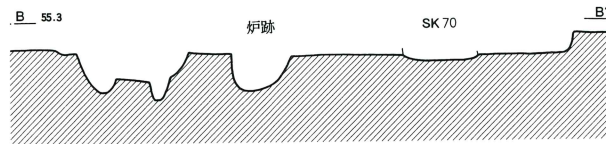
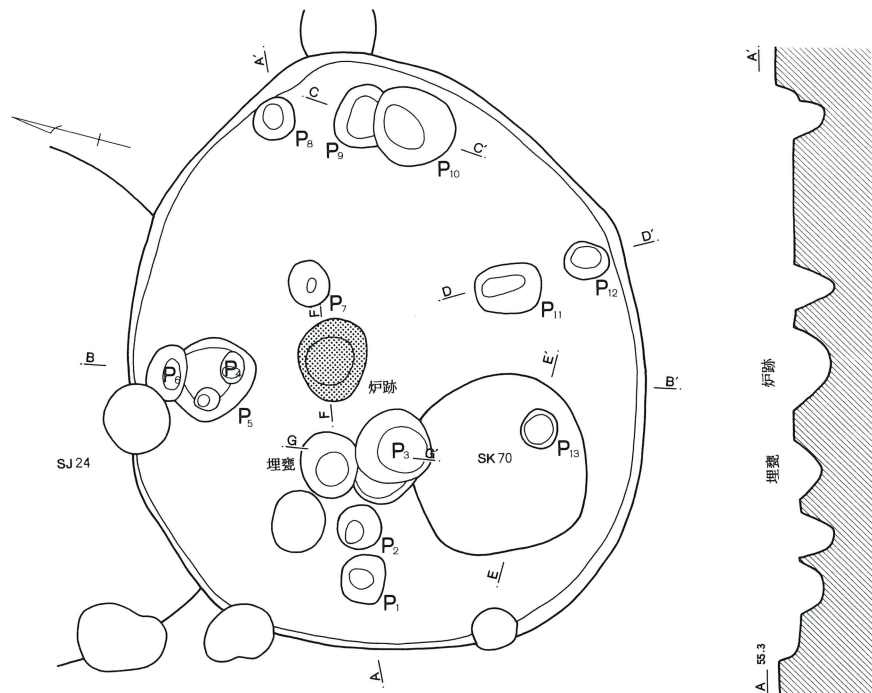
本住居跡からは上記の埋甕以外に中期末葉を中心とした土器と若干の石器が出土している。

出土土器（第68図）

1は埋甕下位の土器で、キャリパー類の深鉢である。胴下半部を欠失する。水平口縁で、口縁部文様帯は扁平な隆沈線による波状ないし入り組み状のモチーフへと変化しており、胴部には磨消し懸垂文が描かれる。地文はRL単節の縄文が全面にわたって縦位回転で施文される。現存高34.6cm、口径29.4cmを測る。

2は埋甕上位の土器で、両耳壺である。胴下半部を欠失し、他の部位についても断片的な出土である。肩部から胴上半部にかけてキャリパー類深鉢の口縁部文様帯に由来する隆帯区画文が形成される。渦巻文は内屈する肩部から垂直に立ち上がり、立体の突起を形成する。胴部は磨消し懸垂文である。地文はRLR複節の縄文である。現存高16.3cm、最大径32.6cm、口径

第66図 A区第26号住居跡



A区S J 2 6 炉跡

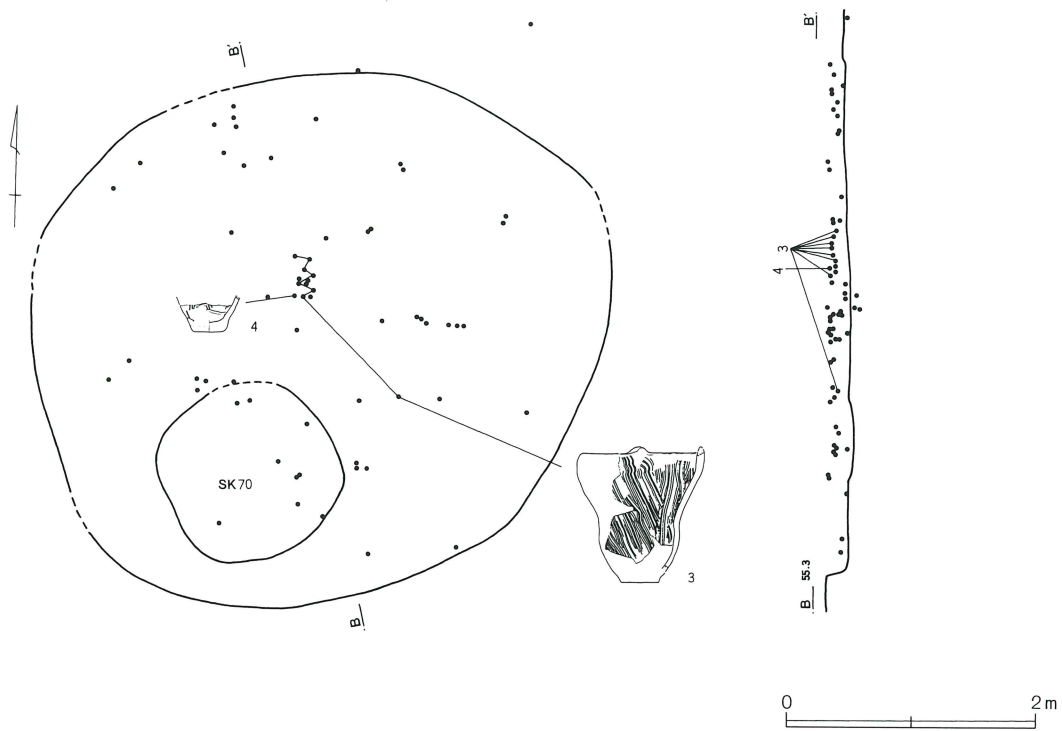
- 1 暗褐色土 : 焼土粒子やや多く、ローム粒子少量、炭化物微量含む
- 2 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子やや多く含む
- 3 暗黄褐色土 : 被熱した再堆積ローム
- 4 暗黄褐色土 : ローム主体で褐色土を混入

A区S J 2 6 埋壙

- 1 黒褐色土 : ローム粒子微量含む
- 2 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含み、炭化物微量含む
- 3 褐色土 : ローム主体で黒褐色土を混入炭化物微量含む
- 4 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量含む

- 5 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量含む
- 6 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子多く含む
- 7 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む

第67図 A区第26号住居跡遺物分布図



23. 3cmを測る。

3は小型の深鉢で、底部を欠失する。水平口縁上に半月形の小突起が付されるが、単位数は不明である。胴部には櫛歯状工具による条線のみが施文される。現存高16.8cm、口径17cmを測る。

5はキャリパー類の頸部である。口縁部文様帯から頸部無文帯にかけての破片で、両者の境を区画する横位の隆帯がみられる。6も頸部無文帯で、胴部との境を区画する横位の二本隆帯がみられる。7はこの隆帯区画から胴部上半にかけての破片である。一本隆帯の蛇行懸垂文の断片がみられる。8は二本隆帯の懸垂文、9は磨滅が著しいが、蛇行懸垂文の一部と思われるものである。10・11は連弧文土器である。櫛歯状工具の条線を地文に持ち、棒状工具による平行沈線で文様が描かれる。12は無文の口縁で、内面に稜を形成する。曾利系の大型深鉢に伴うものと思われる。

13・14はキャリパー類の口縁である。15・17は口縁部文様帯の下端を区画する横位の隆沈線で、頸部に磨消し懸垂文がみられる。16は周囲を隆沈線によって囲

まれる横楕円形の区画で、横位回転の縄文が施文される。18・19は同一個体の口縁と思われるものである。口縁直下に1条の沈線が巡り、これに接して逆U字の磨消しモチーフが描かれる。

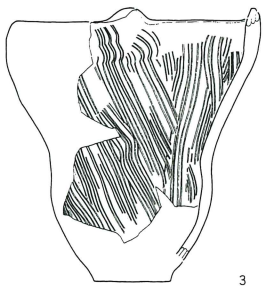
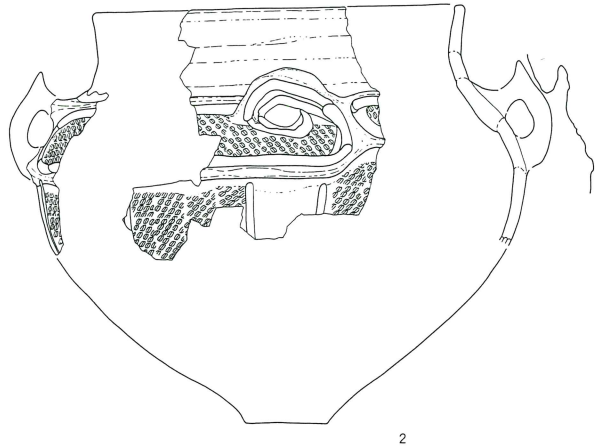
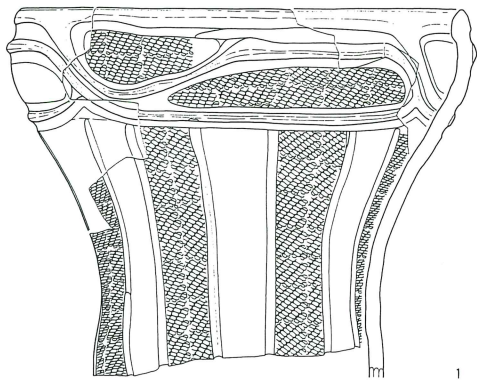
地文はLR単節の縄文が口縁部直下のみ横位に、それ以外では縦位に施文される。20はRL単節の縄文だけがみられる口縁部である。

21・22は磨消し懸垂文の深鉢胴部である。23は櫛歯状工具による条線が施される胴部である。24も櫛歯状工具による波状の条線であるが、大型の施文具を用いている。25は無文の胴下半部である。

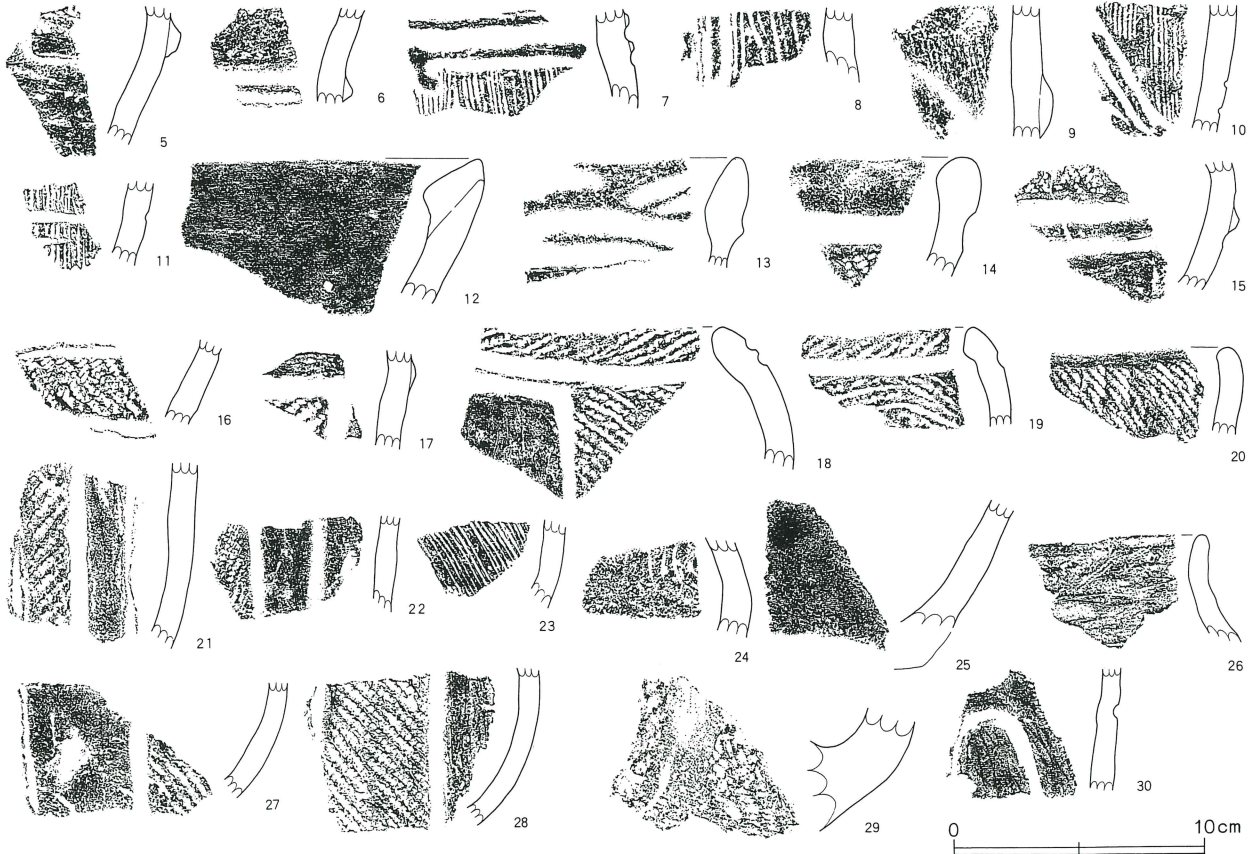
26は両耳壺の口縁部である。内傾しつつ立ち上がり、口端部でくの字に外反する。横位のなで調整が顕著である。27・28は両耳壺の胴下半部で、磨消し懸垂文が施文される。

29は両耳壺の把手である。把手背面には幅広のなぞりが施され、両側縁に縄文が施文される。30は後期初頭の称名寺式であろう。

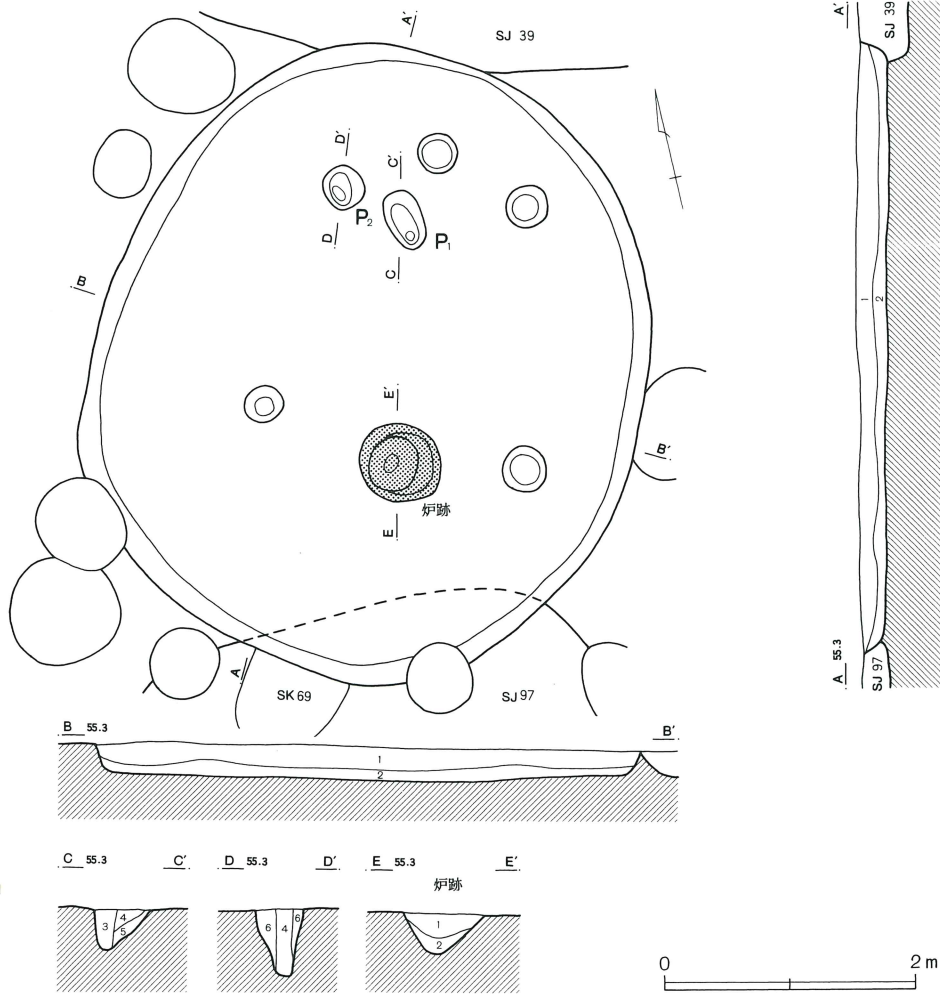
第68图 A区第26号住居迹出土土器



0 10cm



第69図 A区第27号住居跡



- A区S J 2 7
- 1 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子少量含み、炭化物微量含む 締まりやや強、粘性弱
 - 2 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量含む 締まりやや強、粘性弱
 - 3 褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック少量含む 締まり弱、粘性弱
 - 4 暗褐色土 : ローム粒子多く、ロームブロック少量、炭化物微量含む 締まり強、粘性弱
 - 5 暗黄褐色土 : ローム主体で褐色土を混入 締まり強、粘性弱
 - 6 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物少量含む 締まり強、粘性弱
- A区S J 2 7 炉跡
- 1 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強、粘性弱
 - 2 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック少量含む 締まり強、粘性弱 底面に被熱の痕跡あり

A区第27号住居跡 (第69図・第70図)

E-7区に所在する。北壁部分で第39号住居跡を、南壁部分で第97号住居跡を切る。

楕円形の住居跡で、主軸方向N-13°-Eを指す。長径5m、短径4.5m、壁高は残りの良い部分で23cmを測る。床面はほぼ平坦で、中央部分が周囲よりやや低く、西壁付近では若干高くなる。壁溝は検出されな

かった。

床面上からは6本のピットが検出された。炉跡の東西に1本づつ、北壁寄りに4本が集中して検出された。最も深いP1が52cmを測り、これに次ぐのがP2で深さ32cmを測る。これ以外のピットについては規模が貧弱で、全体の配置にも規則性がみられない。したがって本住居跡の支柱配置は不明である。

炉跡は主軸線上南寄りに位置する。不整円形の地床炉で、2段の掘り込みを有する。径65cm、深さ30cmを測る。

本住居跡からは縄文時代中期後葉から末葉にかけての土器片少量が出土している。全体的な量の少ないうえに時期的なまとまりにも欠けるため、住居跡そのものの所属時期は不明とせざるを得ない。

出土土器 (第70図)

1はキャリパー類の口縁部である。外面に1条の隆帯が巡り、内面に稜を持つ。2は頸部無文帯である。3は口縁部と頸部を区画する隆帯である。4・5は隆帯による蛇行懸垂文、6は半裁竹管状工具による平行沈線で描かれる蛇行懸垂文である。

7は平行沈線による渦巻文で、唐草文系の文様である。8は地文条線上に横位に巡る沈線で、連弧文土器に伴う区画文であろう。9は平行沈線による懸垂文である。10~12・16・17は櫛歯状工具による条線の施される胴部である。13は半裁竹管状工具による平行沈線

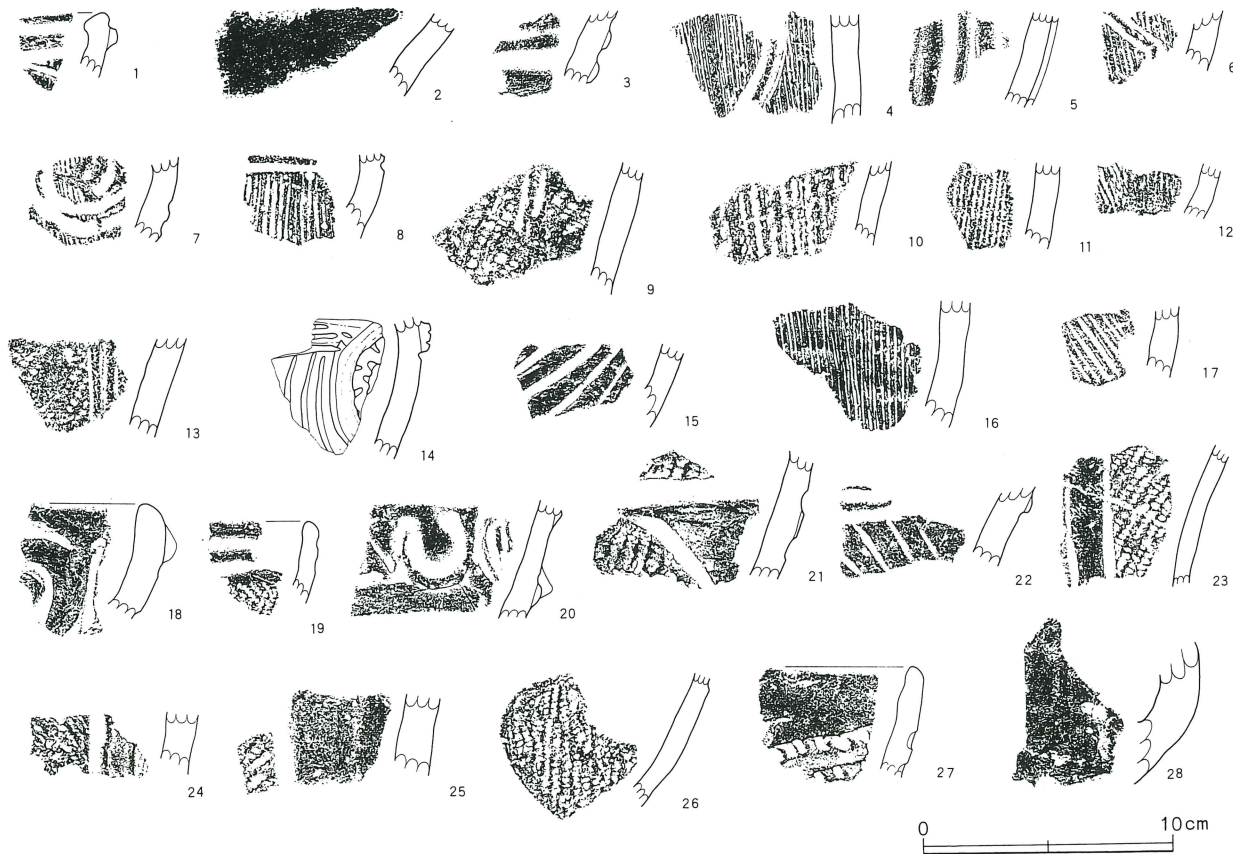
が2本一組で垂下する。

14は曾利系の胴部で、交互刺突を伴う隆帯がみられる。15は重弧文である。

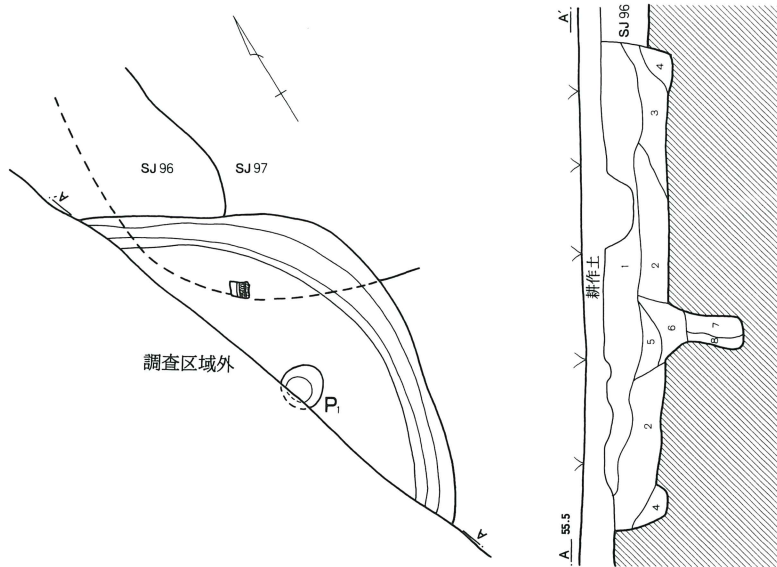
18・19はキャリパー類の口縁部である。18は扁平な隆帯により楕円形の区画が描かれ、区画内部にのみ沈線によるなぞりが加えられる。19は幅広かつごく浅い沈線で文様が描かれる。連弧文系の個体であるかも知れない。20は口縁部の渦巻文で、キャリパー類の深鉢として復元したが、両耳壺に伴うものである可能性がある。両側の区画内部には縦位の短沈線が充填される。21は口縁部と胴部を区画する扁平な隆帯である。胴部には逆U字の沈線文が描かれ、内部に縄文が充填される。22は同様の部位で、胴部には地文として斜位の集合沈線が施文される。23~25は磨消し懸垂文の胴部である。D区第15号住居跡埋甕に類似する。

26は両耳壺の胴下半部とみられるものである。27は斜位の刺突列を伴う平行沈線が口縁下に巡る。28は両耳壺の把手である。

第70図 A区第27号住居跡出土土器



第71図 A区第28号住居跡



- A区S J 28
- 1 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子若干、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物微量含む 硬く締まっている
 - 2 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子若干、焼土粒子微量含む 硬く締まっている
 - 3 黒褐色土 : ローム粒子若干、焼土粒子・炭化物微量含む 締まりやや弱
 - 4 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子やや多く、焼土ブロック微量含む 粘性強
 - 5 暗褐色土 : 2より暗色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む
 - 6 暗褐色土 : 5より暗色 ロームブロック・ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む 粗粒で締まり弱
 - 7 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く、炭化物微量含む 締まり弱
 - 8 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、炭化物微量含む 締まり弱



A区第28号住居跡 (第71図・第72図)

E-7・8区に所在する。北壁部分で第96・97号住居跡を切っている。

大部分が調査区域外に存在し、北東コーナーの一部が発掘されたに過ぎない。したがって、本住居跡の規模・平面形・主軸方向等は不明である。壁高は残りの良い北壁部分で50cmを測る。床面には若干の起伏がみられ、特に壁溝に接する部分は一段高くなる傾向にある。壁溝は発掘された部分については全周するが、深さは数cmから深いところでも10cm未満であり、壁溝自体で壁体を支えていたというよりは、覆土4層とした粘性に富む暗褐色土の被覆によるところが大きかったものと思われる。床面上からは1本のピットが検出された。深さ60cmを測る。住居跡コーナー部分で検出されており本住居跡の支柱穴と考えられるが、土層断面の観察所見からは住居跡が埋没する途中のある段階で覆土を切って掘り込まれているように見える。これは埋没途上の堅穴に何らかの施設が設けられたというよりは、上屋を完全に解体・撤去しない段階で人為的な埋め戻しが行われ、その後立ち腐れの状態の柱材が抜

き取られたために、図示したような断面ができあがったものと思われる。本ピットが住居跡床面より下では明確に柱痕を残しながら、それより上では一転して水平堆積となるのはこのためではないだろうか。

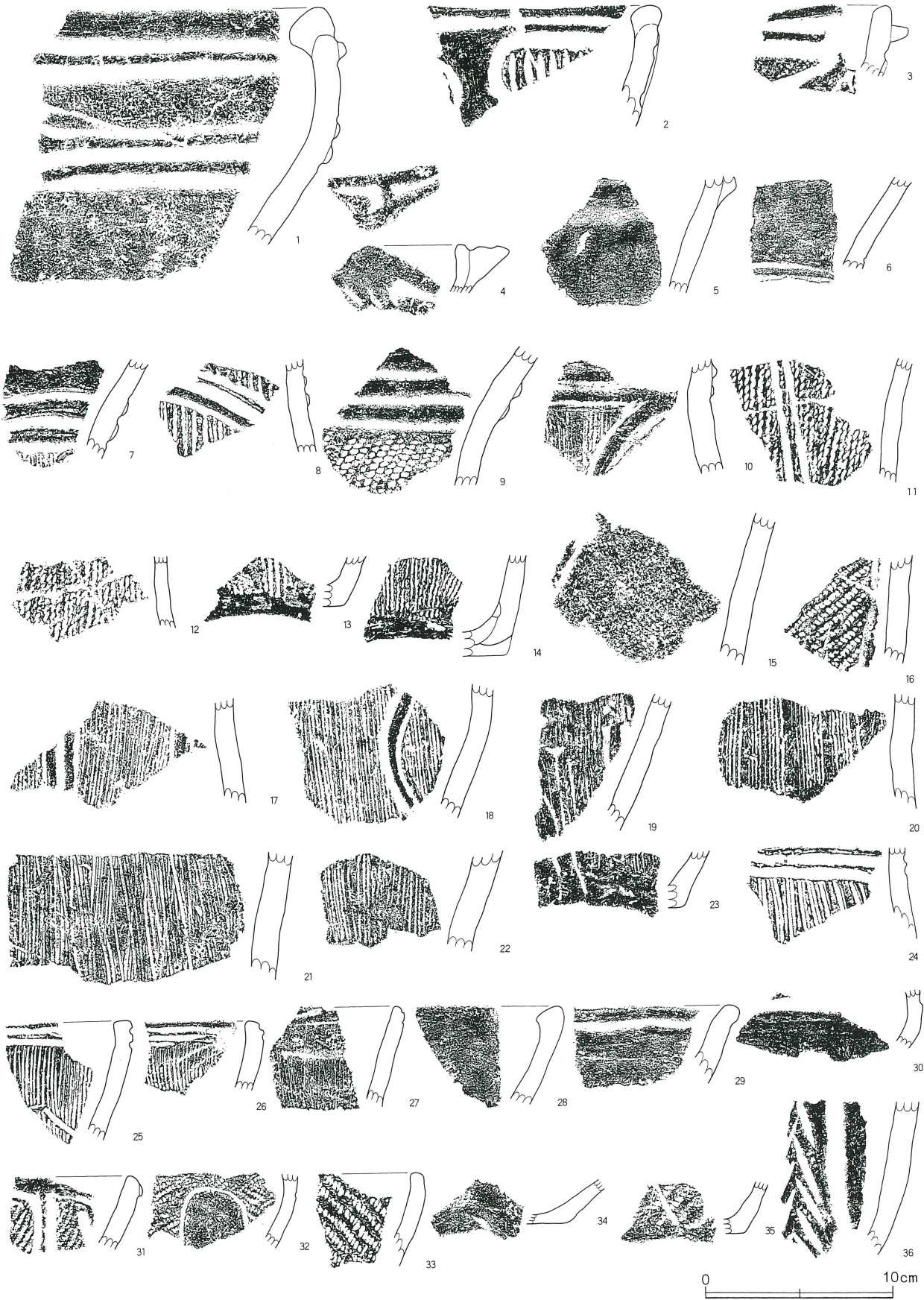
本住居跡からは縄文時代中期後葉を中心とした遺物が出土している。

出土土器 (第72図)

1～4はキャリパー類の口縁部である。1は頸部まで連続する大破片で、北壁寄りの床面直上で出土した(遺構図版参照)。水平口縁で口唇肥厚し、内面には隆帯貼り付けにより稜を形成する。上下に沈線によるなぞりを加えた隆帯によってしっかりした口縁部区画が構成され、頸部に無文帯を持つ。地文は櫛歯状工具による条線である。

2は扁平な隆沈線によって横楕円形の区画が構成され、内部に縦位の集合沈線が充填される。3は緩やかな波状口縁をなすものと思われる。地文縄文で、比較的背の高い隆帯によって繫弧文的なモチーフが描かれるものとみられる。4は波状口縁の波頂部に付される突起である。両側縁および口端上面にわらび手状の沈

第72图 A区第28号住居跡出土土器



線が描かれる。

5・6は同じくキャリパー類の頸部無文帯で、5は口縁部文様帯との間を区画する隆帯、6は胴部との間を区画する平行沈線が観察される。7・9・10は頸部から胴部にかけての破片である。両者の間を区画する2本一組の隆帯がみられ、10はここから蛇行懸垂文が分岐する。

11~24はキャリパー類深鉢の胴部から底部にかけての破片である。11~14は撚糸文、15・16は縄文、17~24は櫛歯状工具による条線を地文とする。15は平行沈線、17・18は隆帯による蛇行懸垂文である。24は胴部中段に平行沈線による横位の区画を持っており、連弧文系の土器である可能性もある。13・14は底部付近で、裾部分に横位の削りが施される。

25~27は連弧文系の口縁部である。地文条線で、口縁直下に2条の平行沈線が巡る。25・26は連弧文土器に一般的な内湾する口縁であるが、27だけは直線的に開いてむしろ外反する傾向にあり、特異な器形である。

28・29は無文の口縁である。28は内面に稜を持ち、29は口端部が外屈して段を形成する。30は胴張りの無文浅鉢で、頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部には幅広の凹線がみられ、口縁部との間に段を形成するものと思われる。

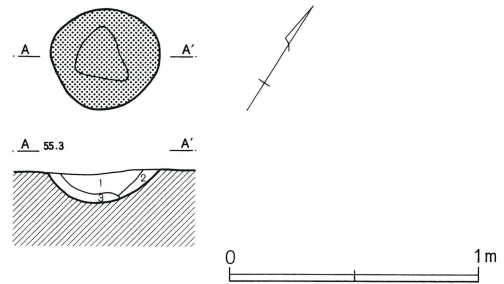
31以下は中期末葉を中心としたより新しい段階の土器群で、覆土中への混入とみられるものである。31は両側になぞりを加えた隆帯によってパネル上の区画文様が描かれる口縁部で、梶山類ないし一段懸垂文類に属するものである。区画内には縦位の縄文が充填施文される。32は逆U字の磨消しモチーフが描かれるもので、口縁部直下の破片であろう。33は波状口縁で、縄文のみが施文される。

34は無文の底部である。浅鉢ないし両耳壺の底部であろう。35は縄文のみ施文される底部である。

36は曾利系の深鉢胴下半部である。平行沈線による懸垂文の間にハの字状短沈線が充填される。

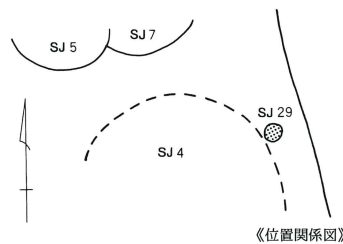
第73図 A区第29号住居跡

炉跡



A区S.J 29 炉跡

- 1 暗褐色土 : 焼土粒子多く、焼土ブロック・ローム粒子少量含む
- 2 暗黄褐色土 : ローム粒子多く含む
- 3 暗黄褐色土 : 暗黄褐色土 被熱した再堆積ローム



A区第29号住居跡 (第73図)

I-9区で炉跡のみを検出した。第4号住居跡と重複するものとみられるが、両者の新旧関係は不明である。ピットその他の施設が一切検出されなかったため本住居跡の規模・平面形・主軸方向など一切不明である。炉跡は不整形の地床炉である。径42cm、深さ12cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

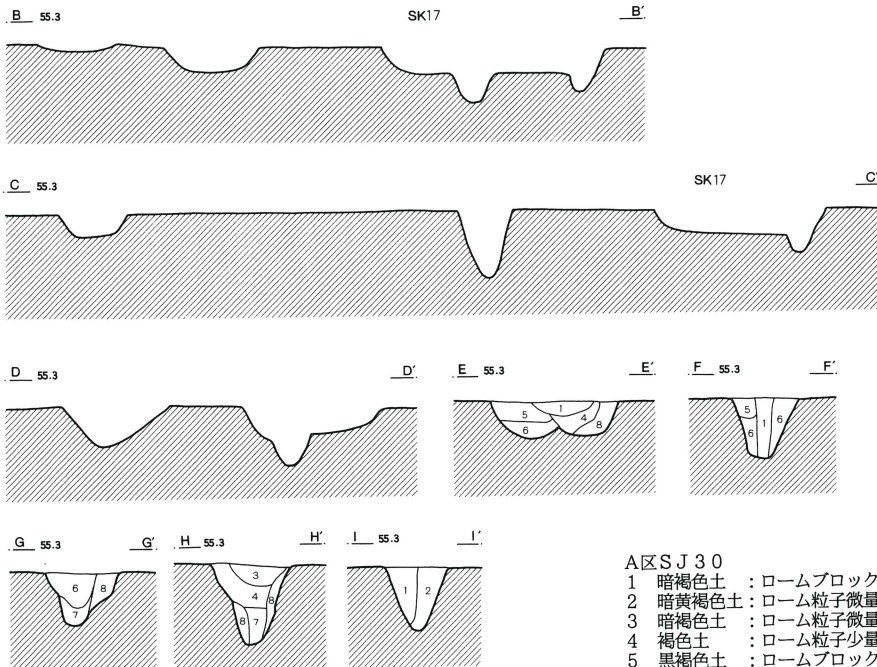
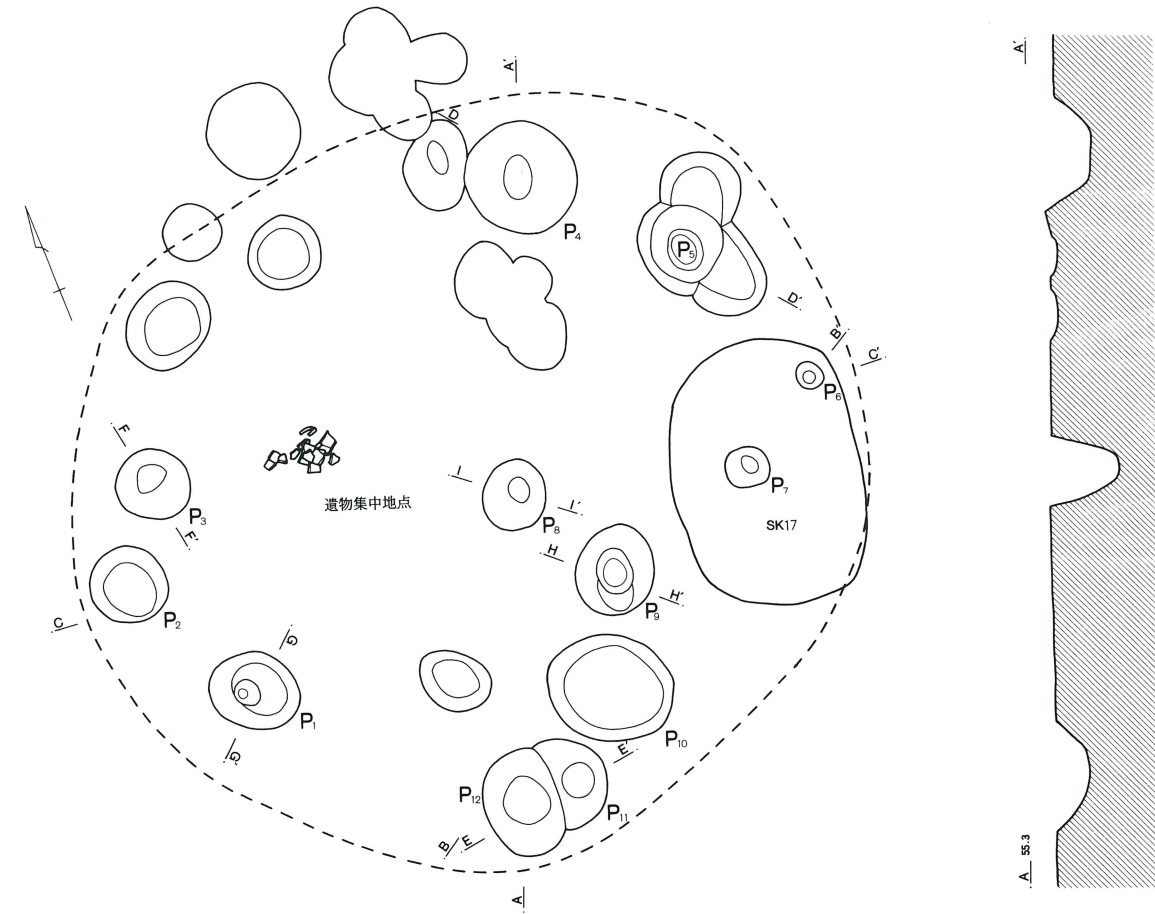
A区第30号住居跡 (第74図・第75図)

G-8区に所在する。第17号土壙と重複関係にあるが、両者の新旧は不明である。

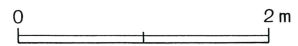
壁は残存せず、深さ40~60cmのピットだけが長径6.5m、短径5.7mの範囲に分布する。ピットはほぼ環状に分布し、南の一角ではやや密集する傾向にある。炉跡・壁溝などの施設は一切検出されなかった。

床面西寄りの一角で土器の大破片が集中して出土した。これらの土器は全て縄文時代中期末葉に属するものである。

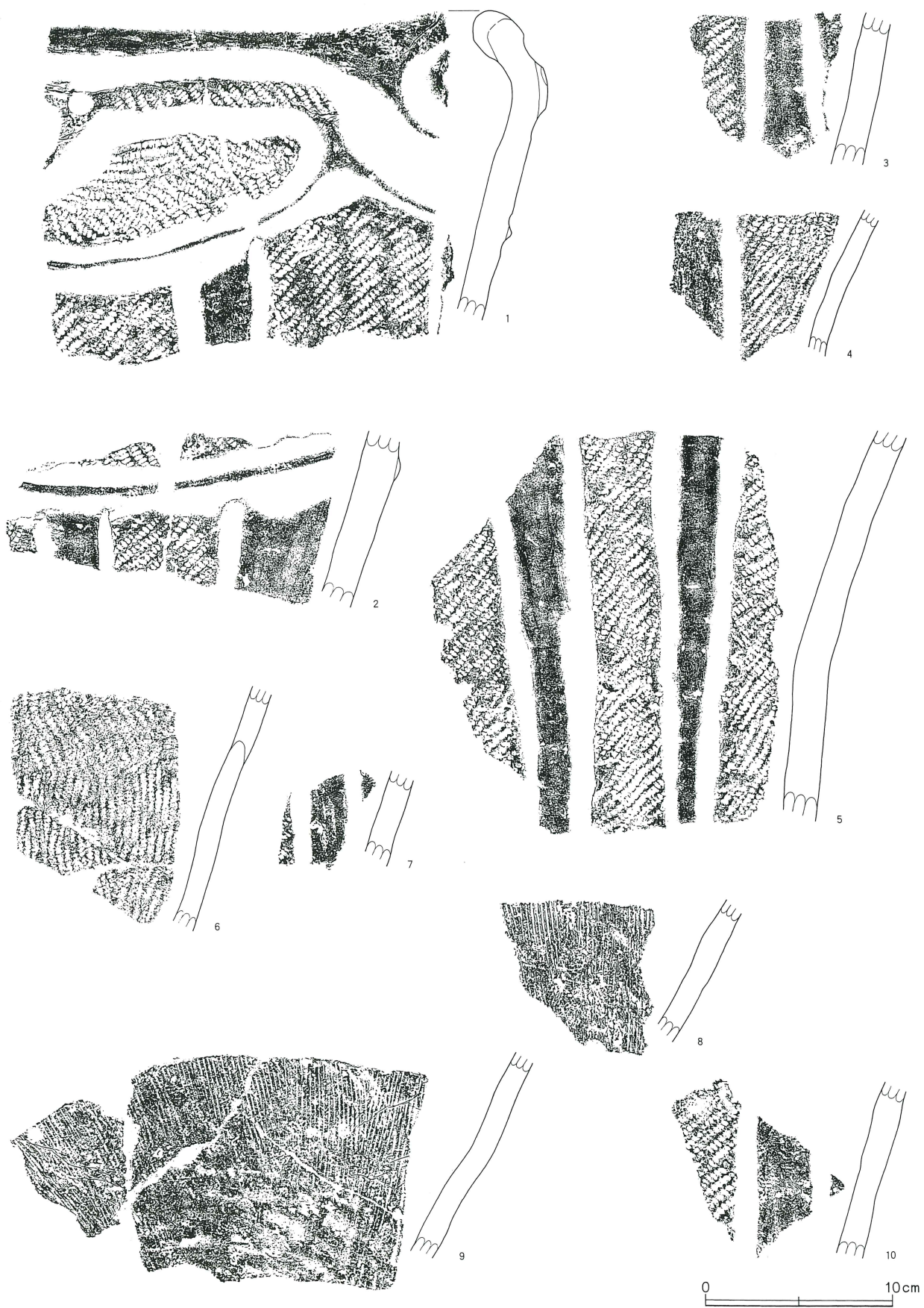
第74図 A区第30号住居跡



- A区S J 30
- 1 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子微量含む
 - 2 暗黄褐色土 : ローム粒子微量含む
 - 3 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
 - 4 褐色土 : ローム粒子少量含む
 - 5 黒褐色土 : ロームブロック微量含む 締まりやや弱
 - 6 暗褐色土 : ロームブロック多く含む
 - 7 暗褐色土 : ロームブロック少量含む
 - 8 黒褐色土 : ローム粒子多く、ロームブロック微量含む



第75图 A区第30号住居迹出土土器



出土土器（第75図）

1はキャリパー類深鉢の口縁部である。口縁部文様帯の区画文は形骸化し、沈線部分主導の入り組み状モチーフへと変化している。渦巻文へと連続する隆帯の末端部には指頭による円形の刺突が配される。胴部との境は隆沈線による波状の区画によって分帯される。胴部には懸垂文が垂下するが、口縁部文様との対応関係は失われている。地文はRL単節の縄文が胴部では縦位に、口縁部では楕円形の区画内に充填手法で任意に施文される。また、一部で隆帯上にも縄文が施文される。

2は同じくキャリパー類の頸部で、1と同一個体である可能性がある。口縁部と胴部の文様帯を区画する波状の隆沈線がみられ、胴部には磨消し懸垂文が施文される。地文はRL単節の縄文である。

3はキャリパー類の胴部である。3本一組の沈線による磨消し懸垂文が施文される。地文はRL単節の縄文である。7・10も3本一組の沈線による磨消し懸垂文で、3と同一個体の可能性がある。

4もキャリパー類の胴部で、磨消し懸垂文が施文される。1～3と比較して薄手の破片である。地文はRL単節の縄文であるが、破片の上下で明らかに節の大きさが異なっており、2種類の原体が使い分けられている。本資料は垂直に立ち上がった胴部が頸部から口縁部に向けて朝顔状に開く、いわば器形の変換点にあたっているため、この部分で土器製作が中断されており、それ以前とそれ以後で異なる原体を用いたものであろう。

5はキャリパー類の胴部の大破片で、胴部中段のくびれ部分である。垂直に立ち上がった胴部が口縁部に向けてくの字に折り返される。1・2と同一個体の可能性があるが、磨消し懸垂文の間隔がいくぶん狭すぎようでもある。地文はRL単節の縄文である。

6は縄文のみ施文される深鉢胴部である。地文はRL単節の縄文であるが、4と同様に2種類の原体が用いられており、土器製作の中断が推察される。事実、

原体の変化する部分では上から下への粘土の被りが観察され、また断面上でも明確な輪積み痕の存在が認められる。

8は櫛歯状工具による条線が施文されるもので、浅鉢ないし両耳壺の胴部であろう。9もこれと同一個体と思われるものである。特に9は底部に近い部位の破片であると考えられ、篋状の工具を用いた斜位の粗い調整が観察される。

以上、本住居跡の遺物集中地点から出土した土器は最低でも4個体以上から構成されており、同一個体であると思われるものも互いに連続性のない断片的な資料である。周辺にピット等の施設がみられなかったことから考えても、この遺物集中地点は完形に近い状態の土器を埋設した埋甕状の施設ではなく、おそらくは住居跡床面上における単純な一括廃棄と考えるのが妥当であると思われる。

A区第31号住居跡（第76図）

G-5・6区に所在する。炉跡を中心として大小のピット群が8m×7.5mの長楕円形の範囲に散在するものである。単体の住居跡としては規模が大きすぎるようでもあり、複数の遺構が切り合っている可能性もある。

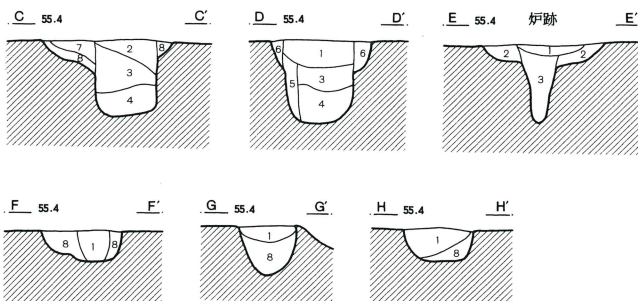
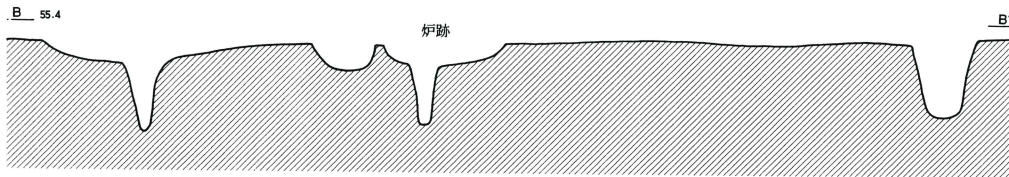
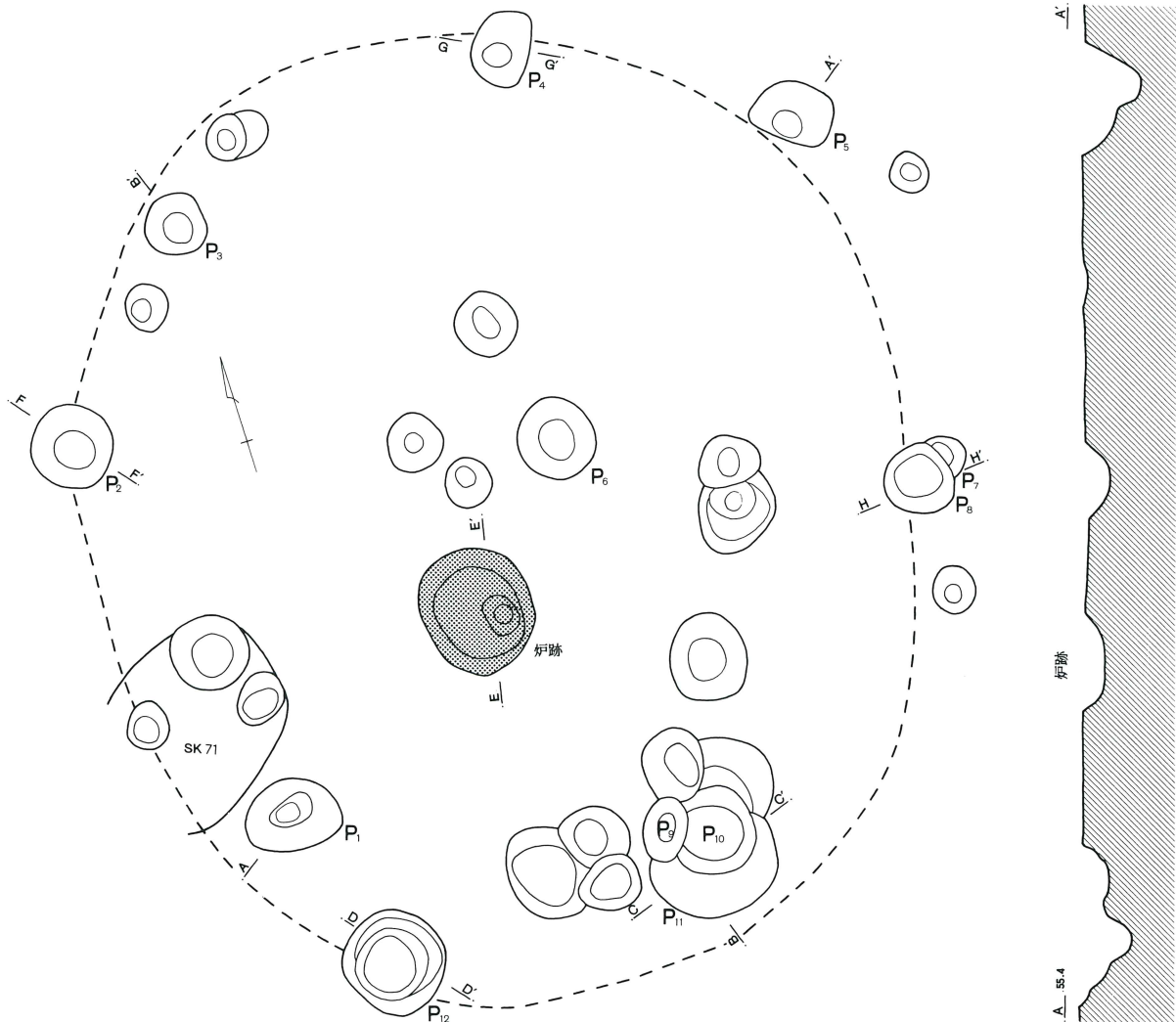
ピットは楕円形の外形に沿ってほぼ均等に巡って壁柱穴の構成をとるものと思われるが、南東方向ではやや中央寄りに密集する傾向にある。ピットの検出面からの深さは25～65cmである。

壁は全く検出されず、壁溝なども検出されなかった。したがって、本住居跡の正確な規模・平面形・主軸方向は不明である。

炉跡はピット群の中央やや南寄りに所在し、南北に主軸を持つ不整楕円形の地床炉である。炉床面南東部に深さ約45cmのピットを伴っている。このピットの覆土中にも焼土・炭化物が含まれるため、炉体土器の埋設など炉に伴う何らかの施設の痕跡であると考えられる。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第76図 A区第31号住居跡

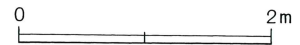


A区S J 3 1

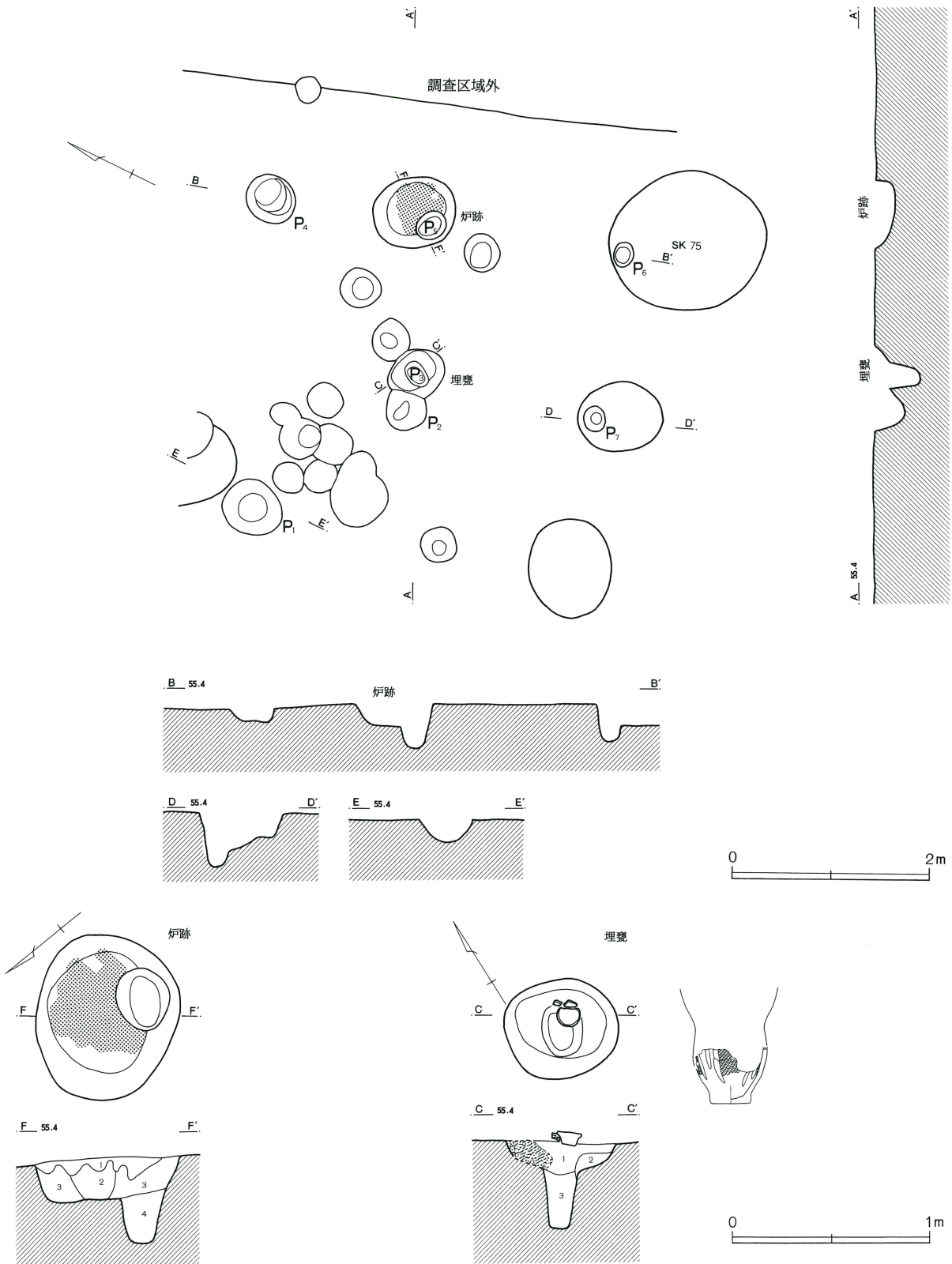
- 1 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む 締まり・粘性強
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 3 暗褐色土 : ローム粒子微量含む 硬く締まっている
- 4 黒褐色土 : ローム粒子微量含む 硬く締まっている
- 5 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む
- 6 褐色土 : ロームブロックやや多く含む 締まり欠く
- 7 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む 締まり・粘性強
- 8 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 締まり・粘性強

A区S J 3 1 炉跡

- 1 赤褐色土 : 焼土ブロック・焼土粒子多く含む
- 2 赤褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 3 赤褐色土 : 焼土粒子・ローム粒子・炭化物若干含む



第77図 A区第33号住居跡



A区S J 33 炉跡

- 1 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子を多く含む 締まり良、粘性欠
- 2 暗褐色土 : 被熱ロームブロックやや多く含む 締まり、粘性やや弱
- 3 暗黄褐色土 : 被熱した再堆積ローム 上面は焼土化する 非常に硬く締まっている 粘性強
- 4 黒褐色土 : ロームブロック少量含む 締まり良、粘性強

A区S J 33 埋甕

- 1 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、焼土粒子微量含む 締まりやや強、粘性弱
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まりやや強、粘性弱
- 3 黒褐色土 : ローム粒子多く、炭化物微量含む 締まりやや強、粘性弱

A区第33号住居跡（第77図・第78図）

G-5・6、H-5・6区に所在する。調査区の壁に近接して炉跡と埋甕が発見され、これに伴って複数のピットが検出されたものである。壁・壁溝など是一切検出されていないため、本住居跡の規模・平面形は不明である。

本住居跡に属すると思われるピットは11本で、4 m × 4 mの範囲に散在する。遺構検出面からの深さは15～50cmを測るが、炉床面下から検出されたP 5、埋甕掘り方中に所在するP 3などは柱穴とは考えがたいものである。また、炉跡と調査区壁が1 mと離れていないことから考えて、なお数本が調査区域外に存在する可能性が高い。したがって本住居跡の柱穴配置は不明である。

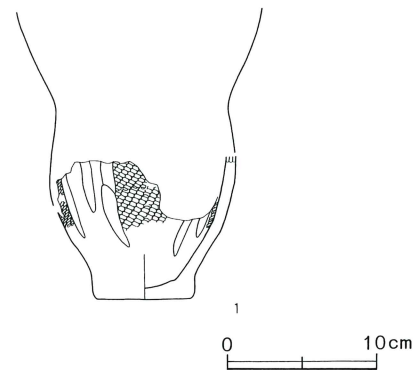
炉跡はピット群の東寄り、調査区壁から80cm程離れた位置に所在する。楕円形の地床炉で、長径82cm、短径75cm、深さ22cmを測る。しっかりとした掘り込みを持ち、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。炉床面には顕著な焼土の堆積がみられた。

炉床面南西で柱穴状のピットを検出したが、土層断面から判断して別時期の遺構の柱穴を切って炉が設定されたものと考えられる。

炉跡から南西に1 m程離れて埋甕を検出した。深鉢形土器の胴下半部を正位に埋設したもので、土器本体よりもかなり大きな掘り方を持っている。一部にトレンチャーによる攪乱を受けているが、掘り方部分の長径58cm、短径52cm、深さ25cmを測るものと思われる。埋設土器はこのピットの検出面に底部がわずかに掛かる状態で出土した。

埋甕の掘り方底面から、さらに1段深いピットが検出された。このピットは長径24cm、短径20cmの楕円形で、掘り方底面からの深さは30cmを測る。このピットが検出された位置は埋設土器が検出された位置とほぼ重なっている。このピットが本来土器が収まっていたスペースであるとするならば、本住居跡の埋甕は後世に著しい破壊を受けている可能性がある。埋設土器本

第78図 A区第33号住居跡出土土器



体の残存状態の悪さもこのことを物語るものではなからうか。

上記の埋甕を除いて、本住居跡に伴う遺物は出土していない。

出土土器（第78図）

1は埋甕である。比較的小型の深鉢で、キャリパー類に属するものと思われる。底部から胴下半部にかけて残存する。底部より若干上にくびれを持って、胴部へと接続する。3本一組の沈線を用いた磨消し懸垂文がみられる。地文はRL単節の縄文が縦位に施文される。

A区第34号住居跡（第79図）

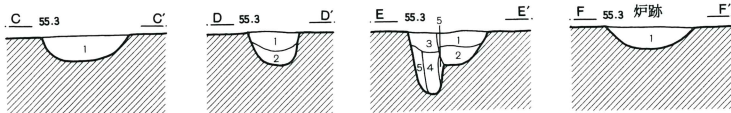
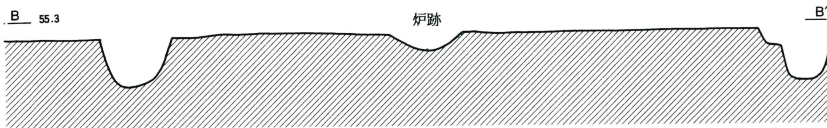
H-7区に所在する。炉跡を中心として径7 mの円形の範囲にピット群が集中するもので、北東の一部が調査区壁に掛かっている。壁・壁溝など是一切検出されていないため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向は不明である。

ピットは32本が検出された。円の外周に沿って並ぶものが多く、炉跡の北西と南東で密に分布している。壁柱穴構成をとるものとみられるが、詳細は不明である。深さは20～50cmである。

炉跡はピット群の中心やや南寄りに位置する。不整円形の地床炉で、径70cm、深さ12cmを測る。覆土中および炉床面における焼土の存在はさほど顕著ではない。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

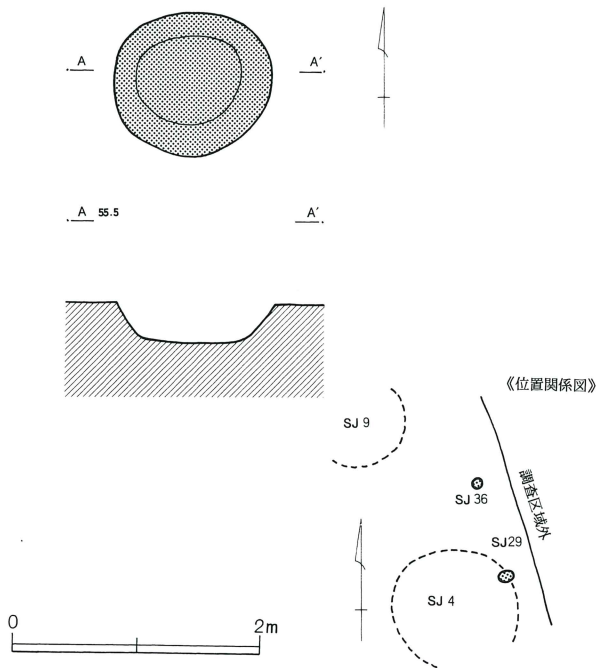
第79図 A区第34号住居跡



- A区S J 3 4
- 1 暗褐色土 : ロームブロックやや多く含む
縮まりやや弱
 - 2 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 縮
まりやや弱
 - 3 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
 - 4 黒褐色土 : ロームブロック少量含む
 - 5 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 硬
く縮まっている
- A区S J 3 4 炉跡
- 1 暗褐色土 : 被熱したロームブロック・焼
土粒子少量含む 縮まりあ
り、粘性欠く



第80図 A区第36号住居跡



A区第36号住居跡（第80図）

I-8区において炉跡が検出された。壁・壁溝・柱穴などが一切検出されていないため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向などは一切不明である。

炉跡は楕円形の地床炉で、長径62cm、短径58cm、深さ14cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

A区第37号住居跡（第81図・第82図）

F-6区に所在する。径4.4mの不整円形を呈する。壁溝は残りの良い部分で20cmを測る。壁溝は検出されなかった。

本住居跡からは炉跡が検出されていないが、住居跡中央と埋甕を結ぶ線を主軸と仮定した場合、N-9 1°-Eで、ほぼ東西に主軸を持つことになる。

床面上から6本のピットが検出された。深さは30~55cmを測る。いずれも壁から一定の距離をおいて雑然と並ぶもので、柱穴配置は不明である。

埋甕としたものは住居跡西壁から40cm程離れた地点に位置する。これは逆位の深鉢口縁部が床面から若干浮いて出土したものであり、いわゆる住居内埋甕の出

土状態とは異なる。したがってこの土器が覆土下層から床面の出土遺物である可能性もあるが、一方で本住居跡の床面が本来もっと上のレベルに存在した可能性もある。ここでは後者の立場から、この逆位の土器を埋甕と呼ぶこととした。

埋甕内堆積土の最上部からは小型の石皿1点が出土した。

本住居跡からは前述の埋甕のほかにも縄文時代中期後葉を中心とした土器片と少量の石器が出土している。

出土土器（第82図）

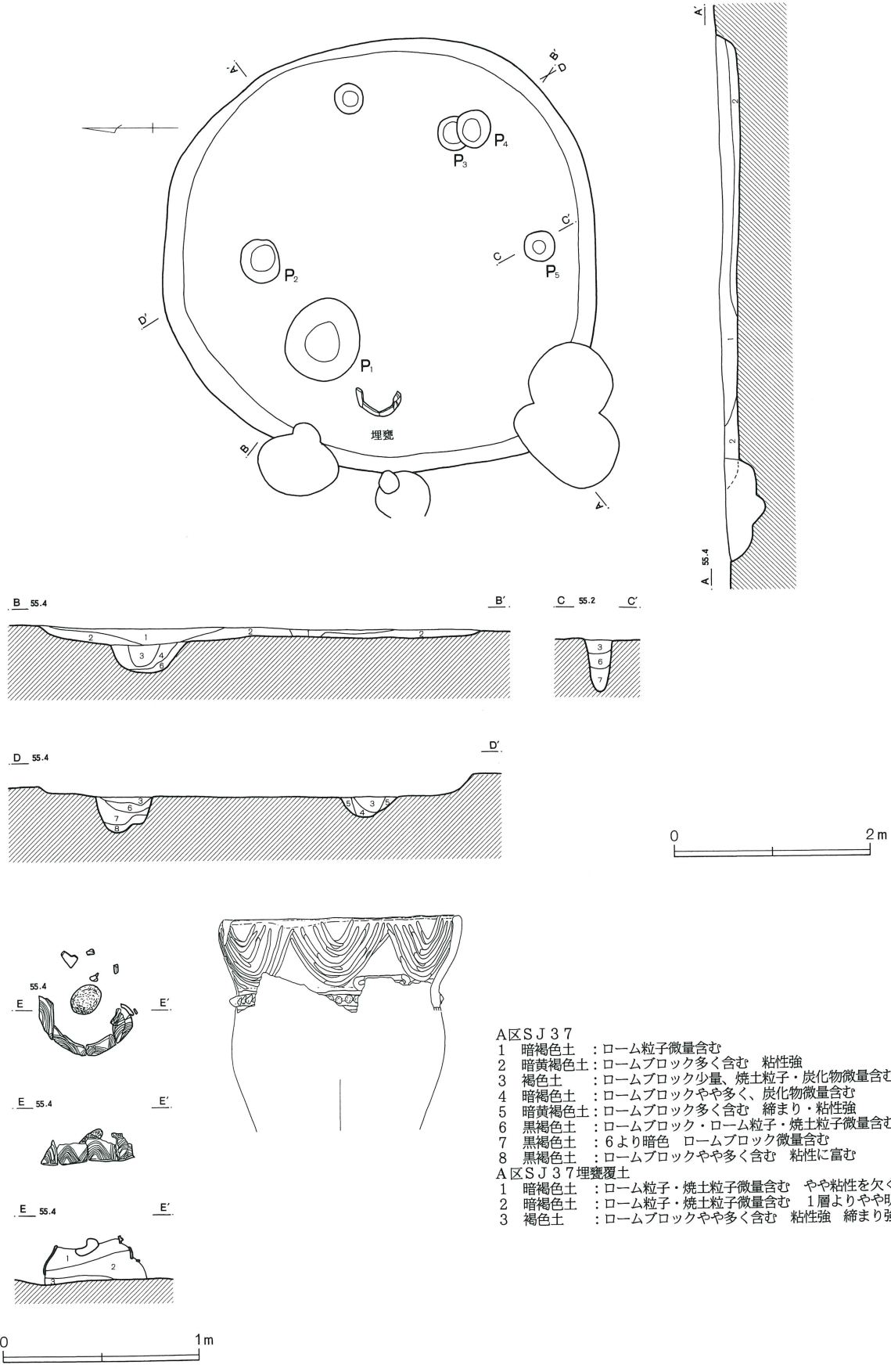
1は埋甕である。頸部から下を欠失しており、また残存する部分も後世の攪乱によって約1/3周を失っている。

曾利系の深鉢で、口縁は内湾しつつ立ち上がり、太い棒状の工具を用いた重弧文が施文される。胴部との境は刻みを有する断面3角形の隆帯によって区画される。隆帯区画と重弧文の間隙には両端閉塞するわらび手状の沈線が描き込まれる。現存高16cm、口径40cmを測る。

2・6はキャリパー類の深鉢口縁部である。隆帯による渦巻モチーフが描かれ、これに沈線によるなぞりが加えられる。3は同じくキャリパー類の深鉢胴部で、二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。4・5は地文のみ施文される胴部破片である。4は縦位の撚糸文、5は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

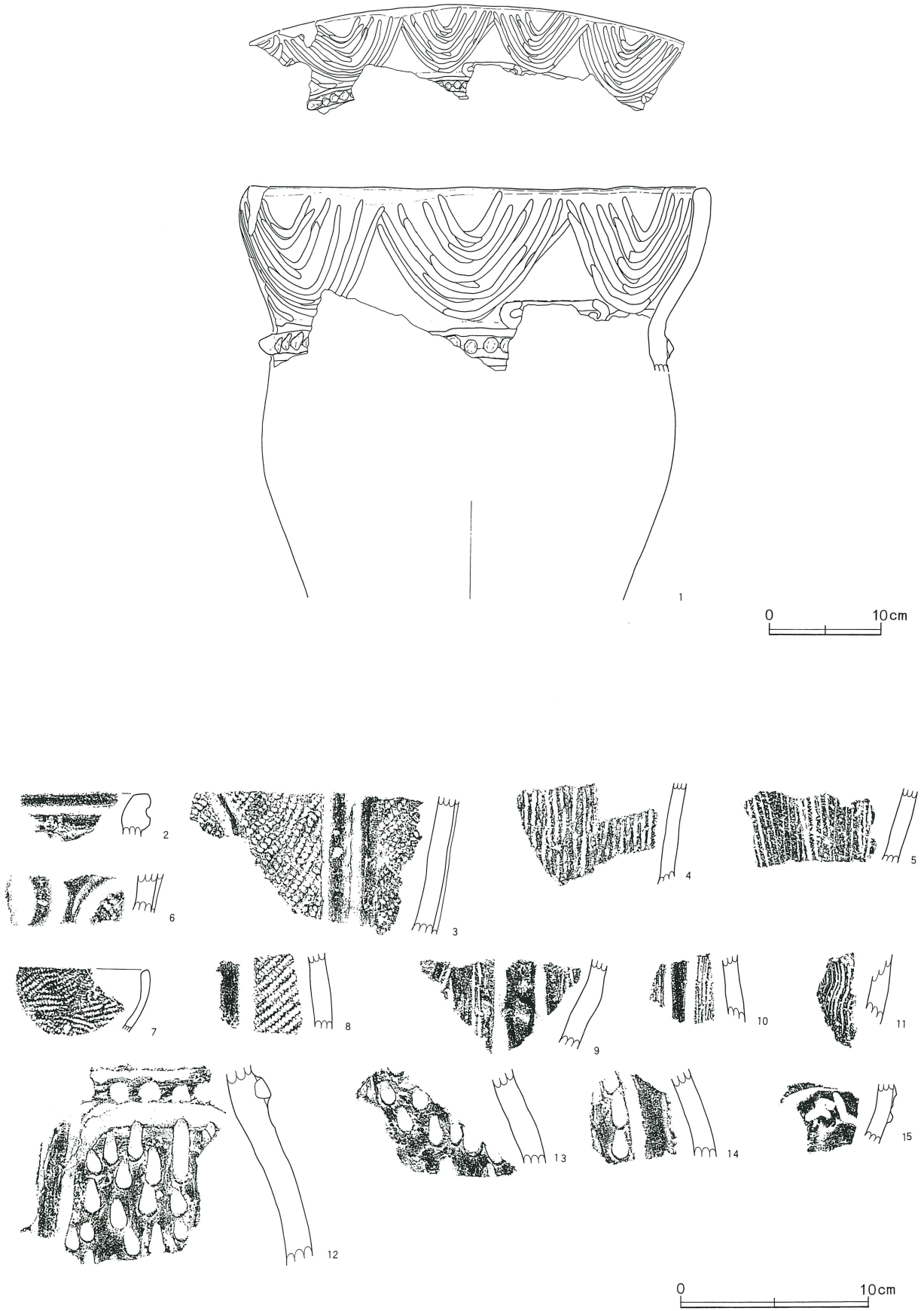
7は小型の深鉢口縁である。非常に薄手で繊細なつくりで、内面の調整・焼成とも良好である。LR単節の縄文が全面に施文され、それ以外に装飾はみられない。8~10は磨消し懸垂文の胴部である。8の地文はRL単節の縄文、9・10は櫛歯状工具による条線である。14は櫛歯状工具による条線が波状に施文される。12~14は曾利系深鉢の胴部である。頸部にくびれを持ち、胴部との境を刻みを有する隆帯によって横位に区画する。胴部には逆U字形の沈線区画が描かれ、区画内に雨だれ状の列点が充填される。

第81図 A区第37号住居跡



- A区S J 37
- 1 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
 - 2 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性強
 - 3 褐色土 : ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量含む
 - 4 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、炭化物微量含む
 - 5 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む 締まり・粘性強
 - 6 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子微量含む
 - 7 黒褐色土 : 6より暗色 ロームブロック微量含む
 - 8 黒褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性に富む
- A区S J 37埋蔵覆土
- 1 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子微量含む やや粘性を欠く
 - 2 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子微量含む 1層よりやや明色
 - 3 褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性強 締まり強

第82图 A区第37号住居迹出土土器



A区第39号住居跡（第83図～第88図）

E-6・7、F-6・7区に所在する。北西壁を第40・41号住居跡に、南壁を第29号住居跡に、北壁を第103号土壇にそれぞれ切られる。また、第102号土壇とも切り合い関係にあるが、両者の新旧関係は不明である。

径8mを測る円形の住居跡で、今回調査された単体の住居跡としては最も規模が大きい。主軸方向はN-3°-Eで、ほぼ南北に主軸を持つ。壁高は最も残りの良い部分で34cmを測る。壁溝は断続的ながらほぼ全周し、唯一南壁の一部で2.5mにわたって検出されなかった。このことは住居の出入り口周辺の構造と何らかの関わりを持つものかもしれない。壁溝に重複はみられなかった。

床面は部分的な凹凸はあるものの全体としては平坦であり、炉跡と南壁の間が外より幾分低くなっている。床面上からは無数のピットが検出されたが、うちP1～P6としたものが本住居跡に属するものであり、その他のピットはほとんどが切り合い関係にある他の遺構に属するものであろうと思われる。

本住居跡の柱穴は壁から一定の距離を保ちつつほぼ均等に配置されている。図中に示した6本に、第40号住居跡との切り合いのために検出できなかった1本を加えた、都合7本の柱穴が上屋を支えていたものと思われる。柱穴の深さは55～70cmである。

炉跡は床面ほぼ中央に位置している。長楕円形の地床炉で長径2.5m、短径1.3mを測る長大なものであるが、断面観察の結果からは新旧2時期の切り合いが想定できる。すなわち一旦住居中央に設定された炉が、後に奥壁寄りに移動されたものと思われる。

もっとも、壁溝や柱穴配置からは住居の規模や平面形態に大幅な改変があったとは思われず、上屋の建て替えを伴わない炉の付け替えだけが行われたものと考えられる。

遺物は覆土中層から下層を中心として多数が出土している。主体を占めるのは縄文時代中期後葉のものが出土している。

出土土器（第85図～第88図）

1は唯一の復元個体で、床面直上で出土した。口縁の一部と胴下半部を欠失する。表面および側縁を撫でつけた、非常に扁平な隆帯によって文様が描かれる点に特徴がある。

頸部にくびれを持ち、口縁は無文で内湾する。頸部には並行する隆帯間に波状の隆帯を充填した区画帯が横走し、胴部には二本隆帯を基調とした唐草文が描かれる。モチーフ間には1本や2本の隆帯による懸垂や三叉のモチーフが充填され、地文部分がいくつかの小区画に分割される傾向が顕著になりつつある。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。現存高32.8cm、口径38.4cmを測る。

2は連弧文系の土器である。口縁部から胴部中段にかけて残存する。水平口縁で、口唇が肥厚して内面に稜を形成する。口端上部は平坦である。

胴部にほとんどくびれを持たない寸胴のプロポーションである。口縁直下と胴部中段に3本ないし4本一組の平行沈線による区画を有し、この区画の間に波線化した連弧文が描かれる。連弧文は波頂部および波底部で対弧状の沈線によって上下の区画線と連結する。こうしたモチーフの接点には円形やC字状の短沈線が描き込まれる。

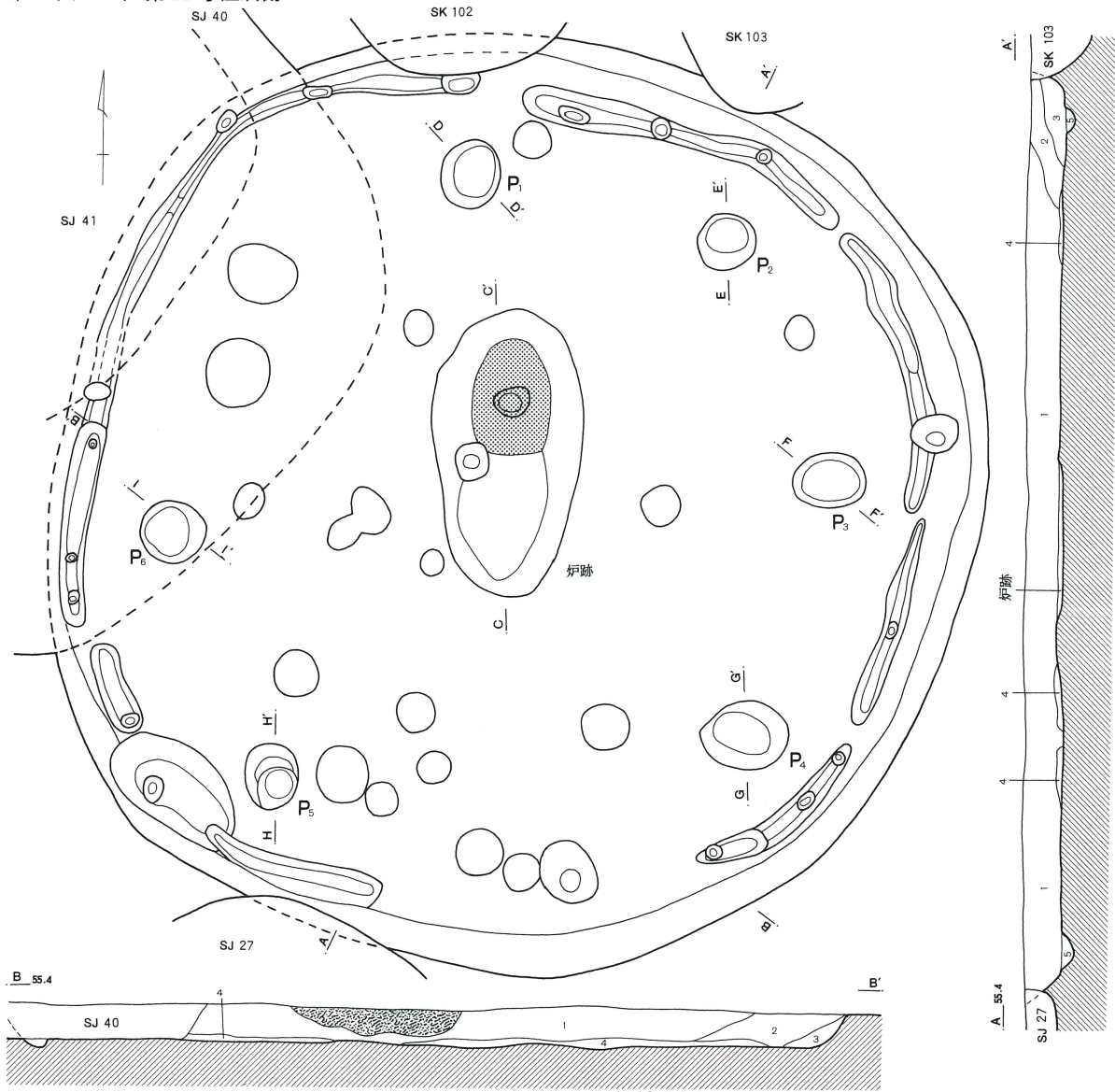
地文は半裁竹管状工具による集合沈線が縦位に施文される。現存高28cm、最大径52cmを測る。

3はキャリパー類深鉢で、無文の頸部である。全面に斜位の研磨が観察される。胴部との境は隆帯によって区画される。現存高8.3cm、最大径31.8cmを測る。

4は小型の深鉢で、連弧文系の土器である。胴部下段で軽微に外反するほかは口縁に向かってほぼ一本調子に開くコップ形の土器で、器形の上では2の個体に類似するものと思われる。口縁部直下および胴部中段に平行沈線による区画を有する点も共通する。

口縁部区画の直下に三本沈線の連弧文が巡る。弧状モチーフの底から2本ないし三本沈線の懸垂文が垂下し、胴部中段の区画へと連結する。モチーフの接点には円形やC字の短沈線が描き込まれる。

第83図 A区第39号住居跡



A区S J 39

- 1 黒褐色土 : ローム粒子多く、焼土粒子やや多く含み、炭化物少量含む 締まり強
- 2 暗褐色土 : ローム粒子多く含み、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 3 暗黄褐色土 : 再堆積ローム 締まり強
- 4 暗黄褐色土 : ロームと褐色土の混土 貼り床の一部か 締まり強
- 5 褐色土 : くすんだロームと褐色土の混土 締まりやや強
- 6 黒褐色土 : ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 7 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 8 暗黄褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子やや多く含み、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり強
- 9 褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含み、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり弱 埋土
- 10 暗黄褐色土 : ロームブロック多量、ローム粒子少量、炭化物微量含む 締まり強

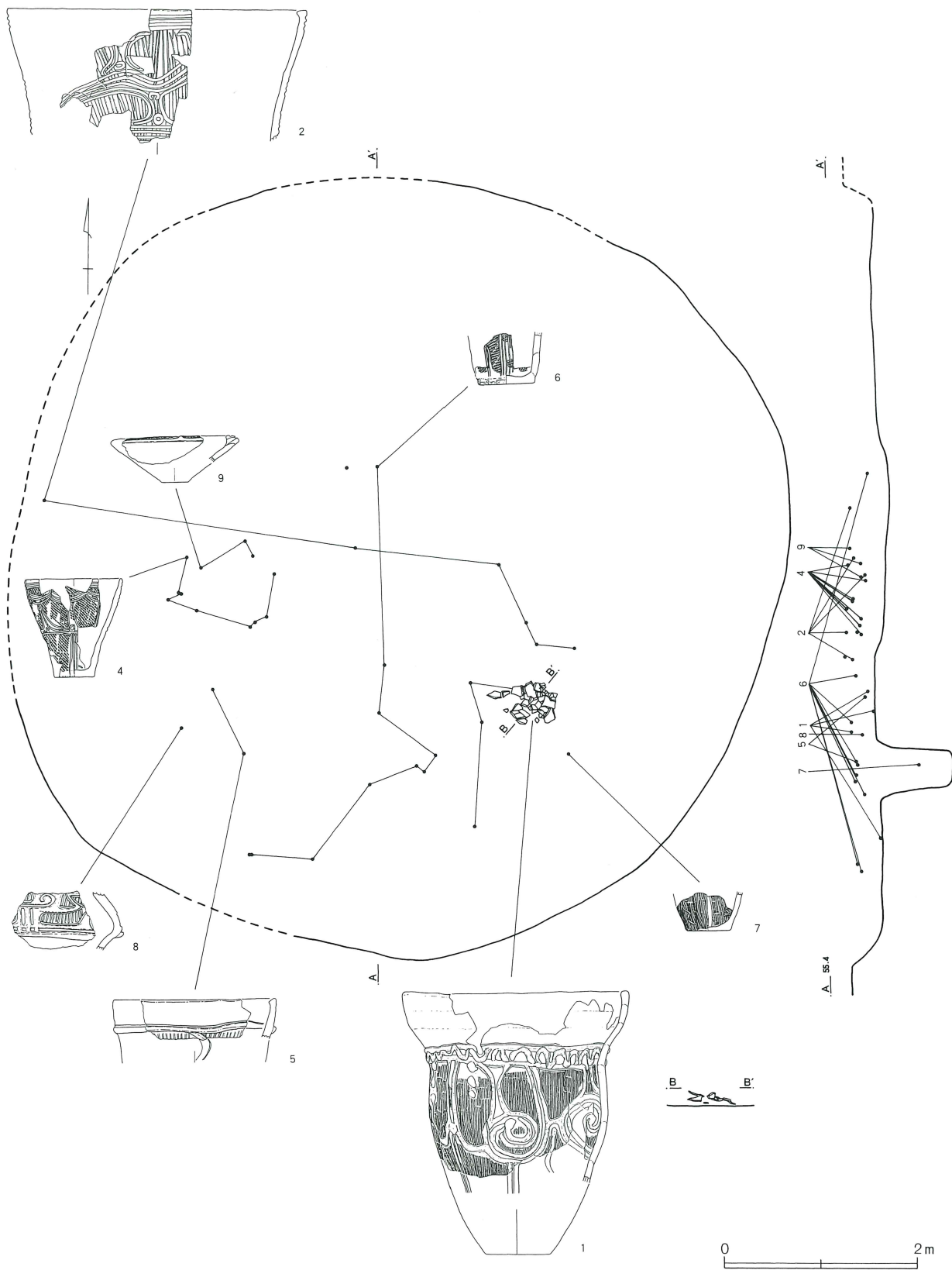
A区S J 39 炉跡

- 1 黒褐色土 : 焼土粒子やや多く含み、ローム粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 2 黒褐色土 : 焼土粒子多く、ローム粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 3 暗黄褐色土 : ローム粒子多く、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 4 黒褐色土 : ローム粒子多く、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 5 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック多く含み、焼土粒子少量、炭化物微量含む 締まり強
- 6 焼土層
- 7 黄褐色土 : 被熱した再堆積ローム 炉跡掘り方に伴う埋め戻し

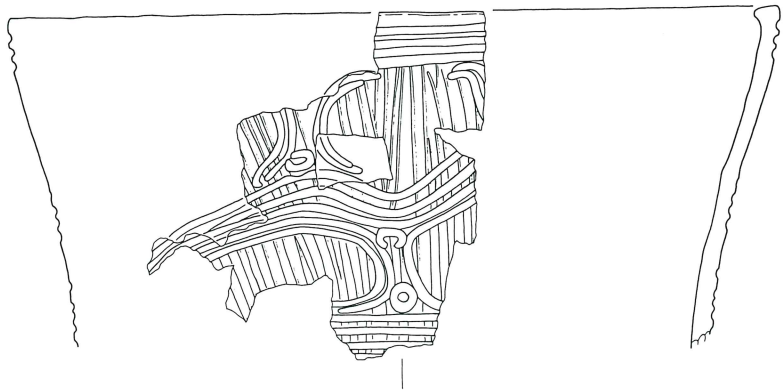
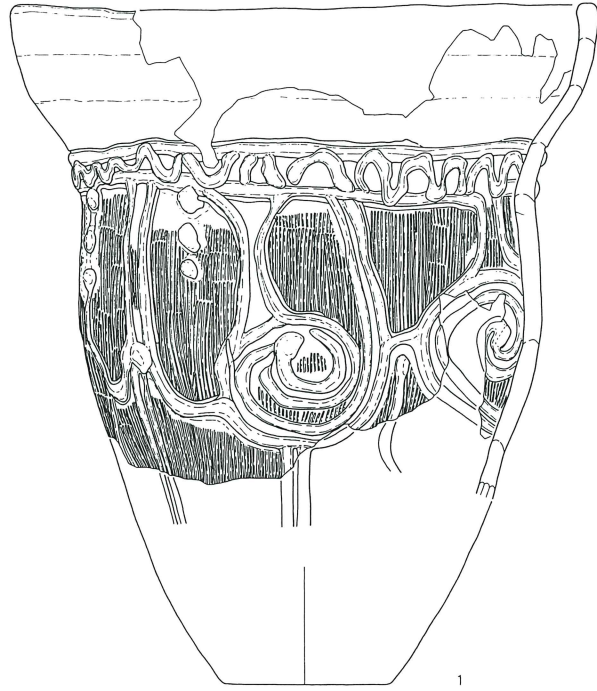
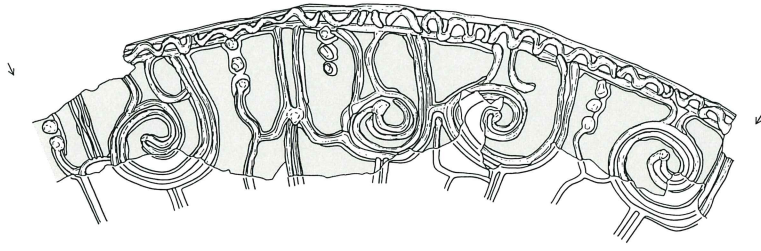
※ 1・2・3は新炉に、4・5は旧炉にそれぞれ属するものと思われる



第84图 A区第39号住居跡遺物分布图

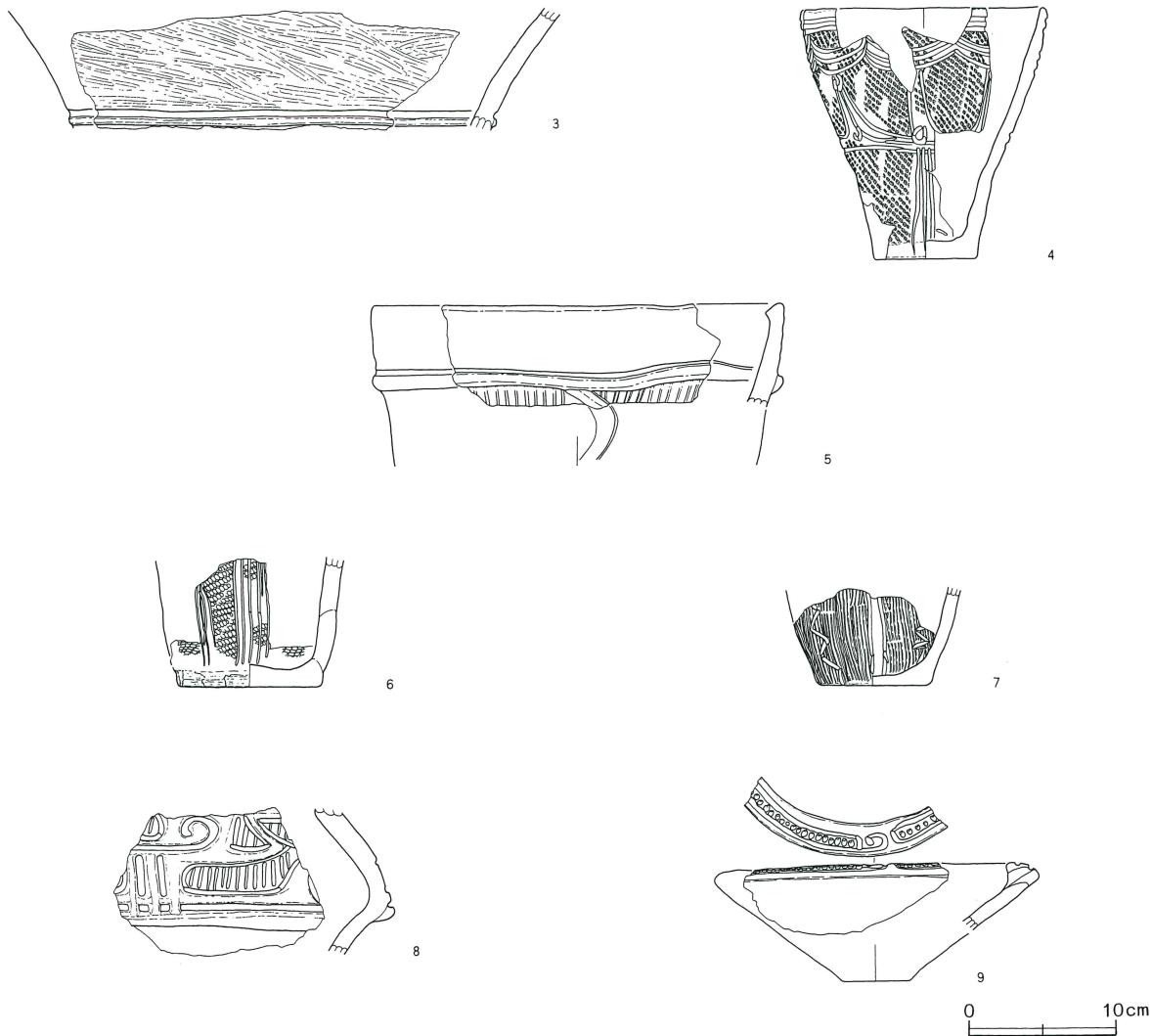


第85图 A区第39号住居迹出土土器(1)



0 10cm

第86図 A区第39号住居跡出土土器（2）



胴部中段の区画からは三本沈線の懸垂文が器面の4方向に垂下する。上下の懸垂文の単位数は一致しておらず、胴上半部と下半部の文様の割り付けは別々の規制のもとに行われている。

地文はRLR複節の縄文が縦位回転で施文される。現存高17cm、口径17cm、底径6.8cmを測る。

5は円筒形の深鉢の口縁部である。口唇は内削ぎ状で、内面は肥厚して稜を形成する。口縁部は無文で、外面に1条の隆帯を巡らせて胴部文様帯との境を区画している。

胴部には一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。地文は半裁竹管状工具による集合沈線が縦位に施文される。現存高7.1cm、最大径28cmを測る。

6・7はいずれもキャリパー類深鉢の底部である。

6はわずかに外傾する円筒形で、底部周辺に横方向の削りを施して胴部との間に段を形成する。

半裁竹管状工具の平行沈線による懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文が斜め方向に回転施文される。現存高8.8cm、底径8.4cmを測る。

7は6に比べやや胴張りの器形で、棒状工具による平行沈線と、同じ工具による蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。現存高6.4cm、底径8.2cmを測る。

8は浅鉢胴部である。胴部中段がくの字に張り出し、隆帯による横位の区画が巡らされる。

胴上半部にキャリパー類の口縁部文様帯に由来する隆帯渦巻文が展開する。渦巻の一端には剣先状のモチーフがみられる。

地文は棒状工具による縦位の集合沈線である。胴上半部は無文で、横位の研磨が施される。現存高4.9cmを測る。

9は小型の浅鉢である。胴部中段から口縁にかけて直線的に開き、口唇は断面L字形に内屈する。文様帯はこの口端部上のごく限られたスペースに存在し、それ以外は無文である。

文様モチーフは沈線による渦巻文の両側に楕円形の区画が配されるもので、基本的にはキャリパー類深鉢の文様が転写されたものである。楕円区画内部には棒状工具先端を用いた列点文が充填される。現存高4.8cm、最大径22.4cm、口径18.2cmを測る。

10・11は勝坂系の土器である。10は刻みを伴う隆帯により窓枠状の区画が描かれる。11は縦2分割された貼付文が施文される。

12～25はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。12～14は二本隆帯により横S字文や大柄の渦巻文が描かれる。地文は12がLR、13はRLの縄文、14は縦位の撚糸文である。16は同種の口縁部文様帯で、地文は棒状工具の集合沈線である。

15、19～22は隆帯+沈線により横位の入り組みモチーフが描かれる。21は波状口縁で、口縁直下にも入り組み状のモチーフが描かれる。

17は文様帯下端部の破片である。モチーフ末端の渦巻文が区画隆帯と接する部分である。18は横位の隆帯区画と文様モチーフの間を数本の隆帯によって連結する。

23は口縁部文様帯の下端がくの字に張り出すもので、浅鉢胴上半部の文様帯である可能性もある。隆帯による楕円形の区画内にハの字状の沈線が充填される。頸部との間を隔てる隆帯上にはわらび手状の沈線が描かれる。24は剣先状に変化する小振りの渦巻モチーフで、やはりくの字に張り出す文様帯下端の部分であり、浅鉢の胴部の可能性もあるものである。25もこれに近い部分で、頸部に無文帯がみられる。

26は頸部無文帯である。口縁部文様帯との境が1条の隆帯で区画される。27も同一部位で、口縁部文様帯

は縦位の撚糸文を地文とする。28は頸部無文帯と胴部文様帯の境界部分で、隆帯+沈線による区画がみられ、胴部には縦位の撚糸文が施文される。

29～31は胴上半部で、頸部と胴部を区画する横位の隆帯がみられ、29・30は蛇行懸垂文、31は二本隆帯の懸垂文が垂下する。

32～36は隆帯による各種の懸垂文の垂下する胴部から底部の破片である。34は交互刺突を伴うジグザグの隆帯である。

36の底部は裾部分がタガ状に張り出し、これに隆帯懸垂文が連結してパネル状の区画文的な効果を生みだしている。

37の口縁部は全面にRL単節の縄文が施文され、口縁直下に半裁竹管状工具によるごく浅い平行沈線が巡る。

38～41は地文上に半裁竹管状工具の平行沈線文が描かれるものである。38は頸部無文帯と胴部との境を半裁竹管状工具による粗雑な平行沈線によって区画し、この区画の下に沿って同一工具による波状線が巡る。地文は縦位の条線である。

40・41は半裁竹管状工具による蛇行懸垂文である。40の地文は縦位の撚糸文、41はLR単節縦位回転の縄文である。

42は棒状工具による深い1条の沈線で描かれる蛇行懸垂文である。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

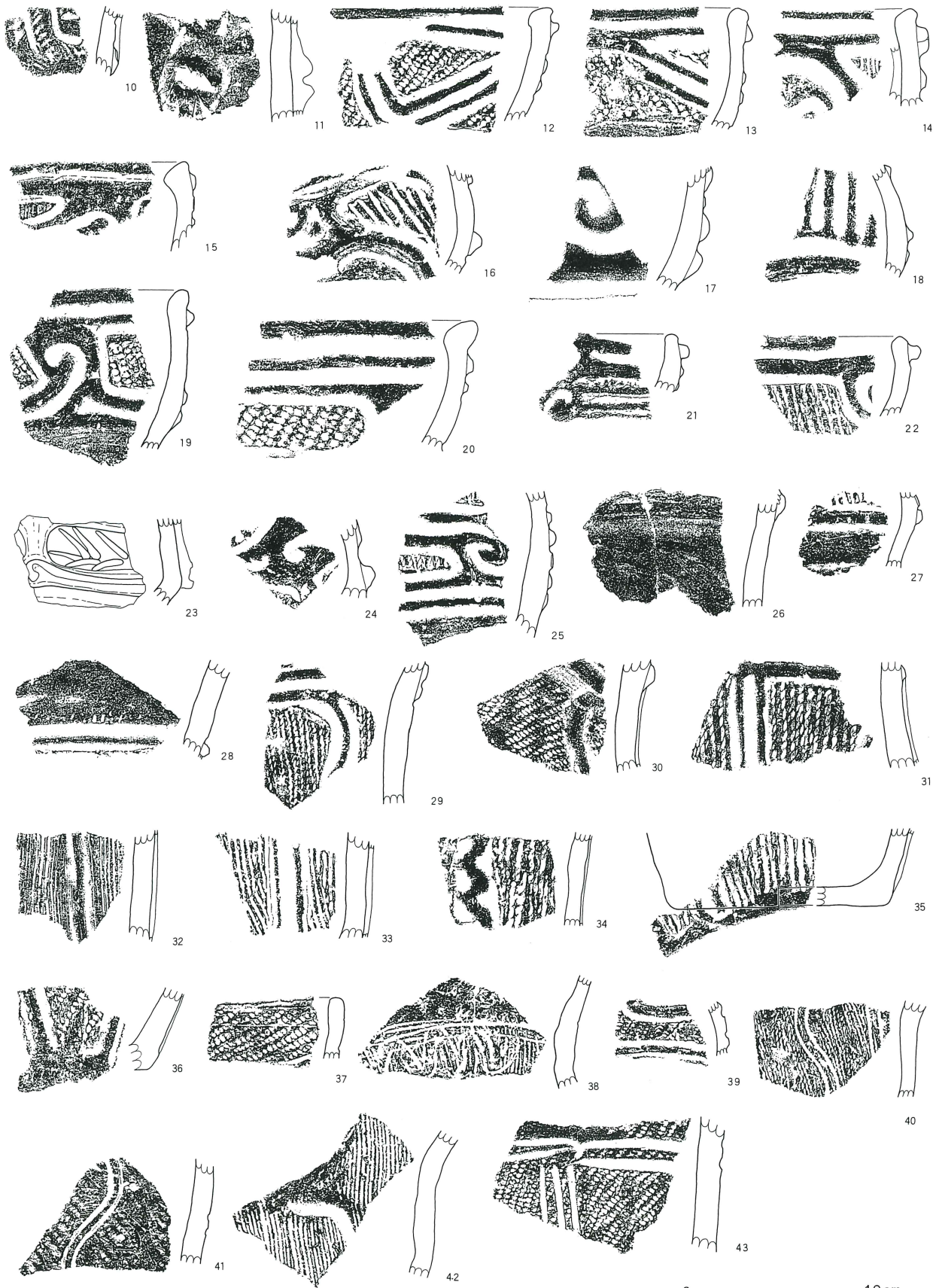
43は棒状工具による横位の平行沈線により器面を区画し、下段に3本一組の沈線が垂下する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。44・45は平行沈線によって器面が縦横に分割される。地文は櫛歯状工具による条線である。

46は連弧文系の深鉢口縁部である。口縁直下に3条の沈線が巡る。地文は櫛歯状工具による条線である。

47・48は半裁竹管状工具による縦位の集合沈線が施文される破片である。

49は曾利系の深鉢口縁部である。波状口縁で、口唇断面角頭棒状を呈する。半裁竹管状工具による集合沈

第87图 A区第39号住居迹出土土器(3)



第88图 A区第39号住居迹出土土器(4)

